

ヴォルガ・ドイツ人と大飢饉——1921-22年を中心に

[ 課題番号 17530274 ]

平成 17～19 年度科学研究費補助金 [基盤研究 (C)]

研究成果報告書

平成 20 年 3 月

研究代表者

鈴木 健 夫

早稲田大学政治経済学術院教授

## はしがき—研究の目的

本研究では、18世紀末のエカチェリーナ2世の政策以後ヴォルガ地方と南部ロシアに入植したドイツ人(ロシア・ドイツ人)のうちヴォルガ地方に定着したドイツ人(ヴォルガ・ドイツ人)を対象として、大飢饉という悲劇的な極限状況における彼らの生活・運命の実態を、ヴォルガ・ドイツ人の側に視点をおいて、社会経済史的に解明した。ロシアの歴史においては頻繁に飢饉が農村を襲っており、とくに帝政期の1891-92年、ロシア革命直後の1921-22年、そしてスターリン時代の1932-33年の飢饉は「大飢饉」として知られているが、本研究では、主として1921-22年大飢饉を対象を絞り、この大飢饉の被害状況・民衆および政府の対応・外国援助を解明し、大飢饉をめぐる時代状況がロシア・ソ連史、移民史にとってどのような歴史的意味をもっていたかを検討した。

## I 研究の概要

### (1) 研究種目・課題番号・研究課題

基盤研究(C)

17530274

ヴォルガ・ドイツ人と大飢饉——1921-22年を中心に

### (2) 研究組織

研究代表者 鈴木健夫(早稲田大学・政治経済学術院・教授)

### (3) 交付決定額 (金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
平成17年度	1,200,000	0	1,200,000
平成18年度	800,000	0	800,000
平成19年度	100,000	30,000	130,000
総計	2,100,000	30,000	2,130,000

#### (4) 研究成果

##### 《平成 17 年度》

平成 17 年 8 月 21 日から 9 月 4 日までドイツ（フランクフルト大学図書館、バイエルン国立図書館、ミュンヘン大学図書館、外国関係研究所図書館、ドイツ・ロシアドイツ人協会）に、同年 12 月 16 日より同月 24 日までアメリカ（ネブラスカ州歴史協会図書館、ネブラスカ大学図書館、アメリカ・ロシアドイツ人歴史協会図書館）に、平成 18 年 3 月 11 日より同月 21 日までロシア（ロシア国立図書館、国立サラトフ文書館、ペンザ教育大学図書館）に出張・史料蒐集。関連文献を購入。蒐集した史料・文献のこれまでの分析からとくに以下の成果を得た。

- ① 1921-22 年にヴォルガ地域を襲った大飢饉——それはロシア全域に及んだ——の原因を解明するための基礎研究として、第 1 次世界大戦・社会主義革命・内戦という激動期にヴォルガ・ドイツ人が置かれていた厳しい状況、とりわけ彼らに対する食糧徴発の実態について貴重な新しい情報を得た。この情報はとりわけロシア人の新しい研究による。
- ② 大飢饉のときの実際の天候、穀物の不作状況などについて貴重な新しい情報を得た。この情報はとりわけ当時の雑誌・新聞に掲載された記事の分析による。
- ③ 大飢饉のときのヴォルガ・ドイツ人の飢餓・餓死状況について貴重な新しい情報を得た。この情報はとりわけ彼らが当時ドイツやアメリカに書き送った手紙の分析による。
- ④ ヴォルガ・ドイツ人が当時ドイツやアメリカに書き送った手紙の紹介を中心とする論文草稿「ヴォルガ河に鳴り響く弔鐘——1921-22 年飢饉とヴォルガ・ドイツ人」を執筆した。

##### 《平成 18 年度》

平成 18 年 8 月 13 日から 29 日までドイツ（ミュンヘン大学図書館、バイエルン国立図書館、外国関係研究所図書館、バーデン・ヴュルテンブルク州立図書館、シュトゥットガルト大学図書館）とスイス（チューリヒ大学図書館、チューリヒ市立図書館）に出張して収集した関連資料および日本で購入した外国語文献を分析した。また、1920-30 年代にヴォルガ地方在住のドイツ人がアメリカ在住の親類に書き送った手紙（旧字体ズエターリン文字の手書き、コロラド州在住 Paul Flitzer 氏所蔵）17 通を Eike Grossmann 氏の助力により現代ドイツ語文字に翻字し、解読した。その結果、次のような研究成果を得た。

- ① 1921-22 年の大飢饉の背景（第 1 次世界大戦、社会主義革命、内戦）と現実（食糧徴

発、飢饉、飢餓) について新たに貴重な情報を得、平成 17 年度の研究成果をさらに深化させた。この情報はとりわけ当時の資料——新聞・雑誌 (Unsere Wirtschaft、Der Wolgadeutsche、Wolgadeutsche Monatshefte 等) 掲載記事、アメリカへの手紙 (上記)、政府側のスイス人活動家 Ernst Derendinger の著作等——の分析による。

② 平成 17 年度に書いた草稿に加筆し、論文「ヴォルガ河に鳴り響く弔鐘——1921-22 年飢饉とヴォルガ・ドイツ人」(奥田央編『20 世紀ロシア農民史』社会評論社、平成 18 年 11 月所収) を公表した。

③ ヴォルガ・ドイツ人女性アンナ・ヤネツケの手記 (平成 17 年度に出張したアメリカ・ロシアドイツ人歴史協会図書館に所蔵、タイプ原稿、) を分析して、飢饉・飢餓を生き抜いた彼女の人生を紹介する論文の執筆を進めた。

④ ヴォルガ・ドイツ人の外国への手紙 (飢饉時) を資料集にまとめる作業を進めた。

#### 《平成 19 年度》

研究課題に関連する図書をノースダコタ大学図書館内の《Germans from Russia Heritage Collection》から購入し、その図書の分析をも踏まえ、平成 18 年度に分析を開始していたヴォルガ・ドイツ人女性アンナ・ヤネツケの半生について、論文「ヴォルガ・ドイツ人女性アンナの生の軌跡——戦争・革命・内戦・飢餓・国外脱出」(鈴木健夫編『地域間の歴史世界——移動・衝突・融合』早稲田大学出版部、平成 20 年 3 月所収) を執筆した。また、ヴォルガ・ドイツ人が飢饉時に外国に送った手紙 (飢饉時) を資料集としてまとめる作業をした。他に、サラトフ大学のゲルマン (A. A. Герман) 教授とプレーヴェ (И. Р. Плева) 教授の共著 *Немцы Поволжья : Краткий исторический очерк* (Саратов, 2002) を半谷史郎氏と共訳し、『ヴォルガ・ドイツ人——知られざるロシアの歴史』(彩流社、平成 20 年 3 月) として出版した。

#### (5) 研究発表

##### 論文

- \* 鈴木健夫「ヴォルガ河に鳴り響く弔鐘——1921-22 年飢饉とヴォルガ・ドイツ人」、奥田央編『20 世紀ロシア農民史』社会評論社、2006 年、253-289
- \* 鈴木健夫「ヴォルガ・ドイツ人女性アンナの生の軌跡——戦争・革命・内戦・飢餓・国外脱出」、鈴木健夫編『地域間の歴史世界——移動・衝突・融合』早稲田大学出版部、2008 年、233-285

## 翻訳

- \* アルカージョー・A・ゲルマン／イーゴリ・R・プレーヴェ著『ヴォルガ・ドイツ人——知られざるロシアの歴史』、鈴木健夫・半谷史郎共訳、彩流社、2008年3月刊行予定

## II 研究内容

### 論説

ページ

- 1 ヴォルガ河に鳴り響く弔鐘  
——1921-22年飢饉とヴォルガ・ドイツ人・・・・・・・・・・7
- 2 ヴォルガ・ドイツ人女性アンナの生の軌跡  
——戦争・革命・内戦・飢餓・国外脱出・・・・・・・・・・36

### 資料

- 1 1921-1922年飢饉とヴォルガ・ドイツ人：現地からの証言・・・・・・・・・・75
- 2 飢饉に苦しむヴォルガ地方の親類からの手紙（17通）：Paul Flitzler氏  
（コロラド州在住）所蔵の手紙（Eike Grossmann氏による原文ズェテーリン  
文字から現代ドイツ語文字への翻字）・・・・・・・・・・109

ヴォルガ河に鳴り響く弔鐘——1921-22年飢饉とヴォルガ・ドイツ人

はじめに

1920年代初頭にロシアを襲った大飢饉<sup>1</sup>は、18世紀末以降の入植によりヴォルガ河流域・黒海沿岸地域・西部諸県に少数民族として生活していたドイツ人にとっても、もちろん例外ではなかった。そればかりかドイツ人は、彼らのおかれていた立場から、世界大戦・革命・内戦・社会主義建設と続くロシアにおいて、ロシア民衆の悲惨な状況とはまたちがった、厳しい飢饉・飢餓の状況に遭遇することになる。

本稿は、そうしたロシア・ドイツ人のうちヴォルガ河流域のドイツ人の飢饉・飢餓の状況について、現地から彼らがドイツおよびアメリカに書き送った手紙や報告、またドイツから当地に救済のために赴いたドイツ人医師の報告などの紹介を交えながら、検討しようとするものである。

ヴォルガ地方のドイツ人は、他の地域のドイツ人と同じく、1871年以降はロシア帝国の臣民としてロシア化政策の波に呑み込まれ、さまざまに同化を強いられたが、第一次世界大戦のさなかにおこった社会主義革命（1917年10月）後の1918年10月、沿ヴォルガ（パヴォルジエ）・ドイツ人自治州（勤労コミューン）として、ソヴィエト共産党支配下においてその「民族的自治」が認められることになる。ヴォルガ河の右岸（山地側）・左岸（草地側）に居住していたドイツ人の入植地は200以上、人口は1920年の人口調査によれば45万2629人を数えたが<sup>2</sup>、沿ヴォルガ・ドイツ人自治州はその後、領域を拡張され、1924年1月には沿ヴォルガ・ドイツ人自治共和国に昇格している。

このヴォルガ・ドイツ人が1920年代初頭にどのような飢饉に遭遇したか、議論は第一次世界大戦から始めなければならない。

### 1 第一次世界大戦・社会主義革命・内戦

1914年は、ヴォルガ地方に居住するドイツ人にとっては、エカチェリーナ2世の誘致により自分たちの祖先がこの地に入植してからちょうど150年という記念すべき年であり、祝賀の行事が計画されていた。しかし、同年7月に第一次世界大戦が勃発すると、ロシア

在住のドイツ人は敵国人となり、さまざまな厳しい運命に遭遇した。予定されていた 150 年祭は中止の憂き目に会った。それだけでなく、若者はロシア軍兵士として母国との戦争に狩り出された。彼らは西部戦線でロシアが敗北した後にはカフカースのトルコ戦線に送られ、ここで多数の戦死者を出した。

他方、国内のドイツ人学校はロシア化され、また子供をロシア人の学校に行かせることを強制され、ドイツ語の使用が禁じられた。ドイツ語での会話が許されず、ドイツ語の標識が姿を消し、ドイツ語の新聞は停刊を強いられ、教会のミサもロシア語で行わざるを得なくなり、それに抵抗する牧師はシベリアに送られた。ヴォルガ地方のドイツ人村はすべて 1915 年にロシア語の名称に改められた。1915 年 5 月 27 日にはモスクワで破壊的な反ドイツ人暴動がおこったが、こうした動きの背後には、19 世紀末以来ロシア人のあいだに顕著になっていた反ドイツ人意識があった。

大戦勃発後、ゴレムィキン首相は「われわれはドイツ帝国に対してだけでなくドイツ人に対して戦争を遂行するのだ」と通告した。西部諸県のドイツ人に対する土地所有権剥奪・不動産売却の法律が 1915 年 2 月 2 日にニコライ 2 世によって発せられた。こうした処置はドイツ人だけでなく、同地域に住むオーストリア人、ハンガリー人、トルコ人など敵国人に対しても講じられたが、ともあれドイツとの国境に近いロシア西部・南部に居住していたドイツ人に対して、強制的な財産没収、知識人（牧師、教師、法律家など）逮捕、シベリア・中央アジア・ウラル地方への追放が行われた。総数 10 万人を越えるドイツ人の追放が 1915 年から 1916 年にかけて行われ、その 2 分の 1 から 3 分の 1 はその過程で死亡したといわれる。

ドイツ国境地域のドイツ人に対するこのような措置はヴォルガ地方にもいつ及んでくるかわからない状態にあったが、これは単なる杞憂に終わらなかった。1915 年 12 月 13 日には「ヴォルガ・ドイツ人を 1917 年 2 月以降シベリアに強制移住させる」という勅令の準備が始められ、そして実際に 1917 年 2 月 6 日にはヴォルガ・ドイツ人に対する土地没収令が発せられた。同月 26 日には 200 万人のロシア・ドイツ人に対して穀物・財産・家畜・役馬没収令が発せられ、ヴォルガ・ドイツ人の入植地にロシア軍隊を進駐させることが命ぜられ、さらにヴォルガ・ドイツ人の強制移住も決定されたのである。司教ケスラーは、「この日、私は、サラトフの私の神学校で男たち——年老いた男たちしかいなかった——に対して、私たちが絶滅から救うために奇跡のおこることを祈らせた」と述べている。ところが、この直後、ペトログラートに革命がおこったのである。サラトフにはすでに 1800 人のコサ



ック騎馬兵が無防備の村々を襲撃し、殺人・略奪行為を行い、住民を四散させようと準備していたが、革命勃発により、先の没収令は完全には実行されずに終わった<sup>3</sup>。

\*

ところで、1917年の二月革命後にロシアに居住するドイツ人は結集する動きを見せ、同年4月20-23日にモスクワで第1回ロシア・ドイツ人会議が開かれたが、ヴォルガ・ドイツ人自らも民族的運動を開始し、その直後の同月25-27日にはサラトフで沿ヴォルガ・ドイツ人大会が開催された。大会は中央委員会を組織し、機関紙として、追放先のシベリアから3月に帰還したばかりの牧師ヨハネス・シュロイニングを編集主幹とした『サラトフ・ドイツ民族新聞』(Saratower Deutsche Volkszeitung)を発行した。この組織はその後、ドイツ人入植地で甚大な影響力をもつ存在となる。こうした民族的な運動とならんで、当初は大した影響力をもたなかったものの社会主義者による動きもおこり、6月1-2日にはサラトフで沿ヴォルガ・ドイツ人社会主義者同盟の創立大会が開催され、社会民主労働党のドイツ語新聞『入植者』(Der Kolonist)がその機関紙となった。

1917年10月、ボリシェヴィキによる革命が勝利し、平和、自由、土地、パンが全人民に約束された。ヴォルガ・ドイツ人のなかでは、富裕な人びとや教会、そして一部の知識人はボリシェヴィキによる権力奪取を非難し、その「反民主的」処置に憤りを露わにしたが、民衆のなかには大きな希望を抱くものも多かった。しかし、そうした希望も、ボリシェヴィキ権力がヴォルガ地方に確立されていくなかで、つかのまのことでしかなかった。

1918年2月にヴァーレンブルクで開催されたノヴォウゼンスク郡入植地代表者会議でヴォルガ・ドイツ人の自治についての問題がはじめて提起され、審議の結果、ソヴィエト政府に対して自治権付与の請願を行うことが決議された。しかし、この請願が入植地の代表たちだけで行われることはなかった。先に旗揚げしていた社会主義者同盟は、民族的ブルジョアジー勢力の台頭およびロシア人プロレタリアートとの連帯の妨害という懸念から自治獲得に反対の議論も内部にあったが、最後にはモスクワへの代表団に自分たちのメンバーを送り込み、この問題の主導権を握ることとなった。4月、中央政府の民族問題人民委員部は代表団との交渉の結果、「ソヴィエトの原則に基づいたドイツ人勤労大衆の自治」の組織化をスターリンの名において承認し、「共産主義者・国際主義者」の捕虜2人、ドイツ人兵士ロイターとハンガリー兵士ペティンをサラトフに送り込み、沿ヴォルガ・ドイツ人問題委員部(コミッサariat)を組織させた。その後この委員部が中心になり、入植地代表者会議が開催され、「住民のほとんどがロシア語を知らない」各入植地にソヴィエトが組織され、

入植地ソヴィエト大会が開催され、自治の問題が議論された。当時「ドイツ人の村では、読み書きのできない唯一のロシア人である牛飼いがソヴィエト議長となり、夜番が国民教育人民委員に任命された」というような事態もおこっていた。委員部のメンバー全員は9月に社会主義者同盟から組織替えされたドイツ人共産主義者党のメンバーとなるが、委員部は自治問題についてソヴィエト政府と交渉を重ね、10月17日、政府は、暗殺未遂の負傷の癒えたレーニン出席の会議で「ソヴィエトの原則にしたがった」自治州の創設を決定し、その直後に開催された第2回入植地ソヴィエト大会でその報告は嵐のような歓呼のなかで迎えられた。こうして沿ヴォルガ・ドイツ人自治州（勤労コミューン）が成立し、それを構成するマルクスシュタット、ゼールマン（ロヴノエ）、バルツァーの3郡の領域が決められた。この間、内戦が激しくなるなか赤軍部隊が当地に結成され、ソヴィエトの秩序が「狡猾に、また力づくで」導入されていったのである<sup>4</sup>。

\*

1918年夏、ヴォルガ地方は軍事的・政治的に緊迫していた。5月にウラルで反ボリシェヴィキの蜂起をおこしたチェコスロヴァキア軍団が、そしてこの動きに呼応して立ち上がったエスエルその他の反対勢力がこの地方に進出し、また白軍が南西部とウラルから進撃してきており、反革命軍と革命軍との前線はドイツ人植民地に接近していた。こうした状況の中で、沿ヴォルガ・ドイツ人問題委員部は、住民のあいだで赤軍支援活動を行い、食糧・馬・馬車などを住民から調達し、男性を大量に赤軍に動員した。この時期に委員部の何の合意なしに県・郡から派遣された赤軍部隊は、住民に対する穀物・財産の徴発、軍税の賦課、人的動員を強制的に行い、抵抗には銃殺を含む残酷な懲罰で応えた。現地からは多数の苦情の電報が沿ヴォルガ委員部およびソヴィエト政府に届けられた。こうした赤軍部隊の行動に対して中央政府はその行き過ぎを厳しく指摘し、すべては軍司令部および沿ヴォルガ委員部の許可を必要とするという通達を出したが、10月の自治州創設後も、ドイツ人住民に対する赤軍の食糧徴発・没収・資金取立て・軍事動員は後を絶たなかった。

1918年12月にヴォルガ・ドイツ人の一中隊は南部戦線に送られドンバス解放に参加し、その後マフノ軍との戦いにも関与することになるが、徐々に整備・拡充されていったヴォルガ・ドイツ人の赤軍は、1919年の春には来襲してきたコルチャーク軍と、秋にはバルツァー郡南部を占領していたデニーキン軍と戦い、1920年になると南東戦線、ポーランド戦線、ウクライナのヴラーンゲリ軍との前線に送られた。

ヴォルガ地方は、以上のような赤軍・白軍の内戦の舞台となっただけではなかった。1921

年 1 月にドン軍管州からこの地に進出して反ポリシェヴィキの破壊的活動を行った何千人にも及ぶ匪賊部隊と現地のソヴィエト当局・赤軍との内戦——とくに 3 月——の舞台ともなった。匪賊の反ソヴィエト運動は、タンボフ県のアントーノフ運動と連動するものであったが、匪賊たちは「抑圧者—共産党員と人民委員の軛から勤労大衆を完全に解放するために」という名の下に現地のドイツ人やロシア人の住民を巻き込んだ。住民の側には、匪賊部隊の運動を支持しその行動に参加する者が出てきた。匪賊部隊の行動が起爆剤となり、またそれが扇動して、多くのドイツ人村で蜂起がおこった。住民は、銃、斧、熊手などで武装し、現地のソヴィエトを襲い、ときに活動家を殺害し、穀物集積所を破壊し、穀物種子を住民のあいだで分配した。3 月末には自治州のかなりの地域が蜂起した匪賊と農民の手中にあった。しかし、ソヴィエト側も蜂起を粉碎すべく赤軍部隊を強化し、反撃した。そうこうするうちに農民はソヴェト活動家に対する匪賊のあまりに凶暴な制裁を支持しなくなり、両者のあいだには深刻な対立が生じた。武装力において優位に立つ赤軍部隊の攻撃により、ドイツ人自治州における匪賊と農民の蜂起は 4 月中旬までに一応は鎮圧され、蜂起参加者は革命裁判所に送られ、多くの者が銃殺や拘留の刑に処せられた<sup>5</sup>。

## 2 食糧徴発、暴動・虐殺

十月革命直後の 1917 年 12 月に早くもヴォルガ地方には兵士が現われ、クリスマス直後の深夜に 18 名の富裕市民が逮捕・拘留され、強制労働を強いられ、最後はヴォルガ河の島で夜に裸にされて銃殺されたが、そのなかには何人かのドイツ人商人がいたという。ロシア・ドイツ人の多くは、その勤勉さと相対的豊かさから、また年来の反ドイツ人意識も加わって、容易に「クラーク」の烙印を押され、その食糧、衣類、牽引家畜など、あらゆるものが押収されたが<sup>6</sup>、そうした行為は極貧の農民にまで及んだ。

ドイツとの講和を締結したもののウクライナの穀倉がまだドイツ軍の配下にあったソヴィエト・ロシアでは、戦争・革命による疲弊のなかで、1918 年の春から両首都や軍隊をはじめ深刻な食糧危機に陥り、政府は 5 月に食糧独裁令を発し、武装した労働者の食糧徴発隊を全国の農村に送り込んだ。また同年にはロシア各地で穀物の割当徴発が実施されはじめ、翌 1919 年 1 月 11 日付の布告とその政令により穀物の割当徴発が公式に指示された。

沿ヴォルガ・ドイツ人自治州においても、1918 年末から 1920 年にかけて何度も食糧徴発および播種キャンペーンが展開され、政府によって派遣されてきた食糧徴発隊が活動し、

また赤軍による徴発が行われた。

1919年春にドイツ人自治州は中央政府より新たな穀物調達指令を受けたが、5月、これを拒否する手紙を送った。前年のキャンペーンで穀物種子270万ブードを計画通りに供出していること、隣接の県ではこの調達はなされておらず不公平であること、他に馬・荷馬車、皮革、サルピンカ（ヴォルガ河下流地域特産の薄い綿織物）、農機具などを他地域より多く供出していることがその理由とされた。しかし、政府はこの回答として、レーニンとツェルーパー両名による6月11日の電報のなかで、バルツァー地区から軍のための穀物50万ブードを供出するよう要求した。これに対して自治州は、それまでの非常食糧委員会のメンバーのほぼ全員の入れ替えを実施し、この要求に応えざるを得なかった。中央政府からは頻りに電報が送られ、7月末には全露中央執行委員会議長カリーニンが自治州を訪問し、「革命・共和国を全力で守っている」労働者・兵士の飢餓状況を訴えた。この年の夏は雨も多く、8月にはじまった春播きの収穫も大いに期待されたが、デニーキン軍によるバルツァー郡南部の占領により悲惨な光景が生み出された。デニーキン軍による残酷な略奪があったが、同時に、デニーキン軍を前にして後退する赤軍によっても土地は踏みにじられ、収穫物は略奪され、人口17万9000人のバルツァー郡だけで1万頭以上の馬、1万2000頭の家畜が奪い取られた。刈り取られないままの穀物も多かった。中央政府宛の州執行委員会の手紙(8月11日付)には次のように書かれていた。

農民の畑から食べ物を取り出し、それを容器に入れて集め、菜園からはジャガイモや野菜が掘り出され、庭は荒れ、樹木は折られ、垣根は引き抜かれています。農民に対する殴打・暴力は日常的現象です。女性に対する強姦もありました。農民にはテロ行為が加えられています。こうしたことにより、働くことがまったく出来ない空気が生み出されています<sup>7</sup>。

それでも自治州は徴発による穀物供出を続けなければならなかった。中央からの要求はますます激しくなり、新たな食糧徴発隊が早いテンポで編成された。9月30日のレーニン/ツェルーパーの電報には「生産者から余剰を没収せよ。隠匿している者は逮捕してモスクワに送り、強制収容所に入れろ。そして彼らを公表せよ」とあった。頻りに電報による要求だけでなく、ソヴィエト食糧委員会の全権が食糧キャンペーンの進行を常に監督し、州からの食糧搬出を組織した。穀物種子850万ブードの供出要求に加えて11月にはさらに穀物400万ブードという要求がきて、12月30日には、食糧人民委員部参与スミルノフより先の9月30日付電報と同趣旨の電報が届いた。1920年に入って州執行委員会内には中央政府に

批判的な意見も顕在化したが、結局、そうした立場のメンバーは逮捕・粛清され、中央政府に忠実な勢力が主導権を握ることになった。彼らは州内に独裁的権限をもつ非常食糧会議を設置し、後にそれを基盤に革命委員会を組織し、農民からの食糧徴発を何の妨害なしに強行する体制をつくり出した。革命委員会は自分の判断で播種キャンペーンを展開した。

5月末には中央から新たな「食糧攻勢」が始まった。レーニン/ツェルレーパの電報は1919—20年の割当徴発を7月15日までに100%遂行するよう要求してきた。州全体は39の地区に分けられ、各地区に党指導者が指名され、赤軍部隊が彼を支えた。党指導者への「指令書」には、農民の穀物・家畜保有量は必要最小限とし、余剰を発見したらすべてを即座に没収すること、中農・クラーク・フートル経営者・酒密造者からは特に厳しく没収すること、この指令は3週間以内に遂行すること、といったことが記されていた。

「食糧攻勢」は新たな農民の抵抗を引き起こし、ゼールマン郡では自治州脱退・隣接のサマーラ県ノヴォウゼンスク郡編入というキャンペーンが広範にまきおこった。郡の共産党指導者も「余剰の穀物はなく、郡に課せられた徴発を遂行することは不可能」という異例の決議をし、中央委員会に報告した。州執行委員会はこの動きに驚き、早速ゼールマン郡に戒厳令を発動し、郡執行委員会を解散してその代わりに郡革命委員会を設置することを決議した。ゼールマン郡執行委員会のメンバーは全員逮捕された。この一連の動きの結末は中央委員会の指令による党活動家の国内移動となり、自治州にもドイツ語を知らないロシア人、ウクライナ人、ポーランド人などの活動家が派遣されてきて要職に就き、食糧徴発を続けることになった。

1920年の夏は早魃で、すでに7月、州土地局は収穫の予測に大きな不安を示した。ライ麦の種子は秋播きにさえ十分でなく、60万ブードが追加的に必要とされたが、この時期でも州食糧委員会は徴発の割当に応じてライ麦を州から搬出していた。8月以降に中央からは、いかなる犠牲を払っても食糧徴発を遂行せよという指令が発せられ、加えて10月18日には「10月18日から25日の間にそれぞれ35台の穀物積載貨車の貨物列車を3回モスクワに送るように」という計画外の穀物を要求する緊急の電報が届けられた。当時中央には、ドイツ人自治州からは一国内の他の農業地域からもそうであるが一十分に「搾り取る」だけの価値がある、という確信があった。

しかし、このような政策が農村にどのような状況をもたらしていたか、ドイツ人自治州の執行委員会の或るメンバーがフランク村から州指導部に宛てて送った次のような手紙から知ることができる。

現地状況は絶望的です。・・・村の収穫を明らかに超えた規模の割当が賦課されています。村ソヴィエトは、逮捕と共和国革命裁判所への送還という脅しの下に即座に徴発を行い、どんなことがあろうともそれを遂行するよう、命ぜられています。村ソヴィエトは力なく狼狽し、何をしてもよいか分からず、明らかに集めることができない量の徴発の指令を受けてどう動いてよいか分からないのです。・・・農民は自らの栄養摂取と播種のためのきわめてわずかな量をさえ自分に残しておく権利もないという、あり得ないことが起こっています<sup>8</sup>。

1920年の夏と秋に、本来は7月15日までに遂行しなければならなかった1919年収穫分の調達として、407万1300プードの穀物が自治州から搬出された。1920年の収穫を使っただけのことである。しかし、そうこうするうちに、自治州の不作・悪い食糧事情が考慮されることなく、1920年の収穫に対する割当徴発の指令が到着した。

農民の供出能力は限界に達していた。新しい徴発に対する供出は、1920年11月20日の時点で穀物（割当量980万プード）は4.5%、ジャガイモ（30万プード）は53.8%、採油種子（15万プード）は0.5%、キャベツ（20万プード）は5%、ニワトリ（1万7160プード）は2%にすぎず、タマネギ（8万プード）、野菜（20万プード）、食肉（25万9324プード）、獣皮（4500枚）、羊皮（2万枚）といった他の品目は0%であった。加えて、輸送容器の不足、悪い輸送路などから運搬途中の損失も大きかった。

それでも12月12日に開催された第7回州ソヴィエト大会では「赤軍・労働者に食糧を与え子供を餓死から救う必要があり、食糧徴発のためにあらゆる処置をとる」という決議が採択された。

一層の食糧徴発は農民を極度の貧窮化に導き、1920年末には多くの村で飢餓が始まっていたが、中央からはトゥーラの赤軍兵士と労働者からなる武装した食糧徴発隊（500人以上）が派遣されてきた。トゥーラ隊による食糧徴発は暴力を用いて文字通り農民から「絞り取る」活動となった。農民に対する鞭打ち、妊婦殴打の事例があった他、銃殺だといって逮捕者を目隠しして壁の前に並ばせその頭上に発射するという、脅しも実際に行われた<sup>9</sup>。

\*

厳しい食糧徴発は早くから各地でドイツ人住民との衝突を引き起こし、ときには大規模な暴動になり、軍隊がその鎮圧に出動し、悲惨な虐殺がみられ、多くの犠牲者が出た。

1919年1月に反ボリシェヴィキの一つの拠点でもあった裕福なヴァーレンブルクで住民の大規模な蜂起が勃発し、バルツァーの赤軍部隊およびチェカー騎兵部隊の支援によって

鎮圧されるという事件がおこった。ゲルマンの研究では、32 人の指導者は銃殺刑に処せられ、78 万ルーブリの罰金が徴収され、逃亡した一人は村から 40 キロのところでききに捕えられて「敵に恐怖を与えるために」教会の鐘楼に吊るされたという<sup>10</sup>。

このヴァーレンブルクの蜂起については、シュロイニングも次のように報告している。

50 人が抑制のない殺意をもってただちに銃殺された。さらに 40 人が革命裁判所に送られ、死刑の判決を受け、銃殺された。・・・この入植地は 2 時間以内に 130 万ルーブリの義捐金を支払わなければならなかった。自分に課せられた額を支払わない者は死刑だと脅される。

シュロイニングは、その報告のなかで、1919 年に他の村々で起こった衝突とその際の虐殺について次のように記している。

ブルーメンタールでは 30 人が、そのうち女性と子供はきわめてぞっとする仕方で、殺された。

メンノ派の村ポルテナウでは人びとは、しばしばそのなかに年寄りがいたが、壁の前に立たされ、銃身やピストルを額に押し付けられ、また口のなかにそれを入れられ、そして鞭で血まみれになるまで打たれた。この残忍な行為によって、多くのものが死んだ。

シュロイニングは、その他に、ベルジャンスク近くのノイ・ホフヌングがどのように略奪し尽されたかを、ブルーメンオルトで女性がどのように虐待され暴行を受けたかを、ドゥプロフカで 80 人の男性と 4 人の女性がどのように殺害されたかを（16 歳以上の全男性のうち生き残ったのは 2 人の老人だけであった）、ミュンスターベルクで 100 人以上—そのうち子供 32 人—が、サグラトフカで 200 人以上が、グロースリーベンタールで 138 人以上が、クチュルガンで 300 人が、グリュックスタールで 150 人がいかに殺されたかを、報告している<sup>11</sup>。

食糧徴発に対する農民の抵抗と暴動そして虐殺は、先述のトゥーラ食糧徴発隊が自治州で残虐な方法で活動を行った 1921 年春に頂点に達した。牧師ペーター・ジンナーはトゥーラ部隊の「身の毛もよだつような行為」を 1928 年に回想しているが<sup>12</sup>、その状況は、当時のドイツの新聞・雑誌や個人的な手紙を通じて国外にも知らされた。

ベルリンで発行されていた新聞『ドイツ東方通信』(Deutsche Post aus den Osten) の 1921 年 8 月 28 日版には『リガ評論』(Rigasche Rundschau) からの転載で「破滅を迫られているヴォルガ・ドイツ人」と題する記事が掲載されているが、その一節には次のように

記されている。

前年〔1920年〕にもヴォルガ地方は不作で、収穫の大半が全滅したが、それにもかかわらずこの年に異常に高い量の穀物調達が入植地域に課せられた。ドイツ・コミュニオンはこの穀物調達量を供出することができず、今年〔1921年〕の2月には監督・懲罰部隊として赤軍のトゥーラ部隊がヴォルガ入植地に派遣されてきた。この部隊は、村々を馬で巡察し、すべての穀物を即座に供出するよう要求した。その際、部隊は、まずは貯蔵されている穀物すべてをまとめることが大事だといひ、現在の総量を確認したあとに村々には必要な量が残されると言った。

死の恐怖のなかで力づくで穀物とジャガイモが取り上げられる際、「貯蔵する穀物はすべて地域の行政中心地カタリーネンシュタットの安全な倉庫に運び、住民に対してはすでに精製されている穀分を分配することになる」と言われた。

穀物をすべて供出せよという要求に住民は非常に激昂し、各地で武装した住民の反抗がおこった。カタリーネンシュタットの近くの大きな村トンコトゥルヴォでは次のように事件がおこった。春播きを始めようとしたときにトゥーラの赤軍兵がもどってきて、共同体倉庫にある穀物の残りを持っていこうとした際に、村の住民は、最後の穀物を守るために抵抗した。女と子供は倉庫の前に立ちほだかり、男たちは干し草用熊手、大鎌、農具を手にした。流血の格闘がおこり、反抗者たちは、年齢や男女の区別なく機関銃で追い散らされ、また撃たれた。その後、トンコトゥルヴォ村は、赤軍兵士から組織的なあらゆる略奪を受けた。入植者から奪った物品はカタリーネンシュタットの共産主義者のあいだで分けられた。

流血の戦いは、大きくて豊かな村であったマリエンタールでもおこった。ここでは、赤軍兵と村民との戦いのなかで教会の塔が銃弾で破壊された。そして、そこに居合わせた目撃者が報告しているように、住民の半分はその戦いのなかで命を落とした。

2月からは入植地域の全住民にパンがなくなった。というのも徴発されカタリーネンシュタットに運ばれた貯蔵穀物の見返りの穀粉は住民に配分されないままであったのである。こうして、ヴォルガ・ドイツ人から彼らの最後のパンが、また播種用種子が奪い取られた。彼らの不幸の原因は単に不作にあるだけではなかった<sup>13</sup>。

### 3 飢饉



1920年から1921年にかけての食糧徴発の「攻勢」によりドイツ人農民のところから穀物が奪い取られ、また農民蜂起により州の集積していた穀物種子が奪い取られ、州内の農民には危機的状況が生じはじめていた。1921年の播種地面積は、ライ麦は前年の秋に播種されていたので前年の82%であったが、小麦は前年の9%、カラス麦・大麦は12%、ジャガイモは37%であり、春にすでに秋の収穫の乏しいことが確実に予測された。レーニンはドイツ人自治州の請願に応じてサラトフ県革命委員会に小麦10万プードの州への配給を指令したが、県は「県の食糧事情はドイツ人自治州より悪い」としてこの指令を拒否した。こうした非常事態のなかで4月に中央政府から派遣された特別委員会は、その調査結果の報告書のなかで次のようなことを確認している。

州はきわめて困難な経済的・政治的状況にあり、これは、不作、ひどく不十分な播種、食糧徴発、破壊行為、蜂起の結果である。食糧徴発は計り知れない政治的・経済的弊害を州にもたらしており、それは、とくに、住民の言葉や生活習慣を知らない食料徴発隊の活動について言うことができ、彼らの集団的醜行や個人的犯罪行為が確認されている。

特別委員会はこの時点ですでに飢餓が州内に蔓延しているという事実を認めていた。

5月初め、州は飢えた子供をなんとか助けようと、彼らの食事のために3000プードのキビを種子ファンドから供出したが、もちろん、こうした処置は飢餓問題を解決するものではなかった。中央政府の執行委員会は、5月21日、「最小限の食糧備蓄を州に供出することが望ましく、この問題の解決は食糧人民委員部にまかせる」としたが、この食糧人民委員部はちょうどこのころ「食糧徴発を厳しく行うように」という電報を自治州に送っていた。州は中央の態度を厳しく批判し、執行委員会議長モールをモスクワに派遣するとともに、自ら飢餓者調査委員会をつくった。この調査委員会は、6月初めに無作為に選んだ数地区を調査し、どのような状況になっているかを報告した。それによれば、すでに1921年の新年を迎えるころに「きわめて多くの村で」パンがなくなっており、飢えがひどくなるにつれて家畜を見境なく屠殺しはじめ、農機具や家財道具などを売らざるを得なかった。

住民のうちのわずかな富農は、現在、もっぱら自分の農業経営を放置することによって生きている。莫大なパン需要のために、農機具、建物、機械、衣類そして靴類は、ほとんど何の価値もなくなってしまった（刈取機が焼きパン一個と交換されている）。

現在、住民は、草本、雑草、タマネギ、ニンニク、動物の死体、犬、猫、クマネズミ、カエル、ハタリス、ハリネズミ、ヴォルガ河沿いの村で集めた魚を食べている。

住民のうちのわずかな者は、残っている酪農家畜や役畜を食べてしまっている。

特別委員会の指摘によれば、飢えに苦しみ、収穫の見通しも期待できず（播いた種子が少なく、5月からは早魃が始まっている）、また、外部からの援助は何も期待できず、住民は、農業経営を放り出し、シベリア、トルキスタン、クバンなどへ移住し始めていた。しかも、逃亡はパニック状態になり始め、日々激しさを増していた。たとえば、パーニン地区からだけでも、5月から6月初めにかけて655家族——住民の10%——が出て行った。このパーニン地区では2月から6月までの時期に498人が飢死し、バルツァー郡のアントン村では同じ時期に510人が死亡した。ニデルモンジュ村では6月の或る一日だけで10人が飢えで命を奪われた。委員会の報告書の最後では「州の住民は、きわめて恐ろしい飢えに耐えて生きている。緊急の大量援助が必要である。そうでなければ、州は荒廃し、数十年は回復することはできないであろう」と記されている<sup>14</sup>。

当時、いくつかの村から窮状を訴える手紙がドイツに送られはじめた。そのいくつかを紹介してみよう。

5月17日付、グリムから

私たちはいまでは貧民給食所から与えられるスープだけで生きています、このスープは6人分（したがって家族の半分）と決められています。ここグリムでは飢餓が生じており、それは他の村々よりもはるかにひどいものです。・・・私たちの家には菓子やパンが何もなく、料理する一握りの穀粉がなく、ジャガイモやその他の野菜もありません。・・・良い収穫の見込みはわずかです。というのも雨が降らないからです。その代わりに毎日乾燥した風が吹いており、加えてひどい暑さです<sup>15</sup>。

5月25日付、ヴィゼンミュラーから

私たちのところではまたもや凶作です。雨はまだ降ったことがなく、すべてが乾ききってしまい、すでに3ヶ月ほど東風がいつも吹いています。種播きはわずか、生育もまだ良くないです。穀類の播種は以前は2000デシャチナだったのがいまでは1000デシャチナにもならず、小麦は6000デシャチナが普通だったのに3000デシャチナだけです。キビとひまわりは以前より多く、400デシャチナだと思います<sup>16</sup>。

5月30日付、ウメトから

1月以来、私たちにはパンがなにもなく、10人が死にました<sup>17</sup>。

6月8日付、グリムから

父の足はかなりひどく膨らんでいます（飢えの結果です）。・・・奇跡が起こらない

限り、ここの人びとのほとんどが餓死することは確かです。人びとはみんなまったく衰弱しています。膨れた身体の人びとが路上を這っているのを見るのはきわめて痛ましい光景です。昨日（6月7日）、私たちのところにはじめての雨が降りましたが、しかしそれはまったく短い雨で、今日はすでにその跡形もなく、土地は乾ききっています。収穫の見込みはきわめて悲しむべきもので、ほとんどの畑は荒涼としています<sup>18</sup>。

6月10日付、サラトフの神父から

ジャガイモや肉のない乏しい、1日に一度だけの食事は餓死直前の1回の食事です。娘が一片のわずかなパンをねだったときには胸の張り裂ける思いがします。彼女に何も与えることができないのです<sup>19</sup>。

6月22日付、グリムから

昨日、霰雨が私たちに襲い、庭や畑に大きな被害がでました。・・・最近ここでは多くの人々が餓死しています。そしてさらに恐ろしいお客さんを恐れなければなりません。コレラがすでに都市で蔓延しており、猛威を振るっています。・・・私たちの貯えはこの何日間でまったく無くなってしまいました<sup>20</sup>。

6月25日付、ヴィーゼンミュラーから

親愛なる義兄弟。君の兄弟は飢えのために体が膨らんでしまっており、他の家族も同じです。ベッター・コンラッドは飢えで死にました。君の義父も餓死寸前です<sup>21</sup>。

6月付、ウルバッハから

全家族でウルバッハ、ポクロフスク、カタリーネンシュタットを通り過ぎ東へと日々移住していく何万人もの農民は非常に多くの死体を路上に残しておき、死体の悪臭の駆除をカラスやカササギにまかせるより他に何もできません。というのも犬や猫はずっと前に私たちが食べ尽くしてしまったからです。・・・1フントの穀粉がここでは4万5000ルーブリしますが、サラトフではその2倍です。ペルシア人は女の子より男の子に多くを払って買い求め、ブロンドの女の子はアシャハードに送ります。・・・ドイツ人の村ウルバッハでは半分の家が空になっています—避難し、空腹の兵士の部隊に殺され、あるいはコレラで死んでしまいました。・・・ここウルバッハでは、人びとはすべて骸骨のようにみえます<sup>22</sup>。

7月4日付、ラウヴェから

私たちには播く種子はなく、収穫物もありません。私たちの畑では6デシャチナから5プードの穀物を収穫しただけです<sup>23</sup>。

州執行委員会幹部会で報告されただけでも、7月1日現在、ドイツ人自治州において飢えに苦しんでいた人はすでに29万9000人を数え、それは州の人口の4分の3を超えていた。大旱魃により春播き穀物の収穫はないであろうことが7月までに決定的に明らかとなった。

6月に自治州を代表してモールは中央政府と援助の交渉をしたが、それはきわめて難航し、7月中旬にはじめてわずかな量の援助物資が中央から自治州に到着しはじめた<sup>24</sup>。

この頃になると、手紙のなかでは餓死する村人についての記述が多く出はじめている。

7月12日付、ヴィーゼンミュラーから

すでに別の手紙で書きましたように、私たちの周辺から多くの人が死んでいっていき、その数はどんどん増えているようにみえます。先週はほぼ毎日、4人、5人から6人と、死んでいきました。それは子供、独り者、年老いた者と、年齢はさまざまです。この原因は食糧不足であると思われます。多くの人は先週はずっと食べるパンがまったくなく、その他の食糧もきわめてわずかであって、胃は完全に弱っており、何にも慣れていないこの胃に作りたてのパンや穀分から作った重い食物を食べることになるのです。胃はこれに耐えることができず、死んでいくこととなります。収穫は本当に乏しく、最近の統計によれば平均して1デシャチナ当たり2.5プードです。しかしこれはライ麦だけの数字で、他の穀物は、種子不足でわずかししか播かれず、また雨不足のために、まったく発芽しませんでした。今年の夏は雨は1回降っただけで、しかもそれはすでに収穫の時期にあたっていたときで、あまりに遅かったのです。・・・要するに収穫は何もないのです。今年はどうなるかと考えたときには大変心配になります。というのも助けはどこからもなく、私たちの村人は飢えで死んでいきます。何年もの貯えももはや1プードも残っていません。周辺のすべての村々や私たちのヴォルガ地方全体がそうであるように、私たちの共同体からも多くの人が南ロシア、カフカース・・・、そしてシベリアへと移住しています。すでに出発した人および出発しようとしている人の数は100家族にもなります。私たちの共同体にまだ残っているのは3000人以下になっているのです<sup>25</sup>。

7月12日付、バルツァーから

毎日、私たちの村では8—10人が埋葬されています。彼らはすべて掘った穴に入られています。3、4ヶ月あとに誰が生きているのか、神様だけが知ることです<sup>26</sup>。

7月15日付、フランツォーゼンから

ここでの貧困はすごいものです。・・・すでに昨年のクリスマスのおかげからパンがな

く、私たちは薄いスープで生きてきましたので、みんな体がとても膨れてきています。しかし収穫の見込みはなく、ほとんどまったく何も生育しておらず、播種量の半分も収穫されないでしょう。どのようにして生き延びていけばよいのか分かりません。私たちがどうなるかですが、兄弟のハインリヒはタシケントにおり、私はひとりまだフランツオーゼンにおります<sup>27</sup>。

7月15日付、サラトフから

私たちヴォルガ・ドイツ人が困窮し、飢え死にを恐れているということを君はみるでしょう。日曜日にフック村では8人が敷き藁の上に横たわっており、同じ数の人間が（餓死して）埋葬され、多くの家族がすでに死滅しています。グリムでは、毎日20人から30人の人間が死んでおり、4、5ヶ月のうちにこの村は死滅するであろうと人は予測しています。こうした状態がほとんどすべての入植地でみられるのです。食糧とくにパンがすでに長いあいだ欠乏し、播種用穀物はほとんどまったくないのです。全面的な不作により私たちは最後の希望も失っています。・・・フック村で乞食をしているグリムの村人たちは、圧倒的に子供ですが、そのなかから毎日1-2人が死んでいます。だれも助けることができないのです。これ以上ぞっとするように描くことはできないといった様相なのです。山地側でも草地側でも、住民の半分もいないような村が多くあります。移住して行ったか死んでしまったかです。・・・サラトフは乞食で一杯です。男、女、目の窪んだ子供、彼らは飢え、ぞっと身震いするほどで、痛々しく、ほとんど例外なしにドイツ人です<sup>28</sup>。

7月17日付、グリムから

数日後に旅立とうとしていますが、あまりに恐ろしい食糧不足にコレラが加わり無数の犠牲者の恐れがあり、そのときまでにどうなるか分かりません。・・・教会の鐘が静まることがほとんどありません。現在では毎日12回、14回、さらには17回も死者の埋葬があります。多くの友人や親類がすでに死にました<sup>29</sup>。

7月18日付、グリムから

大地は嘆き悲しんでいます。悲惨な状況は言葉では表現できません。・・・飢えで人びとの身体は膨らんできており、腫瘍ができて、大抵は死んでいきます。さらにコレラで多くが死んでいます。大抵の人びとはすでに棺なしに埋葬されています<sup>30</sup>。

7月20日付、グリムから

今日は14回、昨日は29回、一昨日は19回、埋葬がありました。家族全員がすでに

死んでしまった家もあります。・・・たった今も吊鐘が鳴り響いています。この鐘はいまや特に心に深く響きます。おもわず「今日は私の哀れな隣人に起こっているが、明日はおそらく私とその目に会う」と考えてしまうのです。直近のわずかな数の肉親だけに付き添われて毎日多くの棺が墓地に運ばれるのを見るのは、なんとも痛ましい光景です。板が非常に高価なので、すでに多くの者は荒削りの板で自分たちの死者のために棺をつくっています。何人かはすでに棺なしに埋葬されました。・・・私は窓から外を眺め、天空に虹が光り輝いているのを見ます。これはまだ神様が慈悲深くあられることの徴です<sup>31</sup>。

7月中旬に中央政府より自治州に送り込まれた収穫高調査委員会は食糧税——3月に徴発から現物税に切り替えられていた——の徴収は無理であると報告したが、7月25日付のレーニン/ブリュハノフの電報には「現物税額は従来の食糧徴発量より低く定められており、断固として現物税を徴収するように、あらゆる手段を講ずるべきである」と指令されていた。8月19日、中央から来訪した全露中央執行委員会議長カリーニンに対してモールは、旱魃のために州の収穫は75%もだめになっており、残された農地での収穫はデシャチナ当り1・5プード、家畜飼料がなく、家畜頭数は破滅的に減少し、飢餓が猛威を振るっており、約4万人がパニック状態にある、と伝えた<sup>32</sup>。

8月から9月にかけての現地からの報告には、次のようなものがある。

8月21日付、マリエンタールから

餓死が迫っており、援助が何もこななければこの冬を迎えることができないでしょう。今年の収穫は非常に貧しく、1906年の収穫でさえ豊作にみえてきます。夏の間中、一度も雨が降りませんでした。小麦を蒔いたのもあまりに遅かったです。果物の皮を一年以上も保存してあり、それを食べています。飢え死にするより道はないのです。・・・この村では毎日5-6人が死んでいます、アルト-バロ村では20人も死んでいます<sup>33</sup>。

8月28日付掲載の手紙

昨年クリスマスからは一片のパンもみていません。人びとは飢えで手足が膨らんできています。どうか私たちに助けてください。そうでないと私たちはみんな死んでしまいます<sup>34</sup>。

8月28日付掲載の記事（前掲の「破滅を迫られているヴォルガ・ドイツ人」）

雪解けから7月末まで灼熱の太陽がすべてを枯らし、カタリーネンシュタット周辺には7月17日になって初めて雨が降った。収穫は全滅した。・・・壊血病、チフス、

そしてコレラが発生している。・・・目撃者の証言によれば、ヴォルガ入植地の現状は次のようである。穀物は枯れ、家畜は屠殺され、住民は草を食べている。短期間に収穫された冬ライ麦はデシャチナ当り 2、3 フントしかなく、すぐに食い尽くされ、通常の食事はできず、無数の死者が出た。せいぜいリンゴと草をまぜてつくったものを代用食としたが、それで栄養を摂ることも長くは続かない。ここに留まる人びとの「大量死」が、年齢を問わない苦痛に満ちた餓死がはじまった。人はやせ衰え、いたるところで死がみられ、首都の通りでも、倒れて弱々しく死んでいく人間をみることができ、教会は見捨てられ、共同体は教会の牧師たちを扶養することができず、いまや教会では死者埋葬のみが行われる。・・・村があいついで沈んでいる。カタリーネンシュタットの近くの入植地カネルは 1500 人の人口を数えるが、そこでは毎日 10—15 人が死んで行っている。ドイツ人の習慣でそれぞれの死者に対しては弔鐘を鳴らす、ひっきりなしにその鐘の音が流れ、かつて栄えた入植地からロシアの大河に鳴り響いている<sup>35</sup>。

8/9 月発行のドイツの雑誌掲載記事に紹介された手紙

2 匹のネズミが 6000 ルーブリもします<sup>36</sup>。

\*

8 月 25 日、自治州には飢餓者救助委員会が設置され、9 月上旬には各郡に同じ委員会が、村々には相互援助委員会が設置され、援助体制が整備されていったが、肝心の中央からの食糧援助は非常に量が限定されており、また到着が不規則であった。それでも、中央政府は、住民が飢えに苦しむ地域の危機的状況を十分に認識しはじめ、9 月の 1 ヶ月間にサラトフ II、ポクロフスク、カムィシン、メドヴェディツァの駅には沿ヴォルガ・ドイツ人州のために貨車が約 600 台到着し、54 万 6000 プードを超える穀物種子が届けられた。その他に、2 万 4000 プード以上が州の協同組合によって用意された。穀物種子は農民経営に直接 49 万 4000 プードが、コルホーズとソフオーズに 2 万 3000 プードが引き渡され、遅れて到着した穀物種子の一部（約 3 万プード）は飢餓に苦しむ住民の食糧となった。

こうして、平年よりははるかに少なかったが秋の播種が 11 万 9500 デシャチナの畑で行われた。だが、大半の農家の飢えには変わりなく、餓死が大規模に広がっていた<sup>37</sup>。

穀物を収穫できてもそれを食糧税として納入しなければならなかった。

飢餓の惨状は、これより以前からアメリカの親類宛の手紙や報告がドイツ語の週刊新聞『世界郵便』(Die Welt-Post) やアメリカ・ヴォルガ救済協会のニューズレターなどに掲載

されて広く知られるようになっていたが、1921 年秋の手紙のいくつかをここに紹介してみよう。

9月4日付、フックから

ここでは夏に多くの村で（たとえば、モール、グリム、メッサーで）毎日 30—40 人以上が死んでいきました（しかも死体は路上で、また畑で見出されたのです）。彼らはさまざまな病気・伝染病で死んだのですが、その原因はもちろん、ひどい飢餓です<sup>38</sup>。

10月12日付、ノルカから

いまでは一日に 8 体から 10 体もの死体が埋葬されるようになっていきます……。子供が裸で部屋に座っている家庭が多くあります。大人たちは袋や布から彼らのために着るものを作っています。人びとのところにはさまざまな虫がおり、それを通じてチフス、搔痕などの病気が発生しています。人びとはまさに生き延びるために持っているすべてを、衣類、馬、雌牛、雄牛、機械等々をロシア人のところで食糧と交換しています。しかし、最後には多くの者が餓死しているのです<sup>39</sup>。

12月10日付の手紙

昨年、政府は私たちからほとんどすべての食糧と家畜を奪っていきました。今年の収穫は暮らしていくには十分ではありませんでした。牛肉、羊肉、あるいは豚肉、あるいは何らかのパンを手に入れることは不可能でした。というのも、政府があらゆるものを私たちから奪ったからです。

多くの人びとが飢えで死にました。……。いくつかの家族は全員が死んでしまいました。多くの人びとは町へと出て行きましたが、それもそこで餓死するためです。ルイスの住民数は 7000 人でしたが、生き残っているのは 3000 人です。一日の死者の数は 10 人から 15 人です。……。革命家たちがあらゆるものを持ち去って行きました<sup>40</sup>。

12月14日付、バルツァーから

グリムでは今年 1000 人以上が死にました。11月の人口は 6200 人でした。メッサーは今年の死者は 717 人で、11月の人口は 3772 人でした。モールの人口は 3800 人ですが、今年の死者は 638 人でした。モールの墓地には埋葬されない死体が横たわっています<sup>41</sup>。

中央政府はドイツ人自治州に対する食糧援助の県として 9月13日にはゴメリ県とブリヤンスク県を、11月にはヴィテブスク県を指定していたが、これらの 3 県からはこの年の末までに食糧が到着し始めた。しかし、その量はわずかであった<sup>42</sup>。



\*

餓死を逃れようとして地域外へと避難・移住する動きは上述の資料にもみられたが、中央政府は、1921年7月28日付の中央執行委員会幹部会の決定にしたがい、8月から1万人の飢餓者を州から疎開させる準備を開始した。9月末、疎開する人たちはすべてマルクスシュタットの棧橋に集められた。そこに彼らのための汽船が到着するはずになっていた。しかし、中央の諸機関の甚だしい怠慢により2ヶ月間は州には移送の指令書が届けられず、不運な疎開者たちはこの間ずっと野営し、惨めな生活をして過ごした。2ヶ月の間に、彼らのうち何百人かは飢えと病気で死亡した。ようやく11月になって、疎開者たちは州から移送されていった。

子供の疎開も中央の指令によって実施されたが、移送の計画と組織が悪く、望ましい結果をもたらさなかった。そればかりか、多くの子供にとっては、疎開は悲劇に終わった。最初の移送団（子供500人）は、1921年10月にチラスポーリに向かって出発した。そこでは、彼らは農家に振り分けられた。大きな子供はなんとか受け入れられたが、幼児は誰も引き取ろうとはせず、地方当局は、幼児を強制的に振り分けなければならなかった。第二の移送団——子供の数は第一団と同じ——も、チラスポーリに向かうことが指示されていた。しかし、第二団は非常に長い間移送隊が来るのを待たされ、そして、彼らがサラトフで移送列車に一杯に詰め込まれたとき、オデッサに子供を移送せよという指令が到着した。その後、子供たちは、小さい集団をつくって、ウマニ、マイコプ、キエフ、トゥーラ、オリョール、プスコフ、ヴィテブスク、カシーラに移送された。秋と冬を通じて、マルクスシュタット郡から1232人、バルツァー郡から150人、ゼールマン郡から515人の子供が、疎開させられた。

州からは総勢3660人の子供が疎開させられたが、後になってすべてが帰郷できたわけでは決してなく、多くは死亡した。翌年4月、州は、このような子供疎開は受け入れられないとして、この事業を中止している<sup>43</sup>。

\*

1921年秋には、都市やいくつかの村で、子供用の食堂や給食所が開設され始めた。しかし、そうした施設が飢える子供たちすべてに食事を提供するには、外部から州に到着する食糧が非常に限られており、また労力と資金が十分でなかった。10月に州飢餓者援助委員会が確保できた規則的な子供の給食は、全体で約1万人分にすぎなかった。飢えていた子供はその何倍もの数であった。食糧の援助の必要がさらに迫られた。

こうした厳しい時期に、ロシアの飢餓を救済するために、外国の慈善組織が動いた。1921年8月21日には外務人民委員代理リトヴィーノフとハーバート・フーヴァーが長官を務めていたアメリカ援助局（ARA）との間でロシアの飢餓者への人道的援助に関する協定がリガで結ばれていた。8月27日には、数多くの国の67の慈善組織からなる国際子供救済同盟（MSPD）の当時の代表ナンセン（有名な北極探険家）は、飢餓者への食糧調達に関するモスクワとの協定に調印した。ドイツ人自治州に対しては、アメリカ援助局はゼールマン郡とバルツァー郡を、ナンセンの組織はマルクスシュタット郡を担当することになり、11月21日からは子供への規則的な給食がアメリカ援助局と国際子供救済同盟との食堂で開始され、すでに11月末にはおよそ20万人の飢餓者のうち15歳未満の子供5万3千人に食事が提供されていた。二つの慈善組織は、1922年4月1日までに子供15万8000人の食糧を確保していた。この4月には、アメリカ人は、トウモロコシの配給パンにより、成人住民の食事を提供しはじめた。結局、アメリカ援助局と国際子供救済同盟は、1922年の春と夏の時期に、成人と子供合わせて33万9000人分の食事を確保したのである。ドイツ人自治州の第10回ソヴィエト大会において州執行委員会副議長エス・コロチロフが公表した1922年7月の数字によると、二つの組織は飢餓者のうち子供（20万3760人）の88%（18万人）を、大人（27万2634人）の93%（25万5864人）を援助していたことになる。

この二つの組織の他に、それらの現場の施設を利用して、さまざまな外国の宗教的およびその他の組織団体（キリスト再臨派、クウェーカー教徒など）の寄付した食糧（8万プード以上）が配られた。また、1922年1月からは、ドイツ赤十字社がドイツ人州の飢餓者援助に加わり、食糧、医薬品の援助がなされ、何人もの医師が派遣され州内の疫病の駆除に参加した。さらに、ドイツやアメリカに在住していた亡命ヴォルガ・ドイツ人の援助もあり、彼らは、1922年夏以降、「ヴォルガ・ドイツ人救援事業」（Hilfswerk der Wolgadeutschen）などの団体を通じて、あるいは個人で特別小包を送り、救援活動を行った。

ゲルマンは、1922年10月1日現在における諸機関からの食糧援助量を示しているが、それによると、政府や3県など国内の食糧援助が79万7523プードであったのに対して外国の慈善組織による援助は156万2012プードであり、外国は国内より2倍もの援助をしていたことになる<sup>44</sup>。

\*

以上のような食糧援助が続けられたにもかかわらず、1921年から1922年にかけての冬と春の時期は、飢饉のピークであった。政府の援助物資の量が減少しはじめた。州指導部は

モスクワへ行き、食糧援助を交渉した。しかし、1922年の1月28日から2月1日にかけて開催された第8回州ロシア共産党代表者会議は、「州が厳寒の悪夢の何ヶ月間を生き延び、食糧の最後の残余を食い尽くし、現在では、全住民の食糧備蓄が完全に枯渇し、住民のあらゆる相互援助も尽き、きわめて危険で恐ろしい状況の到来に脅かされていること、住民の極度の衰弱と労働力の低下、大量の餓死、住民各層における広範なチフスの流行、住民の絶えることのない州からの脱出、農業生産・牧畜・家内工業の活力の完全な喪失」を確認せざるを得なかった<sup>46</sup>。

1922年に入ってからアメリカに紹介された手紙には次のようなものがある。

1月5日付、バルツァーから

死者がすべて一つの墓に埋葬されるわけではありません。墓を十分に掘ることはできないのです<sup>46</sup>。

2月12日付、シリングから

私の村シリングでは3000人以上の人口があり、私はそこで28年間教師をしてきましたが、以前には50人から80人の死亡者であったのが、昨年には約300人が死にました。今年の1月1日から2月10日までに59人の死者を数えています<sup>47</sup>。

2月13日付掲載

餓死から自分の生命を救うために、人は、家具、衣類そして寝具のあるものを、ほとんど無くては済まないものを都市や村の暮らしの良いロシア人住民のところでわずかな金銭に換えたり、食糧と交換したりし始めています<sup>48</sup>。

3月3日付、サラトフから

飢餓が非常にひどく、ここでは人肉食いの事例も多くあります。親が自分の子供を、夫が妻を殺しているのです<sup>49</sup>。

3月13日付、ディンケルから

私たちの村の人口は3000人ほどでしたが、現在では1500人だけが生き延びています。住民の半分は、村のなかでは飢餓あるいは飢餓の影響により、また飢餓から逃れて移住する途中で、死んだのです<sup>50</sup>。

3月20日付、フックから

ここフックでは、私が留守をしてから1月、2月に200人以上の大人が死にましたが、現在では常にその倍のテンゴで死んでいます。死者の大半は共同の墓に、1つの墓に20—25人が、幾人かは棺なしに埋葬されています。ときにすべての死者を運び去るこ

とができずに、積み重ねられ、それは1日に20体になることもあります<sup>51</sup>。

4月3日付、アルト-メッサーの牧師から

私の教区ではすでに人口の半分は死んでいます。・・・メッサーでは1月以来すでに380人が餓死していますが、多くの死亡はまったく報告されないままです。モールでも同じだけの数であり、クッターでは125人ほどです。・・・村全体に死の静寂が支配し、ただ服喪を告げる鐘の音のみがこの墓場の静寂をやぶるのです。・・・最近、ある母親が自分の子供を殺そうとしているということが私の耳に入りました。私はすぐにその家に駆けつけました。家の周りには馬、猫、豚、犬などさまざまな動物の頭が20ほど転がっていました。飢えに苦しむこの家族が食べ尽したものです。彼女が私に気づいたとき、家族全員が出てきました（豚小屋に似た小さな部屋に10人が住んでいるのです）。何という姿だったことか、ここで記すことはできません。そこには衰弱した、ぼろを着た、汚らしい身体があったのであって、それは人間ではありませんでした。おもわず涙せざるを得ませんでした。・・・「お前の子供を殺すことだけはやめなさい」と頼むことしかできませんでした。・・・私は飛ぶように家に帰り、ルター派の貯蔵物資からこの家族にいくらかの穀粉、米、砂糖、茶およびアメリカ製の防腐石鹼1個を持っていきました<sup>52</sup>。

4月18日付、バルツァーから

1月1日以後バルツァー村では300人以上が死亡しています。復活祭の後の月曜日、10人がその日にバルツァーで埋葬されました<sup>53</sup>。

\*

1922年5月発行のドイツの雑誌『異教地の福音宗徒』(Die evangelische Diaspora)には現地で住民の飢餓・伝染病と闘っていたドイツ赤十字社の医師2人の、1921-22年の冬の出来事についての報告が掲載されているが、その一節をここに紹介しておこう。

冷たい晴れた日に、私たちは橇で飢餓地域に入った。ヴォルガ河を越えるときにすでに痛ましい光景に出会った。小さな橇に自分の残った財産を乗せて引きずっている、際限ない人間の列である。椅子、家庭器具、小さな戸棚、それら家庭生活には不可欠にみえたものを近隣の首都サラトフの市場で売るためである。痩せて青ざめた顔をした人びと。一人の小さな娘を連れた婦人。年老いた男、彼は苦勞してヴォルガの河岸の急斜面の高台に自分の荷物を持ち上げていた。そうした人びとのあいだに、長椅子を乗せた橇がラクダに繋がれているのがみえた。他の橇には鋤と馬鍬が積まれていた。

すべては、たとえ何日間かのことであれ、飢えから逃れるために犠牲に供されるものである。・・・食糧の価格は法外に高くなっており、週ごとにさらに上昇している。400グラムの普通の黒パンはサラトフで1月に1万2000ルーブリしていたが、今日ではそれを手に入れるのに12万ルーブリが必要である。他の食料品の値段も相当なものである。都市では買おうと思えば買うことができるが、誰もそれに必要なだけの金銭を持っていないのだ。こうして人びとは、何年も働いて得た収入で買い込んできた家庭器具を捨て売りすることを強いられているようにみえる。かつての村にはわずかながら富があった。それが今日このような様子なのだ。以前には冬であっても良い日々があり、生き生きとした生活があったような入植地は今日では死滅したかのようである。多くの家々は見捨てられ、窓は釘付され、煙突と炉は冷たい。そこに住んでいた人びとは他の地方に自分の避難所を探しに出て行ったのである。しかしながら、大抵は、ここで逃げようとした死を他の場所で迎えることになったのである。他の場所で生きていく可能性を見出すことができたのは、まったくわずかな人たちだけであった。

今日ではただ稀にしか村々の通りに住民を見かけない。大半の人たちは家のなかひきこもり、衰弱して力なく、一部は飢えから身体が膨らんでおり、多くの者が病気で、食糧不足から伝染病——とくに発疹チフス——に罹っているようである。多数の人は寝台からもはや離れられない。彼らは起き上がってドアのところまで歩いていく力さえないのだ。他の人びとは、凍害を受けたようなジャガイモ、骨、あるいは半分腐った肉片を手に入れようと、家から家へと、大変な難儀をして足を引きずりながら歩いていく。人びとが飢えを抑えるために何を食べているのか、推測することができない。犬や猫は村々で見かけることは稀になっている。畑のヤマネズミは全部捕まえられた。多くの人びとにとっては、ヒマワリの種の外皮を砕いてつくった菓子と乾燥させたカボチャの皮が唯一の栄養源である。そしてここでは、たしかに確認できる事例はドイツ人ではなく移住してきたステップの住民の地域でのことにちがいないが、人肉食いの報告が増加している<sup>54</sup>。

\*

春播きは州にとって「飢饉の危険な状況と闘う最も重要な作業」であり、州はすでに1921年12月に中央と交渉し総量80万ブードほどの播種用種子の調達という約束を受け取っていたが、1922年2月になって、その約束した多くは調達されないだろうということが明らかになった。中央に請願書を提出し、結局、中央からの種子はようやく3月、4月に到着し

始め、約束の量の約76%が調達された<sup>55</sup>。こうして春播き作業は進行した。外国からの食糧援助も豊かになり、また降雨もあり、農民のなかには苦しいながらも一抹の希望が見え始めていった。それを伝える手紙が何通も国外に送られているが<sup>56</sup>、ここではそのうちの一通のみを紹介しておこう。

6月付、スタールから

ここスタールでもこの恐ろしい冬のあいだに多くの人が餓死し、しばしば不気味でした。友人の多くがここで死ななければならなりません。チフスで死ぬのは止んだものの、まだ流行しています。1月1日から現在まで123人が死亡しました。それに対して出生者は25人です。4月に困窮はもっともひどくなり、1日に8人も死んだこともしばしばです。しかし、いまや困窮は終わっています。神様は、私たちにアメリカの我が同胞による援助をもたらすことによって助けてくれました。1月にはスタールの共同体はアメリカに住むスタール出身者からさまざまな食糧——穀粉、米、脂——を300ブード受け取りました。3月には老人、病人、衰弱者のためにアメリカのルーサー派教会から16ブードほどを受け取りました。次に受け取ったのは5月23日になってからで、それは再びアメリカのスタール出身者からのものでした。穀粉1697ブード、米279ブード、砂糖303ブード、脂137ブード、カカオ116ブード、ミルク2万3928缶。これは1人当りにすると穀粉33フント、米5.25フント、砂糖5.3フント、脂2.5フント、カカオ2.1フント、ミルク11缶になります。最大の家族は30ブードも受け取り、それを馬で運ばなければならませんでした。これはすでに長いこと見たことがなかった豊かさです。教会の長老がこれを配布しました。毎日、人びとはそれぞれ3ブードの食糧の入った、サラトフからの荷物を持ってきます。それは彼らの友人から送られてきたもので、多くの人は一度に18ブードも受け取ります。これはアメリカの友人が払い込んだことによります。こうして、人間が絶望するときには神様が助けてくれるのです。私たちのところでは、飢えることはなくなりましたが、それでも十分には食べていない状態です……。各人は次の収穫が良いという期待をもって生活しています。去年はあまりに少ない雨量でしたが、いまは降りすぎるほどであり、それも余計なことではありません<sup>57</sup>。

おわりに

1922年秋の収穫前に、また収穫後も、そしてその冬から1923年に入っても飢餓・餓死の報告はあったが<sup>58</sup>、それでも2年間の未曾有の惨状から抜け出したことは確かであった。しかしながら、それも一息のことでしかなかった。翌1924年には再び厳しい飢饉がヴォルガ地方を襲ったのである。

本稿の最後に、現在アメリカ・コロラド州に住む90歳の老人が保存していた、彼の父親——20世紀初めにヴォルガ地方から当地に移住してきたドイツ人——宛てにグリムの親類から送られてきた数多くの手紙のうちの一通（1924年10月27日付）を紹介しておこう。

緊急に私の状況、私の家族の状態を君に伝えなければなりません。君の助けが欲しいのです。私は言いたいほどの飢餓にあり、どうしようもありません。どうか助けてください。もはや生き抜くことはできません。

私たちの友だちはみんな援助を受け取っていますが、私だけがまだ何も受け取っていないのです。まったく助けを必要とせず、石造りの家に住み、何千ルーブリもの財産を持つ人たちがいます。私がいちばん貧しく、これだけは必要だというものもなく、まったく仲間はずれになっています。君たちは私が死んでもよいと思うのでしょうか。もしそうだとしたら心が傷つきます。私は君の義理の兄弟なのです。できることでいから助けてください。あとでお返しします。カブラ、カボチャ、ジャガイモで生きていかなければならないというのはどんなに悲惨なことか、考えてみてください。パンや菓子が多量なものか、今は知りません。

その他に、私たちの母親の兄弟のヤコブとハインリヒ、兄弟のカールとその息子カールの4人はみんな餓死し、ヤコブの妻も死にました。これは飢饉の年でした。私の仕事はつらく、2頭の乳牛で耕して種を播きましたが、何の収穫もなく、いまはパンがなく、牛乳もなく、カール・ムーテの一部屋に住んでいます。小さな部屋に12人がいるのです<sup>59</sup>。

ヴォルガ・ドイツ人の苦難は、その後も続くのである<sup>60</sup>。

## 注

- 1 梶川伸一『幻想の革命』（京都大学出版会、2004）、同『飢餓の革命』（名古屋大学出版会、1997）、同『ボリシェヴィキ権力とロシア農民』（ミネルヴァ書房、1998）。1930年代初頭の飢饉を扱った奥田央『ヴォルガの革命』（東京大学出版会、1996）でも必要箇所と言及。以上の諸著ではもちろんドイツ人地域も検討の視野に入れられている。早く

に扱った邦語論文として阪本秀昭「1921年のパヴォルジェにおける飢饉」(天理大学学報110、1977)がある。

- 2 *Unsere Wirtschaft*, 1922, No.17, S. 531.
- 3 Schleuning, Johannes, "Aus tiefster Not, Zur Hungerkatastrophie in den deutschen Wolgasiedlungen", *Vierteljahrschrift für soziale und internationale Arbeitsgemeinschaft*, 1921, No. 4, S. 293-296. Sinner, Samuel D., *Der Genozid an Russlanddeutschen 1915-1949*, Fargo, 2000, S. 11-16. 同書は同著者の *The Open Wound: The Genocide of German Ethnic Minorities in Russia and the Soviet Union, 1915-1949 -and beyond*, Fargo, 2000 と合冊になって刊行されている。
- 4 *Герман А. А. Немецкая автономия на Волге 1918-1941. ч. 1. Саратов*, 1992. С. 12-35; Schleuning, Johannes, *a. a. O.*, S. 297-299. 邦語文献として乾雅幸「第1回ヴォルガ・ドイツ人大会(1917年4月25-27日)」(関学西洋史論集 XXVII、2004)、同「十月革命期におけるヴォルガ・ドイツ人」(史泉100、2004)、同「ヴォルガ・ドイツ人社会主義者同盟の創設」(関西大学西洋史論叢8、2005)がある。
- 5 *Герман А. А. Указ. соч.* С. 73-93, 97-108.
- 6 Sinner, Samuel D., *a. a. O.*, S. 23.
- 7 *Герман А. А. Указ. соч.* С. 53.
- 8 *Там же.* С. 66.
- 9 *Там же.* С. 45-67, 93-96.
- 10 *Там же.* С. 37-38.
- 11 Schleuning, Johannes, *In Kampf und Todesnot*, S. 48, 75-76, 88; Sinner, Samuel D., *a. a. O.*, S. 24-25.
- 12 Sinner, Samuel D., *a. a. O.*, S. 28.
- 13 *Deutsche Post aus dem Osten*, 1921, No.35, S. 3.
- 14 *Герман А. А. Указ. соч.* С. 114-119.
- 15 "Nachrichten aus der Kolonie Grimm", *Die Welt-Post*, 29. IX. 1921, S. 5.
- 16 Bier, Friedrich/Schick, Alexander, *Aus den Leidenschaft der deutschen Wolgakolonien*, hrsg. von Esselborn, Karl, Darmstadt, 1922, S. 8-9.
- 17 *Ebenda*, S. 10.



- 18 “Nachrichten aus der Kolonie Grimm” , *Die Welt-Post*, 29. IX. 1921, S. 5.
- 19 *Die evangelische Diaspora*, 1921, No.3, S. 90.
- 20 “Nachrichten aus der Kolonie Grimm” , *Die Welt-Post*, 29. IX. 1921, S. 5.
- 21 *Ebenda*, S. 91.
- 22 “Aus der Hölle der Wolga-Deutschen” , *Die Welt-Post*, 1. IX. 1921, S. 5.
- 23 Bier, Friedrich/Schick, Alexander, *a. a. O.*, S. 8.
- 24 *Герман А. А. Указ. соч.* С. 119-120.
- 25 Bier, Friedrich/Schick, Alexander, *a. a. O.*, S. 10.
- 26 *Die evangelische Diaspora*, 1921, No.3, S. 90.
- 27 Bier, Friedrich/Schick, Alexander, *a. a. O.*, S. 11.
- 28 *Deutsche Post aus dem Osten*, 1921, No.35, S. 3.
- 29 “Nachrichten aus der Kolonie Grimm” , *Die Welt-Post*, 29. IX. 1921, S. 5.
- 30 *Ebenda*.
- 31 *Ebenda*.
- 32 *Герман А. А. Указ. соч.* С. 122-123.
- 33 *Deutsche Post aus dem Osten*, 1921, No.34.
- 34 *Ebenda*, No.35, S. 3.
- 35 *Ebenda*, No.35, S. 4.
- 36 *Die evangelische Diaspora*, 1921, No.3, S. 91.
- 37 *Герман А. А. Указ. соч.* С. 124-128.
- 38 Kindsvater, P., “Nachrichten aus Rußland. Brief aus Rußland” , *Ebenda*, 10. X. 1921, S. 7.
- 39 Conrad Schleucher, “Aus Rußland” , *Die Welt-Post*, 12. I. 1922, S. 7.
- 40 “Letter of John Peter Quint” , dated December 19, 1921, *Ellis County News*, 2. II. 1922, S. p. 4; Sinner, Samuel, *Letters from Hell: An Index to Volga-German Famine Letters Published in Die Welt-Post 1920-1925; 1930-1934*, Lincoln, 2000, p. 3.
- 41 George Repp, “Balzer, 14. Dez. 1921” , *Volga Relief Society*, Newsletter, 27. I. 1922.
- 42 *Герман А. А. Указ. соч.* С. 129-130.
- 43 Там же. С. 130-131. 移住・疎開については次の研究がある。Малова Н. А. Миграционные процессы в немецком Поволжье в

- п е р и о д   г о л о д а   1920-1922   г г. // Н е м ц ы   Р о с с и и   в  
к о н т е к с т е   о т е ч е с т в е н н о й   и с т о р и и : о б щ и е  
п р о б л е м ы   и   р е г и о н а л ь н ы е   о с о б е н н о с т и .  
М . , 1999. С . 174-184.
- 44 Т а м ж е . С . 132-138.
- 45 Т а м ж е . С . 140-141.
- 46 George Repp, "Ein Brief aus Balzer" vom 5. I. 1922, *Volga Relief Society*,  
Newsletter, 20. II. 1922.
- 47 P. Knies, "Schilling", letter dated 12. II. 1922, in: *Volga Relief Society*,  
Newsletter, p. 3; Sinner, Samuel D., *Der Genozid an Russlanddeutschen 1915-1949*, S. 32.
- 48 P. Knies, "Die Letzten Brief aus den Wolga-Kolonien. Schilling", *Volga Relief*  
*Society*, Newsletter, 13. II. 1922, p. 3; Sinner, Samuel D., *a. a. O.*, S. 40.
- 49 Sinner, P., "Schilderung des großen Hilfswerkes durch das National Lutheran  
Council in Rußland", *Die Welt-Post*, 13. IV. 1922, S. 2.
- 50 H. Ehlers, "Heinrich Ehlers schreibt aus Dinkel", *Volga Relief Society*,  
Newsletter, 17. IV. 1922, p. 3.
- 51 Kindsvater, P., "Ein Brief aus Rußland", *Die Welt-Post*, 25. V. 1922, S. 2.
- 52 E. Eichhorn, "Alt=Messer", *Volga Relief Society*, Newsletter, 24. V. 1922, p. 32.
- 53 George Repp, "Letter from Balzer", dated 18. IV. 1922, *Volga Relief Society*,  
Newsletter, 24. V. 1922.
- 54 *Die evangelische Diaspora*, 1922, No.1, S. 4.
- 55 Г е р м а н А . А . У к а з . с о ч . С . 142.
- 56 たとえば 1922 年 5 月中葉のケーラーからの手紙。 *Der Wolgadeutsche*, 1922, No.4, S. 2.
- 57 *Wolgadeutsche Monatsheft*, 1922, No.2, S. 32.
- 58 1922 年 7 月 27 日掲載記事 (Salzman, Alexander, "Aus Rußland", *Die Welt-Post*,  
27. VII. 1922, S. 8)、7 月 29 日掲載記事 (Wacker, F., "Norka", *Volga Relief Society*,  
Newsletter, 29. VII. 1922, p. 3)、7 月 31 日付海底電信 ("Ein Kabelgramm aus Walter",  
*Die Welt-Post*, 10. VIII. 1922, S. 2.)、10 月 23 日付手紙 ("P. Sinner an  
H. P. Wekesser, Brief vom 23. Oktober 1922", AVRS:RG4879. AM:VI. 2. 8. A. 2, p. 1f.,  
Sinner, Samuel D., *a. a. O.*, S. 33.)、1923 年 2 月 1 日付掲載記事 (Weibert, K., "Aus

Messer, Rußland” , *Die Welt-Post*, 1. II. 1923, S. 5) など。

- 59 Paul Flitzler 氏所蔵。ズユテーリン文字の原文の解読に早稲田大学教授ギュンター・ツォーベル (Günter Zobel) 氏の助力を得ている。
- 60 1941年のシベリア・中央アジアへの強制移住については半谷史郎「ヴォルガ・ドイツ人の強制移住」(スラヴ研究 47、2000年)がある。なお、本論文のテーマに直接関連するロシア内外の研究文献としては以上の注の他に *Ерина Е.М. Голод в Покровске и уезде в 1921-1922 годах // Саратовское Поволжье в панораме веков история, традиции и проблемы. Саратов. 2000* など何点かあることを付記しておく。

ヴォルガ・ドイツ人女性アンナの生の軌跡——戦争・革命・飢餓・国外脱出

はじめに

一九三七年にライプツィヒで『ヴォルガ・ドイツ人の運命』という書物が刊行された。副題は「ポリシェヴィズムによって破壊された故郷の破滅から脱出することのできた外国在住ドイツ人女性の体験」、著者はアンナ・ヤネツケ（筆名、本名はヤウク）、編者としてフリッツ・ランゲンの名前がある(1)。筆者は、この書物のコピーをシュトゥットガルトの「外国関係研究所」(Institut für Auslandsbeziehungen)の図書館から取り寄せたが、実はそれ以前に偶々、アメリカのネブラスカ州リンカーン市にある「アメリカ・ヴォルガドイツ人歴史協会」(American Historical Society of Germans From Russia)の図書室でそのタイプ原稿——表題は「アンナ・ヤネツケの事実描写と体験 フリッツ・ランゲンを通して」——を見つけていた(2)。それは、何箇所か手書きの加筆があり、また刊行本とのあいだにもとところどころ文章表現の違いや削除部分が認められるところから、刊行本の基となった原稿という可能性が強い。アンナ本人の手書き原稿をランゲンがタイプし、それにアンナが加筆した、という推測も成り立つ。さらにその後、この書物には著者の甥（兄ハインリッヒの子、アメリカ・コロラド州、一九九九年死去）による英訳本(3)があることが分かり、筆者はそれをノースダコタ大学でコピーした。

以上のような経緯で筆者が出会った本書は、原著の副題からも推測されるように、第一次世界大戦、社会主義革命、内戦、飢饉と続くなかで、一九二一年末にヴォルガ地方からドイツへと脱出したアンナ・ヤネツケの手記である。そこには、革命後の悲劇的状況のなかで少数民族ドイツ人として、加えて「追放」されるべき「クラーク」（富農）の家族として生きたヴォルガ・ドイツ人の運命が刻印されている。

本稿は、この手記によって著者アンナの生の軌跡を辿り、人類が二〇世紀前半に経験したひとつの歴史的現実の一端を紹介しようとするものである。アンナの記述には、記憶違いと思われる点もないではなく、また親族に余計な影響が及ぶまいとして多くの地名が伏されており、正確さに欠けるところもあるが、当時の歴史の流れ自体は十分に映し出されていると考えられる。

## 一 平穏な、豊かな生活、そして不慮の事故——第一次大戦前

### (1) アンナの家

一八世紀末以降に租税や兵役の免除という特典を与えられてヴォルガ地方に入植してきたドイツ人は、一九世紀半ばにはその特典を奪われ、ロシア帝国の臣民として生きていくことを余儀なくされたが、そのロシア化政策のなかでも、彼らは、意外なほど自分たちの言語や生活習慣を守り続けていたようである。アンナ・ヤネッケの一家も、そうしたヴォルガ・ドイツ人であった。(4)

アンナの女方の祖先を辿っていくと、彼らはドイツからの第一陣の入植者としてザクセンとヘッセンから来住し、一七六五年にヴォルガ河右岸（山地側）につくられた入植地サレプタの最初の住民となった。彼らは三人の子供たちのために入植地ホルシュタインの新開拓地に土地を購入したが、その三人のうち一人がアンナの曾祖父であり、彼は、その後、オーバードルフ村の創設に参加した。

この曾祖父は富を蓄えたが、息子たちは、不作に悩まされ、また、貸した金を取り戻せなくなり、相続財産の多くを失ってしまった。それでもその次の世代のアンナの父ゴットフリート（一八五七年生）は、自分の父親の早い死去ののちに長男として、オーバードルフ村で土地を経営した。

オーバードルフ村は、ヴォルガ河の右岸（山地側）、サラトフの南一八〇キロに位置し、一九世紀に入ってさまざまな入植地から移り住む人たちによって形成された集落で、第一〇回人口調査（一八五九年）以後は土地割替を行う共同体となり、一八八六年には人口二四九人（男性六一八人、女性六三一人）、耕地面積は四五七九ヘクタールを数え、住民のドイツ人はルター派であった。(5)

地条混在の開放耕地から各戸独立の区画地へというストルイピン土地改革はアンナの住む地域では一九〇七年から一九〇八年にかけて実施されていたというが、彼女の家の農業経営は豊かであった。アンナによれば、ヴォルガ地方の黒土地は早魃がなければかなりの収穫をあげることができ、最小の経営でも約一〇〇モルゲン（一モルゲンは二エーカー）の広さであったというが、彼女の父は、耕地と牧草地を合わせて一五〇モルゲンを所有し、加えて、国有地を一二年の延長可能な契約で賃借していた。アンナの家はこれだけの土地

を使って、そして、何人もの男女の使用人を雇って、小麦とライ麦の栽培を中心に大規模な農業経営を営んでおり、それはまさにクラークの経営であったのである。

この父の、そして母エヴァ（一八五八年生、旧姓ククスハウス）の下、アンナは、男六人女六人という一二人の兄弟姉妹のなかで育った。順に名前を挙げてみると、カタリーナ（一八八〇年生）、エヴァ（一八八二年生）、ゴットフリート（一八八四年生）、ハインリッヒ（一八八七年生）、アンナ本人（一八八九年生）、ダヴィド（一八九一年生）、ナタリー（一八九三年生）、フリードリッヒ（一八九五年生）、アマリー（一八九七年生）、双子のゲオルグとカトヒェン（一八九九年生）、アレキサンダー（一九〇二年生）となる。

アンナは、第一次世界大戦までの自ら経験した時代はすばらしかったと言い、「ヴォルガ・ドイツ人はパラダイスのなかで生活していたといっても過言ではない」と回想している。彼女によれば、ドイツ人の入植地では個人的にも社会的にも不平不満はなく、行政当局との関係も友好的であった。「飢えた人はほとんどおらず、冬に凍死するのは大酒飲みか怠け者だけだった」。この回想は、その後の「ソヴェト時代および窮乏する戦後ドイツの生活と比較して」のことでもあった。

## （２） ヴォルガ・ドイツ人の生活

ここで、アンナがどのような環境のなかで育ち生活していたかを、彼女の記述から紹介しておこう。

ヴォルガ・ドイツ人地域では、農作業は一年のうち七ヶ月ほどであるが、雪解けの終わる三月には小麦の播種がはじまる。このころには、夜中の二時には起床し、馬に飼料を与え、簡単な食事をし、耕地へと一時間の道のりを向かう。一〇モルゲンから二〇モルゲンの広さの個々の畑はすでに前年の秋に深く鋤き返されていて、このときはローラーで土地を整備し、機械を使って播種する。昼には持参した燻製のソーセージ、生ハム、パン、バターで食事をとる。帰宅は夜の七時ころ。こうした一日が二、三週間続く。小麦の後は、聖霊降臨祭までの日々に、ジャガイモ、スイカ、メロン、カボチャ、ヒマワリ、野菜といった作物の栽培が続く。その後、農作業は二、三週間の休みに入るが、このときに羊毛刈り、果樹園の害虫駆除、牧草の取り入れといった仕事がある。そして、炎熱下の農作業の時期がくる。雨は少なく、冬期に地下の氷室でつくっておいた氷で冷やしたスイカ蜜ジュースやクワスで喉の渴きを癒しながら働く。ジャガイモ畑やスイカ畑での作業が続けられ、

ライ麦の収穫がはじまる。三〇、四〇度になるときもある暑さのなかで早くに実ることもあり、収穫作業はときには夜中の二時からその日の夜の一〇時ぐらいまで続く。ライ麦が刈り取られた後に、小麦、大麦、カラス麦の収穫が続き、キビが最後となる。こうして収穫された穀物は、かつては打穀棒で、いまでは多くが機械で打穀される。農業機械は早くから用いられ、大抵はドイツ製である。この後は、冬ライ麦のための農作業と翌春のための畑を掘り起こす仕事が残っている。アンナの家には二四頭もの雄牛がいた。馬もいたが、それは軽い作業に使われた。

一〇月半ばには収穫した小麦を換金のために都市およびヴォルガ河岸停泊の船にまで搬出する。臨時雇の人には手当を支払って解雇する。常雇の使用人は、このときに、放牧していた家畜を家に連れ戻し、冬期の飼葉を用意し、森で木を伐採して薪をつくる。冬期は静かな生活が続いたが、それでも、男は農機具や馬具の修理をし、女は裁縫をする。午後から夜にかけて近所の女たちも集って一緒に羊毛を梳いて糸を紡ぎ、その後で彼女らにはコーヒー、ケーキ、スイカ蜜などが振舞われた。紡いだ糸は村の織工のところでは布にし、さらにメッサーやバルツァーなどの工場で染色し、厚手の作業服とする。ちなみに、夏には男はドリル織の服を、女はこの地方特産の縞綿布（サルピンカ）の服を着ていた。厳しい寒さの冬に大事なのがフェルト長靴であるが、これはロシア人を家に呼んで何日もかけて製氈してもらう。ロシア人の製氈工は、朝五時から仕事を始め、七時に朝食（焼きソーセージの入った鍋にパン、サモワールの茶、甘く煮た果物）、その後一二時まで仕事で昼食（羊やガチョウや豚の肉料理、あるいはロシア風のボルシチ）、そして夕方六時まで働く。夕食にもジャガイモに肉料理かソーセージそして茶と、豪勢な食事が供される。

こうした農作業を続けるなかで、日々の生活は良かった。豚や牛の屠殺は一一月に行われ、肉やソーセージは通常は聖霊降臨祭までは貯えがあった。ガチョウやカモも屠殺され、雪の中に凍らせて保存された。聖霊降臨祭のあとは、必要に応じて豚や雄羊を屠殺し、夏には牛が死んだときにその肉が食卓に供された。そのほかに、鳥類、ニワトリ、七面鳥も食用とされた。

人びとは信心深く、日曜日の教会は一杯になり、そこで自分たちのアイデンティティを確認した。そうした連帯が厳しい時期を乗り越える力となっていた。秋の収穫祭では、若者は特別の部屋を用意して踊りに興じ、年寄りには知り合いを訪ね、美味しい食事と、カフカースのドイツ人村でつくられた葡萄酒を楽しむ。また、クリスマスは、普通は一年契約の男女の使用人の雇用期限となっていたが、そのときは、もしも使用人が次の一年の働き

場所を決めていれば、それまでの主人がそこまでトロイカの馬轡で送り届けるのが慣わしとなっていた。各家が飾りつけたトロイカを差し出し、それに乗る使用人も晴れ着で着飾り、そうしたトロイカが何台もクリスマスの飾りで美しい村の本通りを早足を競って行く。この光景が二時間ほどみられた。アンナは、のちに「クラーク」として弾圧されることになるこうしたドイツ人農民は使用人を大事にしていたのだ、と強調する。

### (3) 不慮の事故

豊かな生活環境のなかで、そして裕福な家庭のなかで、アンナはすくすくと育った。

しかし、このようなアンナに突然、悲運が襲った。それは、一九〇五年九月二〇日のこと、前夜母親は不吉な夢を見たと言った、その日である。アンナ一六歳のときである。

この日、アンナの村ではある結婚式が行われていた。ここでは、新郎新婦をお祝いするためにみんなで大空に向けて銃を発射するのが、村の慣わしであった。午後四時ころであった。新郎新婦は教会を出て、祝いの馬車に乗り込んだ。アンナの兄ハインリッヒは、祝意を表して銃を空中に発射しようとしたが発火せず、一度地上に向けてからという隣人の助言にしたがってそのように撃った。ところが、この銃弾が、ちょうど庭のリングを握りかかっていたアンナの左脚に命中してしまったのである。重傷であった。足首は脚の引き裂かれた肉片にぶらさがりかかるような状態であった。すぐに近隣の医者のところへ駆けつけたが、医者はすべて日露戦争に駆り出されていておらず、町の病院へと急いだ。しかし、そこでも医師は満州に送られており、さらに郡市〔カムイシン〕の病院に向かった。発熱に苦しむ重傷の身体ですでに凍てついたデコボコ道を馬車で走ることは、アンナにとっては拷問であった。事故が発生して二四時間後によく医師の診断を受けることができた。医師はなんとか切断しないで左脚を治療しようとしたが、熱は四一度もあり、危険な状態に陥っていた。「命を失うか、脚を失うか」、医者はアンナに告げた。「死にたくなんてない。私はまだ若い。一七歳にもなっていない。どうか助けて」とアンナは叫んだ。彼女が麻酔から醒めたときには左脚は膝のところで切断されていた。ハインリッヒにたいする父の怒りは凄まじく、アンナは「ハインツ〔ハインリッヒ〕を許して」と父に請うた。この年のクリスマスにはまだ傷は癒えていなかったが、「アンナなしにはお祝いはできない」という父の言葉に、アンナは轡で家に帰った。その後、翌年の五月に病院にもどり、二回目の手術を



した。傷が化膿していたのである。七月に退院することができたが、松葉杖のいらいらした生活がはじまった。二年後になって木製の義足が手に入った。アンナは、当初はそれに失望したが、次第に慣れていき、人間の脚と変わらずに歩くことができるようになる。ちなみに、アンナが事故をおこした結婚祝いのときには、さらにある娘が肉脂入りの熱鍋を倒してしまい、その姉の子どもたちの顔に火傷を負わせるという事故もあり、新郎新婦は、この地に居づらくなったこともあって、その後アメリカへと移住していった。

アンナは、実は二年前の兄ゴットフリートの結婚式の際に花嫁家の祖父から見初められ、孫フリッツとの結婚話もできていたが、彼女は、いろいろ躊躇した挙句、この話を受け入れることを断念する。

#### (4) アンナの夢

アンナは、義足の左脚で生きていかなければならないという悲運にも、挫けることはなかった。彼女は、小さいときから裁縫が得意であった。すでに一〇歳のときに妹三人のための衣服を縫い、一二歳のときにはミシンで下着をつくり、事故直前の一六歳のときには外套をも縫製することができた。彼女は、この裁縫の仕事を学び、それで一本立ちしたいという夢をもった。この計画には当初両親は反対であったが、ヴォルガ河左岸の町に住む義兄の説得によって両親も折れ、アンナは、その町の裁縫学校で学ぶことになる。そして、この学校を終えたアンナは、一九一一年、二二歳で自らの裁縫学校を開いた。

裁縫学校の仕事が順調に軌道に乗っていくなかで、アンナの胸にはさらに大きな夢が生まれていく。裁縫のほかにもいろいろな分野の仕事を身につけ、将来はいつかサラトフにドイツ人家政学校を開校したい、という夢である。そして、彼女は、この夢の実現のためにはできるだけ自然に歩けるような、より快適な義足が必要であり、そのためには一度ドイツへ行かねばならない、と考えたのである。

しかし、このようなアンナの夢は、戦争の勃発とその後の社会の激変に直面することになる。

#### 二 戦争、革命、内戦、そして飢餓のなかで

一九一四年、第一次世界大戦が勃発した。ヴォルガ地方に住むドイツ人にとっては、母

国ドイツを敵にした戦争である。

一九世紀後半以来ロシアに広がっていたドイツ人にたいする反感は戦争中はとくに露呈した。アンナが親類の女の子と町の通りを歩いていたときである。二、三人の男の子が彼女たちにしつこくつきまとい、そのうちの一人がアンナの洋服をつかんだ。アンナはそれを振り払い、彼の横面を叩いた。彼らは、「エカテリーナの嫁入り持参金」などと、汚い言葉を口走った。ヴォルガ・ドイツ人はドイツから嫁入りしたエカテリーナ二世が入植に招致した人たちだ、というのである。

### (1) 戦場の兄弟たち

戦争の波は、当然のことながら、アンナの家族にも襲いかかった。

アンナの兄のゴットフリートとハインリッヒは戦争が始まるとすぐに、そして弟フリードリッヒはその翌年に、戦場へと駆り出された。フリードリッヒからは何の消息もなく、また、当初は便りのあった先の二人もしばらくして連絡がなくなり、その生死が心配であった。母親は、三人が御するトロイカの三頭の白馬が川に沈むけれど再び顔を出して対岸まで泳ぎ着く情景を夢に見たといつて、彼らの無事の帰還を信じようとした。

連絡のなかったハインリッヒから、ポーランドのクラカウ近辺の戦闘のさなかに書かれた、一九一四年一月付けの手紙がアンナに届いた。しかし、その内容は、フランス語で「永遠の別れ」の意味合いをもつアデューを繰り返す、死を覚悟した便りであった。

愛する妹よ！　ここ戦場の切り株の上に座って、もういちど君に別れの手紙を書きます。私の仲間たちは、雪のかけらのように、死んでいっています。もしも私にまだ父の財産の分け前を受け取る権利があるのだとすれば、その権利のすべてを君に譲ります。

アデュー、アデュー、アデュー

君の兄　ハイン

ツ

ガリツィアの雪深い戦場で愛する故国ドイツの銃弾による死を覚悟するハインリッヒの憔悴した姿を思い浮かべて、アンナをはじめ、家族は暗然となった。ただ、母親だけは、戦場からの帰還を信じて疑わなかった。このハインリッヒは、その後の便りにより、ドイツ軍の捕虜として、オーストリアのクライン・ミュンヘンに送られていたことが分かる。

他の二人については、それぞれの便りによれば、ゴットフリートは要塞プロゼムイスル陥落の際にドイツの捕虜となり、フリードリッヒは、カフカース地方にあって野戦病院薬劑部の助手として軍務についていた。

## (2) ドイツ人捕虜との交流

一九一五年の秋、アンナはサラトフに出て裁縫学校を開くことになったが、そこで彼女は、戦争の現実を目の当たりにする。ヴォルニニやポーランドからのドイツ人難民、東プロイセンから送られてきたドイツ人捕虜が数多くいたのである。捕虜は意図的にヴォルガ・ドイツ人地域に送られてきていた。アンナは、ドイツ人難民の別かれ別かれになっていた両親と娘がこの地で遭遇するという光景にも出会った。

一九一六年のクリスマスのときに、アンナは、両親の住むオーバードルフ村の家に帰った。そして、そこで彼女は、四人の見知らぬドイツ人が両親と一緒に昼食している光景にぶつかった。近くのK収容所に収容されていた捕虜が村の教会のクリスマス・ミサに参列していたのを見て、父が招いたのであった。ヴェストファーレンの教師、ポンメルンの商人、オーバーシュレージェンの農民、そしてハノーファー出身の少年であった。彼らは、アンナが夢見ていた「ドイツ人」、つまりブロンドの髪のジークフリートのような人たちではなく、毛皮の上着に灰色の、あるいは黒いズボン、そしてロシア風のフェルト長靴という姿であった。しかも、フェルト長靴は、膝までではなく、短い女性用のものであり、それがアンナたちの失笑を誘った。アンナは、しかし、彼らと一緒に、ドイツの歌をうたい、クリスマスをお祝いすることになる。彼らのひとは次のように言ったという。「夢のようだ。村の教会の鐘の音を聞いて、まるでドイツの我が家にいるようだ。この鐘の音につられて教会にやってくると・・・ドイツ語の歌と説教が耳に入ってきた。なんとという驚きであったか。」村の多くの家が、アンナの家のように、日曜日毎にミサの後でドイツ人の同胞を招いていた。もしかしたら自分の家の親類筋に出会えるのではないか、という思いもそこにはあった。

アンナの父は、先の四人のなかではオーバーシュレージェンの男が気に入っていた。どのような仕事でもこなせるような、がっしりした農民であった。一九一七年にK収容所が閉鎖されるとそこに収容されていた捕虜はドイツ人入植地で働くことも許されることになり、父はこの男が自分の家に留まってくれることを望んだが、それは叶わなかった。

この収容所にはチェコ人の捕虜も送られてきていたが、彼らは、アンナたちヴォルガ・ドイツ人にたいする反感を隠すこともなく、ドイツ人捕虜を食卓に招くことを心よく思っていなかった。このチェコ人捕虜たちは、ロシア革命後にも故郷に帰ることはなかった。アンナの手記によれば、彼らは「ボリシェヴィキ側に身を投じ、大部分が白軍との戦いに参加した」と記されているが、実際は逆で、ボリシェヴィキ政権と戦うチェコスロヴァキア軍団に入っていたと推測される。

### (3) 免れた強制移住

一九一七年の二月革命によって三百年続いたロマノフ王朝は崩壊し、ケレンスキー率いる臨時政府が樹立されたが、こうした激変がヴォルガ・ドイツ人の生活にどのような直接的影響を及ぼしたか、アンナの手記には、自覚的には記されていない。ただし、彼女が誤ってケレンスキー時代の事として記している、ヴォルガ・ドイツ人にたいする集団的強制移住計画は、二月革命直前のことである。第一次大戦が始まると、ロシア政府は、国内に在住する敵国人——ドイツ人、オーストリア人、ハンガリー人、トルコ人など——の財産を没収し、彼らを全員シベリア、中央アジア、ウラル地方に追放する計画をたてた。そして、実際、西部ロシアに住むドイツ人一〇万人にたいしては一九一五年から一九一六年にかけてこの計画が実行に移され、ヴォルガ・ドイツ人にも一九一七年二月に財産没収令が発せられ、強制移住も決定された。アンナは、次のように書いている。ある日曜日、牧師たちは説教壇から長いこと準備され今や公表された追放令を読み上げた。各家族は、衣類と必要な家具以外は一頭の家畜のみを持って行くことが許され、家と屋敷は国家の所有となる。これは残酷な打撃である。はじめすべての人びとは無言で跪き、祈った。しかし、つぎには絶望感が広がった。「なにゆえに私たちの祖先はこの地にやってきたのか。なにゆえに彼らはドイツに留まってくれなかったのか」。出発の日はまだ決められていなかったが、毎日、それを覚悟しなければならなかった。

しかし、この後すぐに二月革命が勃発し、この計画は実施されることを免れたのである。

ちなみに、アンナの手記によれば、集団的移住計画はその数ヶ月後にもヴォルガ・ドイツ人にもたらされたという。ドイツ保護下のポーランドに移住させる、という計画である。彼の地には新たにいくつかの村が建設され、各家族は、見捨てていく住居の代わりにそこに屋敷を受け取る。動産は持って行くことが許される。その見返りに、ヴォルガ・ドイツ

人の入植地にはポーランドからロシア人家族を入植させる。サラトフにはすでにそのための事務所がつくられ、身分証明証も発行されはじめていたが、その後、一九一八年一月にドイツで帝政が崩壊して、この移住計画は頓挫したという。

#### (4) 十月革命、そして財産没収

一〇月にレーニンが政権を奪取して、ながく混乱が続くなかで、ロシアは社会主義建設に向かって走り出した。この体制の変革は、すぐさま市民の生活を根底から揺るがすこととなった。ヴォルガ・ドイツ人地域でも、状況は同じであった。富裕者の財産の没収がはじまった。

革命がおこってからまもなくのクリスマス直後、何人かのヴォルガ・ドイツ人を含む市民一八人がヴォルガ河に浮かぶ島で「人民解放者ポリシェヴィキ」の一斉射撃を受ける、という出来事がおこった。そのほとんどが資産家であったが、資産家と同じように扱われた、ツァーリに忠実のロシア人警官もいた。そして、このロシア人警官だけにはたまたま銃弾が逸れ、アンナは、この男から出来事の全容を聞くことになる。それによると、一八人は突然夜中にベッドから起こされて捕えられ、一ヶ月間拘禁された。その後、ヴォルガ河に浮かぶ貨物船に運ばれ、故意に船のなかに入れられた水の汲み出しをさせられたり、地上で石を背負わされたり、無意味な労働を強いられた後、島に運ばれ、衣類をすべて剥ぎ取られ、銃撃を受けた。草むらで死んだふりをして一命を取り留めた警官は、葦のなかを近くの左岸まで泳ぎ着き、そこにあった小舟で同夜に対岸に渡った。このサラトフの南の地から彼は、はるか北にある自分の家に向かって、できるだけ人に会わないように夜に移動し、信頼できるヴォルガ・ドイツ人——この人自身すでに財産を没収されていた——に食事や衣類の世話になったり、乞食の姿をしたりして、生き延びた。島で撃たれた一七人の遺体はそこで埋葬されたが、その後、春の雪解けで流されることを心配した妻たちの願いが受け入れられ、他の土地に移すことが許された。しかし、それは、誰の助けもなしに、しかも墓地ではなく春に冠水しない岸辺に、ということであった。

財産没収の波は、アンナ自身のところまで及んできた。彼女は、革命後、すぐに村にもどるようにと両親に言われていたにもかかわらず、一九一八年七月までサラトフに留まっていたが、そのころから、わずかな資産を持つ者からも財産を没収するという動きがはじまり、アンナの所有するミシンが対象となった。彼女は、集団奉仕労働に出るようとい

う要求を断わり、二台のミシンを売り払い、霧深い夜に自分用のミシンを馬車に積み込み、しかし多くの家具は残したまま、両親のもとに逃げて行った。八月末に、アンナは、残してきたものを取りにサラトフにもどったが、炭焼き竈のほかは何も残っていなかった。近くの醸造所は榴弾で焼け、その炎で地区一帯は破壊され尽くされていた。

#### (5) 兄弟は戦場から帰還、そして赤軍へ

一九一八年九月はじめ、末弟のアレキサンダーが町に住む知人のところから学校に通うという話になり、アンナの家族は彼を駅〔クプツォヴォ〕まで見送りに行った。そして、驚いたことに、彼が乗り込んだと同じ列車で、アンナの兄ゴットフリートが戦場から帰ってきた。それを知ったアレキサンダーは、すぐさまゆるやかに発車する列車から飛び降りた。両親は、将来息子たちに譲るようにと所有していた駅近くの別屋敷でゴットフリートを迎えた。本屋敷にいたアンナは、その夜、このことを知って歓喜した。母は、翌日、もともと生きの良いニワトリを使って歓迎のご馳走をした。

ゴットフリートは、ドイツの捕虜として農場で働かされていたが、そこへ弟のハインリッヒがオーストリアから送られてきていた。しかし、二人一緒に帰還することは許されず、年上で既婚であるということからゴットフリートだけとなった。ちなみに、このハインリッヒは、その後、すでにアメリカに渡っていた弟ダヴィドの招きで、海を渡っていくことになる。

ゴットフリートが帰ってから二日後、カフカース地方で従軍していた弟フリードリッヒが帰郷しているという情報がアンナたち家族に届いた。しかし、彼は、赤軍兵士となっていた。負傷していたので病院から村に一時帰宅を許されたが、このとき村は白軍によって占領されており、彼は白軍に連れて行かれた。他の弟二人、ゲオルグとアレキサンダーはすでに赤軍に連れて行かれており、フリードリッヒは、兄弟が白軍と赤軍のあいだで引き裂かれている事態をみて、白軍から抜け出して赤軍に入った。将来は医者となる夢をもっていた彼は看護兵として病院で働くことを望んだが、アルハンゲリスクの内戦の現場へと送られてしまう。

#### (6) 内戦、そして徴発

赤軍と白軍の戦いは、ヴォルガ地方をも激しい戦場としていった。

アンナは、ゴットフリートが帰還してまもなく彼と一緒に、ヴォルガ河対岸（左岸）の親類の村を訪れることを企てた。ゴットフリートは親類に挨拶をし、アンナは旧友に会って秩序回復後に裁縫業を再開する可能性を探ろうとした。ヴォルガ河を船で渡ってポクロフスクまで行き、そこからは鉄道を使った。しかし、村に着いて三日後にアンナたちの村に白軍が進軍して戦闘が行われているという情報が届き、止むなく引き返すことになった。

独りで帰る途中で立ち寄ったサラトフはボリシェヴィキの支配下にあり、彼女は、一〇月二三日にそこで革命記念の祝いがなされているのを目撃する。通りは馬鹿騒ぎする人びとで一杯であった。駅では列車が走る気配はなく、手荷物運搬人もいなかった。風邪気味のアンナは義兄の叔母の家に転がり込んだ。その家の息子の友人が新政府のコミッサーであったことから、アンナは、彼のついでで手に入れた列車の切符で一週間後にサラトフをあとにし、郡市の友人宅に身を寄せた。この家族の兄弟の大きな皮革工場はすでに接收されており、彼は、家族を飢えさせないためにと町で密売品取引を行っていた。アンナは、二週間ほど彼らの厄介になった。村では白軍が勢力を増しているという情報のなか、アンナは、赤軍の勢力を背後に感じながら、自分の村から二〇キロのところまで馬車でやってきて、八日間そこで待機した。そこへ白軍退却の情報が届いた。彼女は不安がる御者を説得して村へと入っていった。駅近くの屋敷には、ゴットフリートが先に、赤軍の外套を着て兵士輸送の船にまぎれて帰ってきていた。彼は、アレキサンダーを町から連れて帰っていた。フリードリッヒも病院から帰ってきた。アンナは、本屋敷に住む母親を訪ねるべく馬を探したが、良馬一二頭はすべて赤軍に持ち去られており、代わりにおいていった痩せ馬二頭を走らせた。母親は非常に意気消沈しており、家のなかは空っぽで、干し草もなかった。ガチョウ、ニワトリ、カモはすべて赤軍に撃たれてしまっていた。妹アマリーの結婚話が進んでおり、それだけが慰めであった。結婚式は翌年初めに、以前よりはずつつつましく執り行われた。

ゴットフリートはその間に地区ソヴェトの責任者になっていた。故郷の村に進軍してきたモスクワの赤軍連隊の指揮官は結婚式に軍楽隊の演奏をと申し出ていたが、それより前にこの連隊は、移動命令にしたがってアルハンゲリスクへと向かってしまった。アンナによれば、このときの軍隊だけは故郷に良い印象を残したが、その前後に村を占領した部隊は「人間のくずで、文字通りの猛獣」であった。共産主義の理想を宣伝することはなく、有能で勤勉な地主からすべてを略奪し、それを自分のものとするか、あるいは意味なく無

分別に破壊した。財産を没収される者が零落しようがどうなろうが、彼らには関係ないことであったという。

アンナはつぎのように記している。「略奪されたものを略奪せよ」というレーニンのスローガンによる財産没収」は貧しい人びとの正気を失わせた。彼らは、いまや突然主人となり、すべてが自分たちのものだと考え、略奪した。「烏合の衆が商店や家に駆け込み、主人を脅迫することが日常茶飯事となった。」人びとは、通りに投げ出された略奪品を奪い合った。かつてアンナの家で洗濯婦として真面目に働いていた女性もこの狂気にとらわれ、窓に掛けられてあった衣類をひたくり、叫んだ。「いまや金持ちの衣服で私の身体を包んでみるのだ」と。この女性は、二年後、アンナの母のところへやってきて、泣きながら一片のパンを乞うことになる。

一九一八年の秋までは、アンナの一族のところには馬、役牛、乳牛、子牛などすべてがいたが、馬はその年の末までにすべてが徴発にとられるか、みすぼらしい馬と交換させられた。ゴットフリートが一二頭の良馬の代わりに与えられた二頭の痩せ馬は、その四週間後にさらにひどい馬二頭と交換させられ、さらに、冬に世話をして体力を回復させたその二頭も春には持って行かれ、代わりに二頭のラクダがあてがわれた。しかし、ラクダは、ヴォルガ河の左岸（草地側）ならまだしも、右岸（山地側）では使い物にはならなかった。父の所有していた黒毛の馬車馬は赤軍がくると干し草の山のなかに隠し続けたが、結局、発見されて持っていかれた。その後あるとき、アンナたち家族は、家の近くまで来た、いまでは骨と皮ばかりに痩せ細ったその黒馬がかつての自分の家畜小屋の臭いを嗅ぎつけ、なかに入ろうとして赤軍兵を手こずらせている光景を目にし、悲しい思いをしている。

他の家畜はその後一年のうちに、屠殺されたり、進軍してきた部隊の持ち込んだチフスに罹り、姿を消してしまった。アンナの父はこうして二〇頭を、彼女の叔父は三六頭を失った。別屋敷近くに屠殺場があり、屠殺された家畜の死体がそこに山積みされた。死体の運搬処理の効率が悪く、屠殺肉が処理されないままに毎日屠殺の指令だけが出された。一〇〇キロも遠いところからも家畜が運ばれてきた。ぎっしりと詰め込まれた家畜は頭を天に向け、飢えと寒さで唸り声をあげた。屠殺前に倒れ死ぬものも多かった。農民にとっては、家族の仲間でもある家畜のこうした光景を見ることは拷問に等しかった。子宮内に子どもを宿した雌牛もいた。春になって暖かくなると、屠殺肉の腐臭がひろがり、かつての家畜所有主は、悪臭を放つ屠殺肉をヴォルガ河にまで運んで水底に沈めるという作業を強いられた。



妹アマリーの夫コンラッドは、一九一九年の段階でまだ自分の兄弟と一緒に二五〇〇モルゲンほどの土地で小麦栽培を行っており、役畜もラクダ九〇頭、牛四〇頭、乳牛三〇—四〇頭、馬二五頭などをもっており、一〇棟の穀物小屋には毎年播種用の種子が納められていた。自家消費用の製粉機もあった。一九二〇年五月にアンナが訪ねたときには、馬、荷車用の牛、乳牛はすでに取り上げられており、復活祭のときの乳牛没収のショックでコンラッドの母親は死んでいた。ある日、二人のコミッサールと一人の女性コミッサールが銃装備の部下三〇人をつれて徴発にやってきた。コンラッドが多額の現金を埋め込んでおいた皮の胴巻きは前以て安全な場所に隠すことができたが、アマリーが結婚祝いに受け取った七〇〇ルーブリは彼女の胸に隠してあった。彼女は咄嗟に抱いていたコンラッドの前妻の子どもの足をつねり、泣き叫ぶ子どもをベッドに連れて行き、そのベッドのなかに金を隠し、こうして発見されずにすんだ。衣類も持っていかれた。肉やソーセージや生ハムといった食料は好んで持ち運ばれた。兵士たちは生ハムを銃剣で突き刺し、通りへと運んでいった。家畜小屋の三週間分の飼料の山のなかにできるだけのものを隠してあったが、掘り返すことを命ぜられた。その間に、穀物小屋からは小麦がすべて持っていかれた。二つの屋敷があったが、良い屋敷は差し押さえられた。

あるときは赤軍が、またあるときは白軍——大抵はドン地方のコサック——がアンナたちの村を襲い、略奪していった。アンナによれば、ソ連信奉者は白軍は残忍であったと言うがそうではなく、「一般的に愛想が良かった」。それにたいして赤軍兵士は、先のモスクワ連隊の兵士を唯一の例外として、いつも侮蔑的で思い上がっており、何も言わずに要求し、すべてを持ち去ったという。こうした横暴な兵士にたいして、アンナはしたたかに対応した。あるときは、馬や飼料の略奪にやってきた三人の兵士を、馬もカラス麦もすべて略奪された後であったのだが、その横柄な態度を戒めながら撃退した。またあるときは、彼女の家を治療所にしようとする軍医の要求を、裁縫のために必要だと言い、また片足の義足を見せて、拒否した。このときは穀物小屋だけを使わせることにしたが、しばらくしてその部隊は退却して行った。さらにあるときは、兵士が持ち込んだ穀粉で翌日までにパンを焼くようにとの要求にたいしても、義足の身で夜中立て働くことはできないと言って、これを断っている。

内戦の銃声と砲声のなかで、ゴットフリートの妻は娘を出産し、その子は村で「大砲娘」と呼ばれるようになる。

アンナの村での白軍・赤軍の戦闘は、一九二一年の春まで続いたという。

## (7) 困窮、そして飢餓

内戦は、財産略奪や宿舎提供によって、民衆にそれまで経験したことのない困窮をもたらした。一九一八年の収穫はかなり良好であったが、それが最後であった。しかもその収穫も没収の対象とされた。貯えを隠し通せなかった人びとは、すでにその年の冬に苦境に陥った。財産のある者は滅ぼすべきだとされた。翌年の春に彼らには播種用の種子がなかった。凶作が続いた。先に記したように、家畜も軍によって持ち去られ、屠殺された。疫病でも大量の家畜が死んだ。恐ろしい飢餓がやってきた。そして、伝染病、とくにチフスが蔓延した。

北へ南へ、そして東へ西へと、避難していく人びとが出てきた。早くに避難した人たちは、家屋敷やその他の財産をたとえ安価であれ売却することができたが、しばらくすると財産売却が困難になり、それを放置したまま脱出することになった。最後まで残った家畜は屠殺してソーセージに加工し、最後の小麦は保存用菓子にした。そうした食料が尽きたときには、村人の慈悲にすぎるほかなかった。

一九二一年春以降、内戦は収まったものの、困窮・飢餓は頂点に達していく。モスクワの政府はこれを抑えることはできなかった。往き来が自由となり、国内に少しでも状況のよいところがあればそこへと避難することができた。しかし、外国への旅券を得ることは、いくら金を支払ってもできなかった。アンナの村を毎日数多くの飢えた避難民が通過して行った。アンナの村は、赤軍の略奪にたいして一致団結したことから、また密告する者も出なかったので、当初は比較的貯えがあったが、相互の助け合いも限界に達していた。飢えた人が戸口にやってきて一片のパンを懇願するのを追い払うのは断腸の思いがし、悲しかった。よろめきながら苦しそうに歩くうちに、脚は膨れ上がり、ついには倒れて、死んで行く。もしも野で倒れ死んだら、動物や鳥の餌になるか、恐ろしいことに人間に食われた。

アンナの身边では親友ゲオルギーネの家族に悲劇があった。裕福な穀物商であった義父（七五歳）はすべてを没収されて失意のうちに死去した。ツァーリ政府の将校であった夫は一九一八年末にカフカースから帰ってきたが新政府の復讐から身を隠し、その後は略奪種子の管理所で仕事していた。夫の稼ぎは十分でなく、持っているものを売って生活していた。ゲオルギーネは赤軍が新設した音楽学校でピアノを教えていたが、三人の子どもも

養っていかなければならず、食べるものを減らしていった。アンナはときどき余裕のあるときには彼女の家に油脂、パン、穀粉、卵などを持って行っていたが、一九二一年夏に少しの食料をもって訪ねたときには、数日前の義妹の餓死を知らされた。まったく痩せ衰え、つぎには不自然に身体が膨れ、顔がやつれ、それでも通りを歩いて一片のパンを乞い、馬の糞を口に入れ、飢えを凌ごうとし、ぞっとするような最後であったという。ベッドに横たわるゲオルギーネの義母は骸骨そのままであった。哀れな目つきで涙を流しながら、「ああ、アンヒェン。来たのかね。一片のパンをいただけないかね。小さな一片のパンを」と言い、少し身を起こして腕を出し、パンを受け取ろうとするしぐさをした。これが彼女の最後の言葉であった。再びうしろにもたれかかり、目を閉じた。アンナはゲオルギーネとともに部屋を出て、彼女の最後の願いを叶えてあげようと一片のパンを取りに行った。しかし、部屋にもどったとき、彼女の息は絶えていた。

ロシア全体でこうして何百万人ものが死んだのである。兄のゴットフリートは、路上で死んだ母親の胸でその乳を吸い続けようとする赤子をみつけ、家に連れ帰ったが、その子の命を救うことはできなかった。チフスや天然痘などの病気が人びとを襲った。飢えで徘徊する人たちが病気を広げた。医者がおらず、医薬品がなかった。その点で、アンナのところでは弟のフリードリッヒが病院で補助医をしていたので、薬などは彼が調達してくれた。赤軍兵として戦いから帰ってきたゲオルグはチフスに罹り、八週間ベッドに臥し、生死の境をさまよいつ時は危篤状態になった。家族が見舞うなか、「今晚は生き延びることができないだろう」という母の囁きが本人にも聞こえ、「どうしても生きたい」という叫びがその場の空気を揺るがした。そのとき、アンナの咄嗟の思いつきで施した酢の湿布が奇跡的な回復をもたらした。彼は、再び部隊にもどって行った。アンナは村で補助医とみなされ、引っ張りだこになる。

都市での飢餓・病気の状況は農村におけるよりもさらにひどかった。人びとは少しでも何かをもっていれば農村に行き食料と交換した。糸、針、ボタンなどの裁縫の材料は現金より貴重で、高く売れた。浮浪する人びとを通して伝染病が拡大し、人がかたまって寒さを凌ぐ冬にはその拡大はさらにひどかった。都市ではとくに燃料に不足していた。通りの樹木は倒され、家の囲いも取り去られ、住居も住人を追い払ったり拘禁したり殺害したりして壊され、燃料用の木材にされた。夜中にのこぎりの音がするのである。アンナによれば、新政府は市民の生活は放置し、新しいイデオロギーの浸透こそを最大の課題とした。

(6)

### 三 ドイツへの脱出——不法に国境を越えて

飢餓がはげしくなるなかで、アンナには、ドイツへ行ってみたいという思いが固まっていくなか、いまの義足がいつまで使えるのか。もしも使えなくなったら、代えとなる義足は当時のロシアで作ることは難しく、ドイツでならより良いものを作ってもらえると考えられた。また、祖先の故国ドイツを訪れることは、若いときから、とくに脚の事故があつてから、彼女の願いでもあつた。加えて、裁縫・仕立の技術をドイツでさらに学び、状況が変化して何年か先に帰国することができれば、その技術を故郷で生かしたいという希望もあつた。家族は、義足であるアンナのこの企ては無謀であり危険であると言つた。しかし、アンナは、このままいて餓死するのもドイツへ向かう途中で死ぬのも同じだと言つて、何もしないよりも冒険の方を選んだ。アンナ自身、この三年間、不都合な身体でも他の人より自立して、しかも困難を首尾よく切り抜けてきたという自負をもつていた。母親があまり心配を示さなかつたこともあり、アンナは家族を説得することができた。父には、もしも国境を越えることができない時にはもどってくる、と約束した。

#### (1) 列車でサラトフからミンスクへ

一九二一年一〇月二五日、アンナは、家族に別れを告げた。約四週間の旅を想定し、荷物はできるだけ少なくしたが、それでも、大きなスーツケース、柳籠、食器などを入れた帽子箱、パンを入れた袋、それに羽根まぐらの五個となつた。父はアンナの出発する姿をみたくないと言ひ、母と姉妹が駅〔クブツォヴォ〕まで見送りにきた。

ドイツへはアンナはひとりで行くつもりであつたが、アマリー・Hという二歳の女性に請われて、彼女を同行させることとなつた。彼女の父は母の死後に子どもたちを他の家族に預け、いずれ迎えに来るといつて一九一〇年にアメリカに移住しており、アマリーはドイツからアメリカの父の許へと考えていた。

アンナの列車は八日毎に走るもので、大変な混みようであつた。従兄弟のアレキサンダーの計らいで座席を確保し、三時間遅れでサラトフ駅を出発した。車内では身動きできず、立ち続ける状態であつた。ストーブはあつても、当時そうであつたように焚かれておらず、寒かつた。まずは一二時間の走行で、翌日の昼、霧深く暗いなかを大きな駅〔タンボフ?〕

に着き、全員降ろされた。いつ再び走り出すか分からないなかを待合室で過ごしたが、そこは赤軍兵士で一杯で、民間人はわずかなロシア人農民がいるだけであった。この駅でアンナは偶然にも弟の赤軍兵士ゲオルグに遭遇した。アンナがヴォルガ地方へ帰る途中と思ったゲオルグは、ドイツ行きの計画を知って、その選択の正しさとともに、困難の大きさをも伝えた。赤軍兵士は休暇中で、ゲオルグも両親のところで数週間を過ごすつもりでいた。

その駅で三二時間もの間待った後に、アンナたちは、別の列車の家畜用車両——当時は普通それが使われていた——に乗せられ、西へと向かった。夜遅くに大きな駅〔ヴォロネジ?〕に到着し、再び車両から降りて、待合室で席を探したが、ここでも赤軍兵士が占拠していた。駅の構内には避難民が群れていた。彼らの主要な流れは、モスクワを經由してミンスクへというルートにあった。

六時間後にハリコフへ向かう列車が用意された。長蛇の列のなかを三時間かかって、モスクワまでの切符を購入した。その際、ある婦人が立派なペルシア風マントの背を切り裂かれるという出来事に遭遇した。アンナは、「ミンスクに兵士として勤務している兄弟がいる」と嘘を言って、当時はコミッサールの車両の隣に付けられていた障害者用の車両に乗せてもらった。見張りとして付いた赤軍兵士が偶々ドイツ人であり、しかもアンナのよく知っている家族の婿であり、アマリーも同じ車両に乗り込むことができた。彼は弟フリードリッヒをも知っていた。やがて昼過ぎに列車は出発した。各駅停車の鈍行で、二日間かかってハリコフに到着した。そして、同じ日にその同じ列車でモスクワに向かうことを知った。しかし、いつ出発するか皆目わからなかった。駅には、モスクワへ、そしてさらにその先へと向かう人びとでごった返していた。列車に乗れないたくさんの人がおり、どれほどの失望と悲しみがみられたことか。ある女性は、両手に子どもを連れ、さらに腕に三人目の子どもを抱え、頬はくぼみ、悲嘆にくれていた。子どもたちは飢えと寒さに泣き叫んでいた。誰も助けることができない。そうした避難民は最後のものを現金に換えて旅費を工面し、やっとのことで駅にやってくるが、しばしば三週間は駅の空き地や仮テントで待たねばならない。列車に乗れるとしてもすぐに一杯になり、親と子どもが離れ離れになってしまうこともあった。こうした光景をアンナは何百回となく目にすることになる。アンナの目には、避難を止めさせ「新時代の恵み」に応じさせようとして故意にこうしたひどいやり方をしているのだ、とも映った。避難民の列車を途中の人里離れた駅に停車させ、冬の寒さで列車内で凍死した人たちの死体を外に放り投げる、ということもあったという。

列車は一〇時間ハリコフに停車した後によく走り始め、そして、四日後の一一月四日にモスクワに到着した。サラトフを発ってから九日目であった。

アンナは、独りだけならモスクワに住む父の友人の世話になってリガ経由でドイツに入ることができたが、二人の負担をかけるのは悪いと思い、ミンスク経由で国境を越えることにした。一九一七年にアンナの家に寄食していたユダヤ人女性がミンスク出身で、彼女の弟がモスクワで勉強しているというので、彼を訪ねた。はじめ彼は、当時だれでもがそうであったように見知らぬアンナを信用せず、素っ気なかったが、土産に一箱のバターを差し出すと親切になり、その日の夜にアレクサンドル駅からミンスク行きの急行列車があると教えてくれた。アレクサンドル駅は立派で、武装した警官や気の利く役人によって秩序が保たれていたが、乗り込んだ列車には暖房がなく、窓が壊れていて夜風が冷たく、居心地が非常に悪かった。やがて列車はスモレンスク駅に到着するが、そこには、避難民を乗せた列車が何台も停車していた。そして、それからさらに二〇時間後、ミンスクに到着した。

## (2) 不法国境越えを決意

ミンスクは、そこから国境を越えて行こうとする避難民の集結地で、モスクワでは何の検査もなかったが、ここでは厳しく検査された。アンナたちはここでまず、ホテルに行き、睡眠をとった。それまでの一〇日間の鉄道の旅ではほとんど寝ずの毎日であった。疲れが出て、アンナは何も食べることもできず、そのままベッドに入り、二四時間眠り続けて翌日の昼に目覚めたが、何事もないことを確認して、さらにしばらく眠った。サモワールの茶を飲み、持参の食物を口に入れ、さらに翌朝までベッドに入った。かのユダヤ人女性の母親を訪ね、彼女の好意で、三週間彼女の家に留まった。ドイツからの入国関係書類をもっていた人たちの輸送は合法的であり、彼らは特別の事務所で扱われたが、そうでない避難民には出国の公的な許可は与えられなかった。

アンナとアマリーの二人は、サラトフでロシアとポーランド（一九一八年一一月独立）国境から少し離れた町ジトミール（ヴォルィニ）に居住する市民としての偽造旅券をつくってもらっていた。偽造旅券を作成した人からジトミールは最近ポーランドになっていると言われており、アンナたちは容易にポーランドからドイツへ行けるものと考えていた。しかし、この偽造旅券の発行は詐欺であった。ジトミールはロシアの都市であることに変

わりはなかったのである。

アンナは、事務所で、ある男性から亡き妻の代わりに一緒に避難できると言われ、また、ある家族からは亡き娘の代わりにと言われたが、しかし、ロシア語を解せず現金をもたないアマリーを一人にすることはできず、いずれも無理な話だった。二人一緒に加わることができるような機会があればと待ったが、その機会は現れなかった。

二人にとっては、いよいよ合法的な国境越えの可能性はなくなり、不法にでも国境を越える道を探さなければならなかった。ミンスクには、おなじように国境越えの機会を窺っていた大量の避難民が、大変な寒さのなか、壊れかけた空き家やテントのなかで待機していた。すべての人が、ドイツへ、アメリカへと出国したがっていたが、公的な許可を得られないでいた。ほぼ毎日、何家族かが一緒になってポーランド国境に向かった。多くは国境を越えていったが、多くは殺されるか、追い返され拘禁されるか、餓死するかした。ミンスクに留まっているうちに持参の食料や現金が尽きて餓死する者も非常に多かった。(7)

アンナたちは、先のユダヤ人女性とその弟から、集団で国境越えするのは危険であり、個々に危険のない「不法国境越え」ができるはずだと言われており、その弟は関係者を知っているということであった。この間、アンナたちは、同じヴォルガ地方からの避難民で、アメリカの兄弟のところへ行くという若い姉妹（姉はエミリー・W、妹は一八歳のナタリー）と知り合う。アンナたちはいまや四人で、ユダヤ人を通じて御者と連絡をとり、国境越えを企てることになった。こうした仕事を専門にしている御者であった。

### (3) 森のなかを徒歩で国境越え

一月二三日の午後三時、アンナたちは馬車でミンスクを発つことになった。まず、両替してあったポーランド・マルクで御者へのかなりの報酬を支払った。馬車の上には藁が敷かれてあった。アンナたちはそのまま国境に到着するのかと思っていたが、その日の夜は森のなかの一軒のロシアの典型的な宿屋に宿泊することになった。宿の家族はユダヤ人であった。この宿泊も彼らの国境越えの仕事に、つまりその報酬に含まれていると思われた。アンナは、このような宿に武装の見張り番がないのに驚いている。馬車では何も食べられなかったので、この宿では持参の食料を出して、サモワールの茶で気持よく食事した。アンナは、長腰掛に寝ようとしたが、まだ御者を信用しきることはできず、なかなか寝入ることはできなかった。しかし、翌朝になってすべてが順調なのをみて、アンナは安

心するようになる。午後三時にそこを出発した。暗い霧が立ち込めてきた。これは逃避行にとっては幸いなことであった。森のなかを三時間走って、御者は突然車を止め、あたりを見回した。国境にはまだ早かった。すでに夜の六時になっていた。三〇分して、暗闇から二人の大男が現れた。アンナたちは不安でならなかったが、実はここで彼女たちは馬車を降り、その後はこの二人の案内で徒歩で国境まで向かうことになったのである。実はこれからが大変なことになった。

「お前たちは健康で丈夫だから危険はない」と二人の案内人が言うので、アンナが義足のことを話したところ、彼らは機嫌を悪くした。国境での銃と狼による危険はアンナも考えざるを得なかった。実際それからしてまもなく、銃声はあちこちで響いており、また狼の遠吠えも聞こえてきた。二人の案内人は、アンナたちの、とくに姉妹の多くの荷物を持ち、歩き始めた。四人のもつ荷物もかなりのものであった。一人の案内人が先頭で、つぎにアンナたち四人が、そして最後により身体の大い案内人が続いた。二時間ほど、休みを入れながら歩いた。姉妹はぐったりしてしまった。最後に歩いていた男が姉妹の荷物を持つことになり、姉妹はアマリーの荷物を、そしてアマリーはアンナの荷物を持つことになり、こうして、アンナは身軽になった。ミンスクで慌しいなかステッキを忘れてきていたので、アンナは非常に助かった。

アンナたちはさらに三時間歩いて立ち止まった。案内人は静かにするよう求めた。四メートルほどの幅の小川のところにいた。これが国境だという。氷結はしていたが、一面に厚く氷が張り詰められていたわけではなかった。そこには一本の幹が渡してあり、その上を四人は案内人の導きで、苦勞して歩いて渡った。こうして、アンナたちはロシアという国を脱出し、ポーランドに入ったのである。

しかし、それからもなお深い森のなかを歩かねばならず、とくにアンナにとっては難儀であった。一度はぬかるみにはまり、アンナの義足がはずれて、それを見失ってしまった。これは恐ろしい瞬間であった。国境にはポーランドの兵隊が見張っていたので、前に行く仲間にも大声を出して知らせることもできなかった。アンナの口笛に気づき、アマリーが助けにやってきた。彼女は地中から義足を探し出してくれ、再び歩くことが可能となった。

その後、最初のポーランドの村がみえてきたが軍事的見張りが厳しく、アンナたちはさらに三時間歩かねばならなかった。森のはずれに第二の村の光がみえたが、近づいてくるポーランドの国境警備兵に気づかれないように、さらに森を横切って反対側の端まで二時間歩き続けるしかなかった。そこに案内人の義兄弟が住んでいるという村があった。案内



人の一人とナタリーが宿泊の交渉に行っている二時間、狼襲来の死の恐怖に晒されたが、結局、その村にも留まることはできず、ここでアンナたちは、それまでの案内人を解雇し、その義兄弟の荷馬車で他の村に向かうことになった。再びアンナはかなりの金額を支払った。

#### (4) ポーランドの収容所を転々として

厳しい寒さのなかを四五分間走り続け、夜中の三時にある村に着き、そこでようやく宿泊することができた。一二時間かかったことになる。アマリーは歩くことができなかった。人びとは、ロシアからの避難民の病気、とくにチフスを恐れていたため、アンナたちにベッドを利用させず、藁敷きに寝かせた。一二時間何も食べていなかったが、そのまま寝入った。翌日の昼ごろ目覚めたが、寒いなかの長旅の緊張で身体が硬直し、起き上がることができなかった。家の主人は、衛兵に見つけられるのを恐れてすぐに出発するよう懇願した。アンナは、起きたばかりで身体が動かず、また何か飲食を摂りたいと言ったが、主人は、近くの町ヴィレイカに行けば何でも買えると答えた。アンナたちはその町の警察に行かねばならない、ということであった。窓から製粉所らしき建物が見えた。アンナは、主人の言うこともきかずにそこに出掛け、大きなパン、バター二ポンド、卵一〇個、生ハム、穀粉などを、その主婦の好意により無料で手に入れた。

アンナたちは、農民に金を支払って馬車を出してもらい、その息子のたずなでヴィレイカに到着、女主人がユダヤ人の旅館に案内されたが、ポーランド入国許可証を持っていないという理由で断られた。その他の宿を探したが、三〇回断られ、気の毒に思ってくれる婦人のところで宿泊させてもらった。彼女にはロシア人の血が流れていた。このときもベッドは提供されず、藁敷きで休んだ。翌朝婦人はピローシキを作ってくれた。出発の準備をしていた一〇時ころ、突然二人の警官がやってきて、アンナたちを検査した。朝早く仕事に出た夫が厄介なことにならないようにと、警察に通報していたのである。ドイツやアメリカの親類や友人から自宅にきていた手紙は不都合と思ひ荷物の検査の際に秘かに炉に入れ、偽造旅券はアンナの衣類のなかに隠したが、ナタリーが持っていた手紙の束のなかからサラトフ道路清掃についての地区ソヴェト指令書がでてきた。ソヴェト体制から身を守ろうとしているポーランドにおいてソヴェトの書類は特別の意味をもち、アンナたちにたいする不信感は高まった。

### 〈ヴィレイカの刑務所〉

四人は警察に連行され、すぐに尋問がはじまった。地区ソヴェトの書類のために四人は信用されず、警察署内の暖房もないひどい部屋に拘留された。そこでヴォルガ・ドイツ人女性に出会ったが、彼女も飢餓から逃れるために一族と不法に国境を越えてやってきていた。彼女によれば、当時ポーランドの東国境はロシアからの避難民であふれており、ヴィレイカにもドイツ行きの輸送を待つ人が五百人ほどいたという。また、アンナたちの後から若いロシア人夫婦が入れられてきたが、彼らは翌朝、ロシア送還のためにバラノヴィチの収容所に送られていった。女性は涙をためていた。ロシアへの送還が何を意味するのか、知っていたようである。アンナたちは、警察署長らしき男から、不法な国境越えという罪で九日間の拘留あるいは罰金という処罰を言い渡されたが、今後のことを考えればお金を使うわけにはいかなかった。

アンナたちは、三階建ての白壁の刑務所に連れて行かれた。案内人の警官の一人は、とくにナタリーに親切であった。事務所で身長や歯の数まで記録され、指紋もとられた。持参の現金も預けさせられた。一万ルーブリあったが、そのうち三千ルーブリは将来の義足のために隠しておいた。その後、一階の部屋に入れられた。そこにはすでに八人の女性が入れられていた。この刑務所の部屋には糞もなく、アンナの逃避行のなかでは最悪の宿泊所であったという。アンナは義足をつけたまま横にならざるを得なかった。食事は次の日からであった。朝は一片のパンと茶、昼はジャガイモスープ、それがすべてであった。スープは一つの鍋に入れられて地面におかれ、皆が群がって自分のスプーンでそれを食べるのだった。アンナは柄杓をもっていたのでそれにスープを入れ、自分たちの場所で食べた。アンナは九日間ほとんど眠れなかった。動物園の猿小屋のようであった。ヴォルガ・ドイツ人の家には害虫などいなかったのに、シラミにはびっくりした。最後の日の午前中に新しい拘留者がやってきた。戦時中に兄弟が将校として従軍していた育ちのよいそのロシア人女性は、当時の知識人の多くがそうであったように共産主義思想に心動かされたようであるが、国境越えの際に帽子のリボンの内に潜ませていた秘密報告を発見され、スパイとして捕えられていた。少なくとも一〇年―一五年の拘留を恐れていた。

アンナは、刑務所の生活に徐々に慣れていき、害虫にも驚かなくなった。二日目には再び罰金支払を勧められたが、アンナは拒否した。ある日の昼に、看守に頼んで外の竈で暖をとることを許されたときに、アンナは製粉所の主婦からもらっていた穀粉をすばやく練り粉にして小さな菓子八個を焼いて食べた。それから毎日、看守から塩をもせしめて、菓

子を焼くことができた。

アンナたちは、九日目の昼に刑務所を出て、警察署に櫓で送られ、再びその拘置室に入れられた。そこへ以前とくにナタリーに親切にしていた警官Sが入ってきて、夕食を用意してくれ、チョコレートなども付けてくれた。とくにナタリーのためである。エミリーは非難した。

翌日、アンナたちにはバラノヴィチ収容所への即日送還という命令が伝えられた。バラノヴィチ行きはロシアへの帰還を意味した。警官のSは慰めにやってきて、バラノヴィチで何かあったらと住所をナタリーに渡し、食料を用意してくれた。バラノヴィチに向かう列車にはSも他箇所を送る囚人の監視人として途中まで一緒であった。Sは、一時間三分後、アンナたちの解放のために尽力すると言って下車した。アンナたちは夜の一時にバラノヴィチに着いた。一九二一年一月二日のことである。

#### 〈バラノヴィチの収容所〉

バラノヴィチの収容所では、同じ抑留者と思われる親切なロシア人が働いており、アメリカ赤十字社の食料も彼の管理下にあった。有刺鉄条網のなかの女性用の仮小屋に收容された。アンナたちは身の回りを整理し、ヴィレイカから持ち込んだシラミの駆除に二週間かかったが、この収容所にもシラミはいた。アメリカの支援委員会が援助していた食事は、昼は缶詰の肉を入れたスープで、パンもたくさん出され、とても良かったが、夜は貧しく、粗引き穀物の粥であった。アンナは、アメリカの兄ハインリッヒに手紙を書き、またドイツの知人には入国書類をお願いする手紙を送った。クリスマスの夜はただぼんやり時を過ごすだけであった。

一月二〇日、収容所の囚人すべての男女がロシアへ送り返されるという知らせが伝えられ、悲嘆の哀泣が広がった。自発的に署名してロシアへの帰還を申し出る人は優先的に封印列車でモスクワまでは向かうことができるが、署名しなかった人は国境近くの駅まで鉄道で運ばれ、不法に国境を徒歩で越えるよう、羊の群れのように追い払われる。こうした人びとはロシアの国境警備隊が捕え、収容所に入れる。逃げて再度国境を越えてポーランド側に戻れる人はともかく、そうでない人は射殺される。運よく寛大な処置を受けても途中で餓死してしまう。署名するかどうかの選択は難しかったが、寒さと雪のつらさもあって、すべての人がロシアへの帰還に署名した。アンナも、義足の身では署名するよりほかなかった。これまでなにゆえに危険をおかしてまでここまでできたのか、まったく無駄であったとアンナは思わざるを得なかった。

絶望的になっていたとき、アンナたちには幸運にも、ワルシャワからやってきていたドイツ大使代理の人から救いの手が差し延べられた。戦時中にドイツの捕虜であった兄を通じて知り合いになったドイツ人家族からの入国関係書類が行方不明になっていたことから、アンナはもう一度その家族に手紙を書き、またアメリカの兄ハインリッヒにも電報を打った。八日後にアンナたち四人のためのドイツ入国に必要な書類が新たに到着した。

しかしながら、数日後、また驚いたことに、アンナたち四人はヴィリノに送還されることになり、再び不安が襲った。夜の一時にひどい吹雪のヴィリノに到着し、約一時間歩いて警察署の部屋で宿泊したが、なんとということか、アンナたちは再びヴィレイカに運ばれることになった。ヴィレイカーバラノヴィチーヴィリノーヴィレイカと、一周することになったのである。

#### 〈再びヴィレイカの刑務所〉

ヴィレイカの刑務所では、朝早くに警官S本人が、とりわけナタリーに会いたくて姿をみせた。Sはナタリーに夢中で、もしもアンナたちを自由にすることができればナタリーと結婚できるのではと考えていた。エミリーにとっては、妹と二人でアメリカの兄弟のところへ行くという両親との約束もあり、この展開は不快であった。しかし、ナタリーはポーランドに残ってSと結婚するという意志を固めることになる。ナタリーは彼と一緒にの食事に招かれ、アンナたちにSは朝食も昼食も三人分しか用意してこなかった。エミリーはナタリーを絶えず叱った。

三日目にアマリーが頭痛、高熱で病気になった。アンナはアマリーを紹介された病院に連れて行った。チフスであった。その病院にはヴォルガ・ドイツ人もいるようであった。

四日目の二月一八日、アンナたちに解放の嬉しい知らせが警察署長より伝えられた。Sのおかげで、他の警官も親切に対応するようになっていた。昼に荷物をまとめ、警察署からアパートの部屋に移った。ナタリーはSの世話で特別の部屋を割り当てられていた。アンナたちの部屋の家主はロシア人女性であった。アンナたちにとってベッドに寝ることは、前年の一〇月二五日以来、ミンスクの何日間かを除いて実に久しぶりのことであった。四週間ほどアンナとエミリーはここに留まった。家主は、はじめは避難民とかかわりたくないといっていたが、アンナたちの事情を聞いて、親切に世話をしてくれた。彼女は戦争中に兵士であった夫を病気で亡くし、また一〇歳の娘をも戦争で亡くしていた。

輸送の列車を待ったが、なかなか知らせはこなかった。持参の現金はどんどんなくなっていき、衣類を売ったり、食事を簡素にしたりした。朝はコーヒーとパン、昼はジャガイ

モ、夜は再びコーヒーとパン。五日もたたないうちに、アメリカの兄ハインリッヒからの数百ポランド・マルクがワルシャワのドイツ大使館にきているという知らせがあり、現金も送られてきた。アンナは、いつもしているように、それを同行者に等分に分けてやった。

アマリーが退院してきた。血色が悪く痩せていたが、アマリーをパン屋で働かせた。アンナはロシア人の家主と親しくなるにつれ、彼女の衣類の裁縫をしたりした。彼女からは、ポランドに残って仕立て屋として一緒に生きていくよう勧められ、自分の死後は土地財産をすべて譲るとも言われた。ポランドの役所で建築士として働く向かいのロシア人避難民男性からの結婚申込みの話をももってきた。アンナにとっては、結婚相手はドイツ人という教育を受けていたので、この申込みを受けるわけにはいかなかった。ヴォルガ・ドイツ人のあいだではロシア人との結婚はみたことがなかったという。

ようやく出発の日がきた。女主人は泣いて別れを惜しんだ。アンナとアマリーとエミリーは、家畜用の車両に乗り込んだ。他に、黒海沿岸からの家族、ヴォルガ河左岸からの家族が乗っており、全部で一〇人であった。一〇日前にSと一緒にやってきて自分たちの結婚を報告したナタリーも見送りにきていた。皆、泣きながら別れを告げた。

ナタリーは一八歳の若さであった。Sは人目を引く男でもあり、彼の真面目な求愛をナタリーは拒否できなかったのである。ナタリーはまた、Sの尽力がたとえ自分を得るためだとしても、その尽力によってアンナたちが自由になればと彼の求愛を受け入れた、とも思われた。彼女が姉とアメリカの兄弟のところに行けなくなったことは悲しかったが、それも彼女の選択であった。彼女があとでアンナに送った手紙のなかでは、彼女は両親や姉や兄弟と疎遠になったことを悔やんだが、もはや元通りにはならなかった。

列車は四日目にワルシャワに着いたが、そのまま構内に戦時中からある大きな仮建物のなかに入った。前日に子どもが死亡し、遺体はすぐ次の駅で降ろされて埋葬されたが、ここで車両すべてを一日かけて消毒したのである。それから列車は再び走り始めたが、そのままドイツに向かったわけではなかった。

#### 〈ストラルコヴォの収容所〉

列車は、二日間走ってストラルコヴォに着いた。ヴィレイカから数えて七日間を要していた。駅に用意されていた車で収容所に向かったが、そこでは、一人のドイツ人牧師と二人の赤十字社の看護婦が迎えてくれ、驚きであった。まず検疫を受けた。看護婦に頼まれて、アンナたちは子ども部屋で手伝いをした。大きな木造の建物のなかには五十人の子

どもたちがおり、アメリカの赤十字社からの食料支援を受けていた。

収容所は非常に大規模で、八棟から一〇棟の木造の仮小屋があった。ロシアからの飢えた避難民が四つの仮小屋に入れられていた。その他に、国境を越えてきたロシア人の赤軍兵士、ハンガリー人、オーストリア人などの兵士が収容されていた。アンナたちと同様に避難民として扱われる赤軍兵士以外は、病人であったためにここに留まっていたと思われた。ソ連は赤軍兵士を連れもどすことを要求したが、彼らはそれを拒否していた。逮捕されて拘留されるよりここに留まったほうが彼らにとっては良かったのである。彼らの着るものはボロボロで、木靴を履き、食事も貧しく、栄養不良にみえた。収容所の近くの大きな墓地には、戦時中は収容所で死んだ何千人ものロシア人捕虜が葬られたが、いまでは、死んだ拘留兵士やヴォルガ・ドイツ人難民が、とくに収容所到着直後に病死した多くの子どもが、眠っていた。

四月初めの復活祭の二日目にはポーゼン出身の牧師が説教をした。ヴォルガ・ドイツ人の男性たちが仮小屋に復活祭の祭壇を用意し、飾りつけをした。彼ら避難民は信心深く、ミサでは多くの人々が持参してきた賛美歌集を出して歌った。福音派の同じ賛美歌であり、牧師は非常に驚いた。

五週間のストラルコヴォ収容所での生活にアンナは耐えながらも、満足していた。アマリーはチフスの病いから回復していた。エミリーは、ナタリーのことを想って、不機嫌であった。ちなみに、ナタリー自身はこの収容所に書いて寄こした手紙のなかですでに精神的苦痛を、そして金不足を訴えてきていたが、その後、夫のSはよりよい稼ぎを求めてフランスへと出掛けた。フランスでドイツ嫌いの思想に染められて帰ってきた夫と彼女はお互いもはや理解し得なくなってしまう。ドイツに来たらというアンナの提案に彼女は喜んで同意し、最後の手紙では二週間のうちには出国のための旅券とヴィザを取得できると伝えてきたが、その後の消息は不明となった。

病人の仮小屋に収容されていたあるハンガリー人男性がアンナに好意をもち、何度も手紙を寄こしてきた。ロシア語で書かれた手紙には、近づきになりたい、近々故郷に帰るので一緒に、そして自分と結婚してほしい、と記されてあった。アンナは無視したが埒が明かず、彼と会った。真面目な、黒い口ひげのあるすらりとした、人目を引く良い男であったが、アンナにとっては外国人であり、彼女の教育からして受け入れることはできなかった。彼は悲しんだが、どうすることもできなかった。

## (5) いよいよドイツ入国

いよいよドイツ行きの列車が出発することになった。ドイツのロシア人避難民受入収容所があるフランクフルト・アム・オーデルまで行くことになっていた。あこがれのドイツに行けるといことでアンナの気持は昂ぶった。夕方、ポーゼンに着いた。アンナはすべてにドイツを感じとった。籠一杯の食べ物の贈り物があった。翌日の午前中に列車は再び走り出した。出発直前にヴォルガ・ドイツ人の娘が担架で運ばれてきたが、彼女はそれまでの避難の途中で両足が凍傷にあい、病院で切断していた。牧師が見送りにきていた。

アンナは、ドイツのものはなんでも見逃すまいと、窓からの景色を食い入るように眺めた。畑は豊かで、よく耕されており、なんとすばらしいことかと思った。ロシアでは一九一八年以来土地はほとんど耕されていないままであり、ヴォルガ地方からミンスクまではそのような寂しい風景が続いていた。同行してきていた看護婦が叫んだ。「いまドイツの国境を越えています」。車内には喜びの歌声がわきおこった。

二時間半後にフランクフルトに到着した。一九二二年四月二八日午後二時であった。ロシアからの避難の旅は終わった。ドイツに辿り着くまでに約六ヶ月を要したことになる。

駅には車が用意され、アンナの義足をみて何人もが助けに来た。アンナは母親の懐に感じるように感じた。しかし、このすばらしい第一印象も、しばらくして失望に変わってしまう。アンナたちは収容所に送られ、そこでまず何故だか分からないが柵に囲まれた空き地に二時間立たされ、その後の食事の際には、皿を配る人が皿が汚されることのないようにという態度を露わにした。アンナは、ストラルコヴォ収容所で五日間も検疫を受けており、同行の看護婦によってもその情報はあはずだと、不快感をもち、食事を拒否した。アンナたちより前の一月、二月に到着していた避難民から聞いたところでは、彼らは豚のように扱われ、何時間も厳しい寒さのなかを戸外に立たされ、仮小屋に入れられたという。誰もが消毒を受け、髪を短く切られ、抵抗すればロシア送還の脅しを受けた。アンナは、ドイツではまれにしか入浴しないという人びとに出会ったが、ロシアでは土曜日毎に必ず入浴するのであり、ロシアの人を汚いとみなすのはまったくの誤解である、と不満を述べている。

再び金網のなかでの厳しい隔離の生活が八日間続き、その後、避難民収容所に移った。

(8)そこで、アンナは、東プロイセンから、ベルリンから、ザクセンから、そして、入国関係書類をアンナに送ってくれていたHから、自分の消息についての問い合わせが事務所に

きているのに驚いた。かつて両親の家で知り合ったドイツ人捕虜の父の友人という人がフランクフルトに住んでおり、兄のハインリッヒを通じてアンナが来ているということを知り、アンナに会いにやってきた。彼は、自分が仕事を経営しているザクセンに来るようと招いた。アンナはまず、両親の家で知り合ったドイツ人捕虜（ベルリン在住）に、親しくなった東プロイセンの抑留者家族に、そしてHに手紙を書いた。折り返し返事がきた。ベルリンからは、ロシア・ドイツ人委員会よりアメリカからの現金と手紙がアンナ宛に届いているという知らせがきた。ヴォルガ・ドイツ人のH・Mからの手紙では、彼がアメリカの二人の兄の情報を得ているという知らせも届いた。

アンナは、最後に残った一〇〇ポランド・マルクを両替し、ベルリンにアメリカからの現金と手紙を受け取りに行ったが、そこで見つけることができず、大きな失望を味わった。この現金は半年後に受け取ることになる。

一九二二年五月二三日、アンナは、アメリカ行きの書類のためにいましばらく留まるエミリーとアマリーに別れを告げ、フランクフルトの収容所を出た。アンナはHのところで暖かく迎えられ、こうして、彼女は、「実際の自由を享受し、理解と愛に包まれて、旅の緊張から解放された」のである。

#### 四 ロシアに再び大飢饉、両親の死、飢餓からの訴え——一九三〇年代初頭

こうして、アンナはドイツに脱出して困窮から救われたが、ロシアに残った彼女の親族については、ロシアから届く手紙によってその悲劇的状況を知ることになる。

すでに一九二〇年にはじまった飢饉は一九二二年に最悪になり、一九二四年にもヴォルガ地方を襲っていた。アンナの両親や兄弟姉妹の家族は、「クラーク」の身で生活の糧を探しつつ、苦しみながらもなんとか生き延びることができた。アンナのところにも平穏を知らせる報告が届けられていた。しかしながら、それは一九二九年までであった。

スターリンによる農業集団化と工業化が開始された一九三〇年代初頭、再び大飢饉がソ連を襲った。アンナは、ロシアで飢えに苦しむ兄弟姉妹それぞれの家族のために、ドイツから一回に一〇マルク、二〇マルクと現金を送り、援助を惜しまなかった。送金は、六日もあれば届くこともあったが、何日もかかったり、行方不明になることもあった。兄弟姉妹からは、送金に感謝するとともに、さらに飢えの窮状と援助を訴える手紙が何通もアンナのところに届けられた。その手紙の書き出しにはしばしば「私（たち）はまだ生きてい



る」という言葉があり、状況の悲惨さを物語っている。

### (1) 両親の死

一九三一年末から一九三二年春にかけて、アンナの両親が、母は身を寄せていたドネツ地方の兄弟の家で、父はその後もどった故郷の村で、相次いでこの世を去った。二人とも七〇歳を越えてはいたが、財産を没収され、生活の権利を奪われ、そして、飢えが彼らを死に追いやった。

両親の死について知らせる、妹アマリーからアンナに届いた手紙（一九三二年五月七日付）をここに紹介しておこう。

愛する姉さん！

四月二七日付のあなたの手紙を、私たち、カトヒェンと私は、大きな喜びをもって受け取りました。

しかし、読んでいて涙があふれました。愛する両親のことが改めて思い出されました。

.....

私と妹のカトヒェンは、この冬を切り抜けるのに大変な思いをしました。一九三〇年秋に弟のアレキサンダーが私をSから故郷の両親のところへ連れて来ました。両親のところでは一月〔一九三一年〕まで、弟のサーチカ〔アレキサンダー〕と私の娘ゲトルンドと一緒に暮らしました。一月に両親とサーチカは最後に残っていた財産を没収され、彼らは夜の一時に車に乗せられ、農場のスピッツ（車で一時間ほどの距離）に運ばれ、追放者のために用意された洞穴に宿泊することになりました。弟のアレキサンダーはそこから逃げ出しましたが、彼の妻と三人の子ども、そして愛する両親だけがそこに取り残されました。私たちのかつての富裕者の多くがそこにいました。しばらくしてサーチカは再び戻って来て、妻と二人の子どもを秘かに連れ出しました。一番小さい子は私が引き取りました。愛する両親だけが見知らぬ人びとのもとの洞穴に留まったのです。私たちは連れ出すことができませんでした。それは許されないことでした。

こうした状態なので、私たちは両親のところへしばしば食べ物を持って行きましたが、これはすべて秘密裏に行わなければなりませんでした。その後で、私たちは荷車で両親を兄のフリードリッヒのいるBに連れて行きました。そこで彼らは二月から五月まで暮

らしましたが、私たちのところよりさらにひどい困窮状態で、両親のための食料を手に入れることができず、フリードリッヒはそこからまた両親を連れ出しました。こうして、両親は再び故郷で暮らすことになったのですが、このことは彼らにとって喜ばしいことでした。母さんはひどい病気になっていました。私たちにはまだパンがあり、カトヒエンも一緒にみんなで屋敷に住んでいました。私たちは両親の世話をよくやり、彼らのためにできるだけことはしました。母さんは快復し、庭の果樹に実がなったときには手伝おうとさえするほどでした。このように彼女の気分はよくなりました。秋までは私たちは一緒にいる喜びを味わいました。しかし、その後に、喜びはすべて飛んでいってしまいました。カトヒエンの夫のカールも財産を没収され、衣類も食べ物も飲み物もなく、拘留所に送られました。カトヒエンと三人の子どもたち、そして私たちはすべて、家から出て行かなければなりませんでした。すべてが没収されてしまったのです。私たちは両親と子どもたちと一緒に、何も食べる物なしにおかれたのです。

私たちは、南の炭坑〔ドネツ〕で働いている兄弟のところへ両親を連れて行く決心をしました。私が連れて行き、カトヒエンが子どもたちと残りました。道中は五日間を要し、すでに十一月で非常に寒かったです。母さんはひどい風邪を引いていて、最後の宿泊所ですでに病気は進行していました。当然私はそこに〔兄弟のところ〕留まって、一四日間、母さんの看病をしました。母さんは良くなったようにみえました。そこで母さんに、自分は家に帰らなければならないと言いましたところ、彼女は了解してくれました。なにしろ家にはカトヒエンと子どもたちだけがおり、食べる物がなかったのです。私の気持は落ち着かず、家へと向かいました。母さんは弟のアレキサンダーのところに、父はゲオルグのところに身を寄せました。一緒にいることができないほど小さい住まいでした、ゴットフリートもそこにおり、ゲオルグと一緒に指物業で働いています。アレキサンダーは事務所で働いています。

こうして、カトヒエンと私は二月まで苦勞し、どうしたら救われるのか分かりませんでした。その間に、母さんは、クリスマス最初の祭日の一二月二四日に死去しました。私はカトヒエンと子どもたちを兄弟のところへ送って行きました。子どもたちの命を救うため、そこにはまだパンがあると思ってです。しかし、到着してみると、そこも非常に悪い状態でした。兄弟たちからは配給券が取り上げられており、カトヒエンにとっては何の慰みもありませんでした。三日間そこにおり、再び年老いた父を連れて帰ってきました。兄弟の嫁たちは父の世話をしようと思わず、病気の看護もしませんでした。カト

ヒェンは、心が痛く、泣いていました。愛する父が絶望的な状態におかれているのを見て、父をそこにおいておくことはできませんでした。私たちは飢えていきました。私が少しばかり裁縫ができたのは有り難いことでした。というのも、ここにはまだ駅に、食べる物を持っている役人が何人か留まっており、私が裁縫をして少しばかりのパンを得て、それを年老いた父にあげることができたのです。

・・・・・・・・

私たちは、二週間ほど前に愛する父の葬式に参列したのです。四月二〇日に私たちは父の棺のまえに立ちました。カトヒェンと私そして一二歳の子どもは、心は深く傷つき、涙があふれました。父は月曜日の四月一八日、朝八時に死にました。起きたあと顔を洗い、お祈りをしました。そしてその後倒れ、死んだのです。七四歳一〇ヶ月と二二日でした。五三年間、両親は共に暮らしましたが、二人は三ヶ月をおいて相次いで亡くなりました。

いつもいつも父は子供たちのことを、とくにあなたのことを思っていました。アンヒェン、アンヒェン、彼女は帰ってくると約束したのに、自分たちを見捨ててしまった、と父は言っていました。愛する母さんもおらず、父は、最近では自分が取り残されたという思いがしていました。大変な困窮をあらためて経験しなければならなかったということも、ひどい影響を父に与えました。父の最後の夜のスープは、挽き割り麦とタマネギの、溶けないままのスープでした。一二人の子どもらすべてはまだ生きているので、夜にはパンを一片でも食べて生きようとしていたのです。私は、愛する父を助けようと、いたるところに手紙を書きました。父は何度も、アンヒェンのところへ、そしてアメリカに「飢えて大変苦しい」と書くようにと言いました。もう一度良い食料を手に入れるために、あなたのところへ、そしてアメリカの兄のところへ飛んでいく翼があればよいと、何度も言っていました。しかし、あらゆる助けは遅すぎました。愛する父はいまはおりません。

埋葬直後に兄のハインツの手紙が届きました。そこには、食料の小包を送ったと書いてありました。もっと早くに到着すれば父がみることもできたのに、どうしてそれができなかったのでしょうか。それを思うと、二重に心が痛みます。いまでもその小包は来ておらず、四六時中それを待っています。今日も多くの人や来て来ました。日曜日まで聖霊降臨祭をお祝いしますが、わずかなトウモロコシがあるだけで、パンはなく、他に食べる物がなく、ほんとうに悲しいです。私は子どもたちと一緒にスープを、溶けない

ままにつくります。愛する姉さん、私たちがどういう生活をしているか、想像できますか。一滴のミルクもなく、いくらかの脂もなく、肉もなく、もはや人間のようにはまったくみえません。私たちはトウモロコシを水で粥にして、あるいはそのパン一切れを、食べています。これが私たちの養分であり、これでは十分ではありません。

.....

すでにまる一ヶ月、兄のハインリッヒがアメリカから送った小包を待っていますが、まだ届いていません。私たちには、新しいパンが来るまで、大変な困窮が差し迫っています。それまでに何人も人が死ななければならぬでしょう。カトヒエンと私は、それを思うと暗鬱です。私たちの世話をしてくれるのは誰もおりません。

カトヒエンはいまは家におりません。拘留所にまだいる夫のところへ行ったのです。私たちは彼から手紙を受け取りましたが、そこには、もしも助けがなければ飢え死にする、と書いてありました。そこで私たちは苦労して食べ物を集め、カトヒエンが二人の子どもを連れてそれを彼の許へ持っていったのです。一番下の子どもは私のところにいます。両親の家にはもはや誰も住んでおらず、すべてが崩壊してしまいました。出口がなく、すべてが引き裂かれてしまいました。屋敷裏の庭だけに美しい花が咲いています。そこを通るときは、愛する母さんのことを思います。(9)

## (2) 兄弟姉妹家族の消息

アンナは、兄弟姉妹の家族について次のような消息を得ていた。

一七歳で故郷の大規模な農業経営の家に嫁ぎ幸福な生活を送っていた長姉カタリーナは、その生活がロシア革命で終わってしまった後、何年かしてモスクワ近郊からアンナに手紙を書いてきたが、それはちょうど、何千人ものヴォルガ・ドイツ人が国外へ脱出する許可を得ようとしていた時期であった。その後に短い便りがあったものの、彼女がどうしているかアンナには分かっていない。

長兄のゴットフリートは、ドイツでの捕虜時代に農場で学んだ経験を故郷の土地で生かそうとしたが、家畜を没収され、駅近くの屋敷は取り壊された。村の近くに新しい穀物小屋と住居を建てたが、革命後に彼は、非共産主義者として逮捕された。彼の妻と二人の子どもは路上に放り出された。ゴットフリートは、二年間の拘留後、採石場での強制労働を五、六年強いられ、その後、家族と一緒に南のドネツ地方に赴き、偽名を使って炭田で働

いた。このドネツ炭田には、弟のアレキサンダーの家族も偽名で働いていたが、夫が拘留されていた末の妹カトヒェンも一緒だった。弟のゲオルグも、三年間の赤軍勤務の後に故郷にもどったが生活していくことができず、ここに来ていた。何年間かは彼らは苦しくもここで生活していた。ちなみに、アレキサンダーは、ドネツ炭田での仕事の苦しさから義父が追放されていた西シベリアへと移ったが、その現実をみて再びドネツに戻っている。ゴットフリートは、アレキサンダーの手紙によると、山羊のように痩せ、髪は雪のように白くなってしまったが、生活の意欲は失わず、木材を拾い集めて丸太小屋を作ったりした。しかし、偽名を使っていたのが発覚したからかどうかは分からないが、ゴットフリートとアレキサンダー、そしてカトヒェンの病身の夫Lは自分たちの家から追放され、先の二人は七年の、Lは五年の拘留の刑を受けることになった。その後家族がどのように生活しているかアンナには詳しく分かっていないが、カトヒェンは子どもの生命を守るために石炭車を押している、ということであった。

次姉のエヴァの一家では、夫ヤシャが一九一八年に自分の事業を取り上げられ、刑務所に送られ、全財産が没収されていたが、数ヶ月後に釈放され、ロシア人の村に身を隠しながら、困窮の生活を強いられた。彼は家族を引き寄せ、農業に従事した。一頭の山羊と二、三羽のニワトリだけを飼育し、それが生活の糧になった。借りた金で商売を始め、ヴォルガ河を下りアストラハンにまで取引に出掛けた。こうして何年も経って彼は再び立ち直ることができたが、当局に発見されて再び刑務所に入れられた。その刑務所生活は「鉄のくびきの下に」あり、彼はそれが原因でひどいリウマチに罹った。自分の小さな農業経営は閉鎖し、それは集団農場に引き渡された。その後の消息は不明のままである。

妹ナタリーの家では、革命後に夫シュルトハイスが「クラーク」として五〇〇モルゲン土地と家を没収され、家族とともにクリミア地方に逃れ、しばらくは偽名を使って暮らした。ナタリーからはアンナのところへ何度も手紙が届いていたが、一九三四年末にカフカースへ移住したという連絡の後は、音信不通となっている。

妹アマリーの家では、夫コンラッドは財産をすべて没収された後、農業技師の試験を受けるべく学校に四年間通った。欠乏の四年間で、家計のすべてがアマリーの肩に重くのしかかった。コンラッドは卒業して仕事を得的ものの、それは家から一千キロも離れたウクライナであった。半年後のクリスマスに帰郷し、ウクライナで家族一緒に生活するか故郷で仕事を探るか相談しているうちに、コンラッドは流行性感冒に罹ってしまい、サラトフの船着場のベンチで息を引き取った。三三歳であった。法律によれば死者は死んだところ

で葬らなければならない。アマリーは義母のエルナとともに、夜中に秘かに遺体をボートに乗せてヴォルガ河を下り、故郷近くに用意した場所に埋葬した。ちなみに、コンラッドの弟イヴァンは、家族とともにシベリアの森林に追放され、家族ともどもそこで死亡した。アマリー自身は、両親のところへもどった後、あるコミッサールと再婚したが夫の虐待で別れたといい、その後の消息はない。

### (3) 飢餓からの訴え

アンナの親類は飢餓の苦しみを訴える手紙を何通もアンナに書いているが、その内容のほんの一部を紹介しておこう。

一九三二年七月一五日付の妹ナタリーの手紙——

父さんは餓死したのだと言わなければなりません。一片のパンを渴望したのですが、もはや手にすることはできませんでした。

一九三二年一二月一三日付の弟アレキサンダーからの手紙——

十分に働いているのですが、食べる物がありません。豚に食わせるようなカボチャやジャガイモがありますが、それも十分ではありません。月に一六〇ルーブリをもらっていますが、手桶一杯のジャガイモは一五ルーブリ、一塊のパンが一五ルーブリします。三人の子どものうち一番下の子が夏に死にました。もはや何もないのです。毎日、家族のためのパン配給券が奪い取られることを恐れなければなりません。最近二年間に〇〔オーバードルフ村？〕では大人が九〇人餓死しています。子どもの死者はその二倍くらいです。すべてが消え失せ、砂漠のようです。私の家はまだ残っていますが、多くの家は取り壊されました。

一九三三年一月三〇日付の妹カトヒェンからの手紙——

満身に食べることができません。一日に三回、茶とパンがあり、愛する子どもたちにはパンを計ってあげなければなりません。決して十分ではないのです。一回の食事に一〇〇グラムくらいです。娘のオルガはすでに一歳七ヶ月になるのに、お湯を沸かす燃料がないので、まだ私は乳を含ませています。

一九三三年七月一六日付の妹アマリーの手紙——

六月にここ〇〔オーバードルフ村?〕では九九人が餓死し、七月一日から一五日までに五〇人が死にました。一月一日から七月中旬まで概算で三五〇人が死んでいます。

一九三三年八月二二日付の叔母カトヒェン・ヤウクからの手紙——

ヤウク家の年寄りでまだ生きているのは私だけです。私たち残ったものはみんな坑道にいます。私にはまったく何もなく、ひどく貧しく、二人の息子も坑道で働いています。もはや着る物はなく、一台のベッドもなく、食べる物がありません。私はもう齢をとりました。

一九三四年一二月三〇日付の妹カトヒェンからの手紙——

秋にオルガが死にました。三歳二ヶ月と一七日でした。私たちにはいま再び、父と同じような黒髪の、可愛い子どもが生まれています。この子はとても可愛いのですが、神様がこの子を私から奪うようなことがなければ、どんなに喜ばしいことでしょう。私はまったく一人でやっていかなければなりません。夫も父もおらず、三人の子どもとともに残され、困窮からは抜け出せないでいるのです。一カペイカの金もありませんし、パンもありません。子どもが非常に小さいので働きに行くこともできず、何の稼ぎもないのです。

おわりに——アンナのソヴェト批判

アンナがドイツでどのような生活を送っていたか、手記からは明らかでない。(10)

しかし、ともあれ、アンナの、そして彼女の家族の悲劇は、ロシアの富裕者「クラーク」すべての悲劇であったとも言えよう。このことを自覚するアンナのボリシェヴィキ批判は厳しい。アンナは、彼女の故郷に実際に共産主義者がどのように入り込んできたかを見て、「共産主義者とはただ、まちがった、あるいは愚かなことをする知識人、言葉巧みな人、あるいは何も知らない怠け者、盗人、犯罪者である」と認識するが、本稿の最後に、手記に記された彼女のソヴェト批判の言葉を紹介しておこう。

ボリシェヴィキの体制はその内的な卑劣さと自然法則に反するという犯罪によって滅びていく。ロシアにおけるドイツ人農民は、その勤勉と豊かな能力によって、全ロシアがよく生きていけるだけの穀物を生産することができよう。しかし、そうしたドイツ人農民は、絶滅しなければならない「クラーク」であった。以前は——たとえ潜在的条件があったとしても——何かを成し遂げたり裕福になったりする能力がなく、また怠け者であった人びとがいまや集団農場の指導者となっている。官僚とその委託された監督者が集団農場の労働者に革鞭を使い、計画は暴力で遂行されねばならない。主婦が愛情をもって花の世話をしなければ花は育たないし、彼女はさらに人為的に知恵を働かすかもしれない。しかし、生産すべき人が一度も満足に食べることもできない、あるいは食べることが許されないならば、彼は自分の仕事に愛情を注ぐことはないであろう。個々人の思いはやがて悪い現実の結果のなかに消滅してしまう。集団主義的経済に決して成功はあり得ないだろう。成功、この言葉は今日のロシアにはなく、笑止千万なことであろう。個人の遂行能力は計画経済によっておきかえることは決してできない。新しいロシアの国家は、国民から自立の可能性を根底から奪い、各人は、実生活に必要なものを国家から得なければならないが、今日ではどこでもそれが十分にできていない。分配がうまくいっておらず、これからも、たとえ交通網が整備されたとしても、決してうまくいくことはないであろう。個々人に再び自分の意志で自由に働かせ、弱い者を助けるなら、各人は幸福になることができよう。ボリシェヴィキの理論と手段では社会問題の解決は達せられない。

当時、ロシア人の農民大衆もまた悲惨な運命を強いられたが、以上に紹介したアンナの手記は、「追放せよ」として弾圧されたクラークの、それもヴォルガ・ドイツ人のクラークの、貴重な証言の一つと言えよう。

注

(1) Anna Janecke, *Wolgadeutsches Schicksal : Erlebnisse einer Auslandsdeutschen, die sich aus dem Untergang ihrer vom Bolschewismus vernichteten Heimat retten konnte*, hrsg. von Fritz Langen, Kohler & Amelang, Leipzig, 1937.

(2) *Wolgadeutsches Schicksal : Tatsachenschilderungen und Erlebnisse von Anna Janecke durch Fritz Langen.*



(3) Anna Janecke, *Volga-German Destiny*, transl. by Walter H. Yauk and ed. by Fred H. Werner, with the cover depicted by Maryanna Yauk, Walter H. Yauk's wife, WAL deMAR Publishing, Windsor, 1989.

(4) 一八世紀末のドイツからヴォルガ地方への入植については拙稿「近代ロシアへのドイツ人入植の開始——ドイツ諸地域からヴォルガ流域へ」(拙編『「ヨーロッパ」の歴史的再検討』早稲田大学出版部、二〇〇〇年)が、その後の入植地の歴史に関連しては拙稿「ヴォルガ河中流域のドイツ人入植地ガルカ村——帝政期の社会経済史的様相」(拙編『ロシアとヨーロッパ——交差する歴史世界』早稲田大学出版部、二〇〇四年)がある。また、ヴォルガ・ドイツ人の通史としてアルカーギー・A・ゲルマン、イーゴリ・R・プレーヴェ著『ヴォルガ・ドイツ人——知られざるロシアの歴史』(鈴木健夫、半谷史郎訳、彩流社、二〇〇八年)がある。

(5) *Сборник статистических сведений по Саратовской губернии*, т. 11, Камышинский уезд, Саратов, 1891, отдел II, стр. 150-151, отдел III, стр. 417-418(Иловлинская волость).

(6) 一九二〇年代初頭の飢饉・飢餓については拙稿「ヴォルガ河に鳴り響く弔鐘——一九二〇——一九二二年飢饉とヴォルガ・ドイツ人」(奥田央編『二〇世紀ロシア農民史』社会評論社、二〇〇六年)がある。

(7) ミンスクにおける避難民の悲惨な状況に言及した文献として次がある。Johannes Schleuning, *Die wolgadeutschen Flüchtling in Minsk*, in: *Die deutschen Wolgakolonien. Von ihrer Gründung bis zu den Tagen ihrer größten Leidenszeit*, hrsg. Von dem Verein der Wolgadeutschen E. V. Berlin, 1922.

(8) フランクフルトの収容所の、秩序はあるが厳しい状況に言及した文献として次がある。Ueber die Flüchtlingslager in Frankfurt a. O., Lockstedt und Lechfeld, *Deutsches Leben in Rußland*, Nr. 3/4, 1923, S. 46-47.

(9) 手紙に記された内容の時間的経過に即して、第二段と第三段を入れ替えてある。

(10) 今日のヤウク家一族の調査によれば、アンナは一九七四年までドイツのヴィースバーデンで生きたというが、彼女の兄弟姉妹の没年はカタリーナは一九四四年、エヴァは一九六九年、ゴットフリートは一九三七年、ハインリッヒは一九六四年(アメリカ)、ダヴィドは一九七六年(アメリカ)、ナタリーは不明、フリードリッヒは一九五一年、アマリーは一九九三年、ゲオルグは一九六八年、カトヒェンは一九六七年、アレキサンダーは一九

四一年、となっている。本論冒頭に記した兄弟姉妹の生年も同調査に依っている。The Jauk's of Oberdorf of Russia, <http://freepages.family.rootsweb.com/~jauk/oberdorfl.htm>

1921—1922 年飢饉とヴォルガ・ドイツ人：現地からの証言

出典

- a Friedrich Bier und Alexander Schick, *Aus den Leidenschaft der deutschen Wolgakolonien*, hrsg. von Karl Esselborn, Darmstadt 1922.
- b Samuel D. Sinner, *Der Genozid an Russlanddeutschen 1915-1949*, North Dakota, 2000.
- c Letters from Hell, *An Index to Volga-Germans Famine Letters Published in Die Welt-Post 1920-1925;1930-1934*, compiled by Samuel D. Sinner, Lincon, 2000.
- d *Die Welt-Post*
- e *Die evangelische Diaspora*
- f *Deutsche Post aus dem Osten*
- g *Volga Relief Society, Mitteilungsblatt*
- h *Ellis County News*
- i *Der Wolgadeutsche*
- j *Wolgadeutsche Monatshefte*

1921 年 4 月 11 日付グリムからの手紙の内容 (*Die Welt-Post*, 29.IX.1921, S.5)

3 月に起こった反ボリシェヴィキの蜂起にはグリムの人びとも多数参加しました。というのも彼らは蜂起者に動員されたのです。バルツァーの戦いではボリシェヴィキが勝利しました。戦いにおいて蜂起した者の 500 人以上が命を落としました。そしていまでは勝利者が個々の村をまわって懲罰を開始しています。蜂起に参加した者は、捕えられればすべて射殺され、その肉親も重い刑罰を科せられました。多くの血が流され、多くの家族からは最後の馬あるいは雌牛が没収されました。しかし、こうした騒擾よりさらに悪いことに、当時すでに食糧の心配がありました。私の姉妹は書いています。「私たちも飢えています。飢えはほとんどの人たちを襲っています。これからどうなるかは分かりません。際限ない食糧不足が私たちを襲っており、多くの人たちは祈ることを学んでいます。空中の鳥を養う神様は私たちを哀れに思うだろうと、私は硬く信じています。

1921年4月13日付グリムからの手紙 (*Die Welt-Post*,29.IX.1921,S.5)

ヤコブは今日始めて畑に行きました。昨日の朝は *Ackerbeistunde* でした。ヤコブは冬に2頭の馬を手に入れました。ハインリッヒはまだ1頭だけは保有しており、それでなんとかやっています(?) (蜂起の後でも)。彼らは衝突しましたが、この3頭の馬で自分たちの土地を耕すことになりましょう。まったくの空腹でこの重労働を行うのは当然大変なことです。ヤコブのところでは日々のパンの心配が特にきわめて大きいです (彼は6人の子持ちなのです)。グリムの飢餓は最悪です。これだけ苦しみが大きくても、私たちはいままで神様への信仰を失ったことはありません。神様はこれまで私たちを助けてくださいましたし、これからもそうしてくださるでしょう。天なる父は最大の危機のときに何度私たちをお守り支えていただいたのでしょうか! どうして私たちは天父のご加護にお任せすることができないのでしょうか! パパは6ヶ月間メッサーで教師をしていましたが、近日中に再びグリムに戻ってきます。彼はもはや教師としてやっていくことができません。彼もすでにひどい飢えに苦しまなければならなかったのです。

1921年4月19日付グリムからの手紙 (*Die Welt-Post*,29.IX.1921,S.5)

学校はすでにずいぶん前から閉鎖されています。聞いたところでは、中央学校の授業はやがて再開されるはずですが。

1921年4月27日付グリムからの手紙 (*Die Welt-Post*,29.IX.1921,S.5)

ひどい頭痛がします。・・・パパは一週間前に食糧を調達するためにフッセンバッハへ出掛けました。まだ戻ってきていません。カールも昨日の朝にそこに出掛けました。ヤコブとハインリッヒは明日の朝、出掛けるでしょう。かれらはまだ播種を終えていないのです。困窮から、食糧を得るために播種の仕事を彼らは中断しなければなりません。昨日は、私たちは一日に一回の食事をしました。されはジャガイモの皮を入れた薄いスープでした。君は私たちの生活を大体は想像できでしょう。しかしそれでも私たちは気落ちしません! ・・・

1921年5月17日付グリムからの手紙 (*Die Welt-Post*,29.IX.1921,S.5)

聖霊降臨祭がやってきました。今日は祭りの3日目です。人びとはすでに再び一生懸命働いています。しかし、それは食糧を得るために走り回り、少しでも生命をつなぐという

ことです。ヤコブも今朝、困難な旅に出て行きました。私たちは非常に弱いのです。私たちはいまでは貧民給食所から与えられるスープだけで生きています、このスープは 6 人分（したがって家族の半分に）と決められています。ここグリムでは飢餓が生じており、それは他の村々よりもはるかにひどいものです。政府は最近になってここに貧民給食所を開設し、それによって多くの人びとの最悪の飢餓は少しは鎮められました。今年のように悲嘆に暮れて聖霊降臨祭を祝ったことは一度もありません。私たちの家には菓子やパンが何もなく、料理する一握りの穀粉がなく、ジャガイモやその他の野菜もありません。私たちの生活はこのようなのです。パパとカールは日曜日の朝にフッセンバッハから戻ってきました。彼らは、ジャガイモを 15 フント、穀粉を 5 フント、食肉を 5 フント持って来ました。あちらでも得る物はもはや何もないということです。何かを得ようとすればさらに広く歩き回らなければなりません。・・・今日まで良い収穫の見込みは小さいです。というのも雨が降らないからです。その代わりに毎日乾燥した風が吹いており、加えてひどい暑さです。・・・雨がさらに長いあいだ降らなければ、畑は発芽することはないでしょう。パパはかなり多くの書物を製本するためにフッセンバッハが持って来ており、かれはそれで今後何らかの食糧を手に入れます。最近彼は年取りました。悲惨な生活が彼をひどく衰弱させているのです。すでに君に書きましたように、私の健康も良くありません。頭痛がひどく、貧血もひどくなっています。わずかな食べ物では快復することなど考えられません。私は毎日、私を元気にしてくれるよう神様にお祈りしています。・・・聖霊降臨祭の最初の日、私は再び墓地の私たちの愛する人たちの墓にいきました。ああ、かれらは何ということでしょう！ 彼らはあらゆる不幸からは解放されています。私は彼らの墓の前で何度も涙ぐみ、・・・。

1921年5月25日 Wiesenmueller 元 Warenburg 郡書記 Christoph Schneider

の手紙 (a-8-10)

「ヴォルガ地方のわたしたちの入植地はすべて、ここ長いあいだ荒廃しています。多くの人たちは、餓死から逃れようとして、カフカースに向かっています。ここにはいまや、もしも世界大戦前の法律がまだ有効ならばドイツへと進んで移住しようという若者もいます・・・。わたしたちのところではまたもや凶作です。雨はまだ降ったことがなく、すべてが乾ききってしまい、すでに三ヶ月ほど東風がいつも吹いています。種蒔きはわずかで、生育もまだ良くないです。穀類の播種は以前は二〇〇〇デシャチナだったのがいまでは一

〇〇〇デシャチナにもならず、小麦は六〇〇〇デシャチナが普通だったのに三〇〇デシャチナだけです。キビとひまわりは以前より多く、四〇〇デシャチナだと思います。」「ヴォルガ・ドイツ人の完全な衰亡を理解するためには、かつては私たちに自治が、十分な自治があったことが理解されなければなりません。それが現在では単なる机上のことにすぎないのです。わたしたちの人びとが一九一九年に自分たちに課せられた穀物税を納めず、この穀物を徴収するだけの力がわれわれの役人にはなく、連隊長が呼ばれ、レット人、エストニア人、ユダヤ人、そしてときにはロシア人も差し向けられました。しかし、そもそもドイツ人すべてに恨みをもっている人間が選ばれました。その後、こうした人びとは穀物を集め、また、この年の収穫も良かったのですが、一九二〇年にはまったくの不作がやってきて、たとえば、ヴィーゼンミュラーの人びとは播種した量の半分も収穫しなかったのに、七〇〇〇プードの税が課せられました。この賦課量は、全収穫量の二倍あるいは三倍の量です。当然この地から不作についての報告ができるだけ正確になされましたが、その報告は実際よりはるかに悪く書かれていました。この報告は実際に信じられなかったですし、また真実でもありませんでした。それゆえ、コミッサールと呼ばれる、外からきた役人はそのまま職務につき、加えて、トゥーラ県から部隊がおくられてきました。この部隊は、その担当する地域の取り立てを完全に行なっただけでなく、七%も余計に取り立てました。しかしそこはとてもよい地域で、一デシャチナ当り一〇〇プードあるいは二〇〇プードの収穫があり、当然、取り立てを行なうことは容易でした。こうした人びとは真の共産主義者であるか、あるいはそのように自称していましたが、実際には、ここで非常に自分の身を富まし、とことん略奪しつくした人びとであったのです。新聞では常に、一人当たり二〇プードの基準であるべきだということを読みましたが、彼らは本当にすべてを持って行ってしまい、私たちは隠しておいたもので生きていけ、と言いました。というのも、何千プードもが隠されているのを確信していると彼らは言い立てたのです。こうして、大変な飢餓がおこりました。はじめは彼らは播種用の種子を与えると約束しました。しかし春がやってきて彼らは種子の配給をきっぱりと拒否し、暴動がおこりましたが、それもやがて鎮圧されてしまいました。私たちには種子もパンもないままです。いまやモスクワから調査にきていて、トゥーラの人びとは自分たちの権限をはるかに超えたことをしてきた、ということがじきに確認されました。彼らはいまや裁判の前に立たされるべきです。このことは確かなことですが、私たちへの助けはまったくなく、飢えた人が数多く死んでいきます。そして、ロシアは途方もない損害を蒙っており、土地の一〇分の九は耕されないま

まにされており、少なくともここヴィーゼンミュラーとその周辺はそうです。ここからはすでに五七家族が南へと移住していますが、そこは去年は豊作であり、今年もふたたび良い収穫の見込みがあります。さらに多くの人びとが外へ出て行こうという考えをもっていますが、移住していく先では、来る人たちすべてをどのように宿泊させ食事を与えるべきかを心配しはじめています。こうして、悲惨な状況であり、重ねて悲惨なのです！」

1921年5月30日 Umet 手紙 (a-10)

「一月以来、わたしたちにはパンがなにもなく、一〇人が死にました(?)。」

1921年6月8日付グリムからの手紙 (*Die Welt-Post*, 29.IX.1921, S.5)

・・・食糧は再び底を尽きました。パパもしばしば飢えに苦しんでいるに違いありません。というのも、食事は一日に2回、まさに貧しいものを食べているからです。年取ってもなおこうした困窮を経験しなければならぬとは、パパも気の毒です。彼は、明日、製本の完成した書物を引き渡し、もう一度他の書物を受け取るために、再びフッセンバッハに出掛けます。完成した書物の収入は当然のことながらすでに使い果たされています。・・・彼の足はかなりひどく膨らんでいます(飢えの結果です)。・・・奇跡が起こらない限り、ここの人びとのほとんどが餓死することは確かです。人びとはみんなまったく衰弱しています。膨れた身体の人びとが路上を這っているのを見るのはきわめて痛ましい光景です。昨日(6月7日)、私たちのところにはじめての雨が降りましたが、しかしそれはまったく短い雨で、今日はすでにその跡形もなく、土地は乾ききっています。収穫の見込みはきわめて悲しむべきもので、ほとんどの畑は荒涼としています。いつもはこの時期には見事な緑に光輝いている草地はわずかな草に覆われているだけです。人びとの目にはここでのこれ以上の生活は不可能です。人びとと家畜は飢えることになるでしょう。多くの人びとはいまやすでに、収穫の見込みのより良い他の地方へとここを離れていきます。すべての人が餓死を恐れています。ヤコブとウンフリゲン一家は可能性が生まれたらすぐに移住していくことを決めています。フリッツェ・グレットヒェンは君によろしくとのこと。彼女もひどく飢えているに違いありません。彼女は、自分の兄弟のハインリッヒを埋葬するために数日前にグリムにやってきました。ハインリッヒも激しい飢えで死んだのです。彼女の兄弟のヨハン・ヤコブは戦争で命を落とし、彼女の母親は2年前に殴られて死亡しました。こうして、彼女の兄弟ハインリッヒの奥さんは7人の子供とともに残され、ひどい飢

えに苦しんでいます……。彼らにはすでに長いこと穀粉やジャガイモがありません。春には彼らの最後の馬を失いました。

1921年6月10日付或る神父の手紙 1921年8/9月発行 *Die evangelische Diaspora*、5/6号掲載のサラトフの牧師 Johannes Schleuning の報告

ジャガイモや肉のない乏しい、1日に一度だけの食事は餓死の直前の1回の食事である。娘が一片のわずかなパンをねだったときには胸の張り裂ける思いがする。彼女に何も与えることができないのだ。

1921年6月22日付グリムからの手紙 (*Die Welt-Post*, 29.IX.1921, S.5)

……。収穫の見込みは非常に悪く、ここでの冬の生活はもはやほとんど考えられません。……。昨日、霰雨が私たちに襲い、庭や畑に大きな被害がでました。……。最近ここでは多くの人が餓死しています。そしてさらに恐ろしいお客さんを恐れなければなりません。コレラがすでに都市で蔓延しており、猛威を振るっています。……。私たちの貯えはこの何日間でまったく無くなってしまいました。それでヤコブとパパはサラトフに行かねばなりません。今日、彼らは戻ってきました。……。サラトフで猛威を振っているコレラからは彼らは幸運にも守られ、多くの食糧を持ってきており、私たちは何回かは十分に食事ができます。アマリーは、彼女の嫁(フェルドシャー・オルベルク)とその子供と一緒に3週間後にカフカースに移住するつもりです。そこでの生活がそれでもはるかに良いので。

1921年6月25日付 Wiesenmueller (サマーラ) からの手紙 1921年8/9月発行 *Die evangelische Diaspora*、5/6号掲載のサラトフの牧師 Johannes Schleuning の報告

親愛なる義兄弟よ。おまえの兄弟は飢えのために体が膨らんでしまっており、他の家族も同じだ。ベッター・コンラッドは飢えで死んだ。お前の義父も餓死寸前である。

1921年6月27日 Umet 手紙 (a-10)

「飢餓状態は非常にひどく、さらに悪くなっており、すでに多くの人が飢えで死にました。」

1921年6月付、ウルバツハからの手紙 (*Die Welt-Post*, 1. IX. 1921)



非常に多くの人間が路上横たわっており、カササギやカラスが腐敗した死体の悪臭を取り除くのに誰も何もできない。・・・神様、あなたは全能である。私たちはどうなるのか。ドイツ人の村ウルバッハ（リポフークート）では半分の家が空になっている――避難し、空腹の舞台に殺され、あるいはコレラで死んでしまった。・・・真に洗礼を受けたキリスト教徒が自分の隣人から繰り返し食べ物を奪っているのをみることができるとは決して信じられないことである。そして、まったく迷いもなく、落ち着いて無感動にかれらは満腹になる。「ともかく人は生きるためには食べなければならないのだ」。・・・ここウルバッハでは、人びとはすべて骸骨のように見える・・・。目をやればどこにも倒れ死んでいく人びとが見える。

---

全家族でウルバッハ、ポクロフスク、カタリーネンシュタットを通り過ぎ東へと日々移住していく何万人もの農民は非常に多くの死体を路上に残しておき、死体の悪臭の駆除をカラスやカササギにまかせるより他に何もできません。というのも犬や猫はずっと前に私たちが食べ尽くしてしまったからです。・・・1フントの穀粉がここでは4万5000ルーブリしますが、サラトフではその2倍です。ペルシア人は女の子より男の子に多くを払って買い求め、ブロンドの女の子はアシャハードに送ります。・・・神様、あなたは全能です。私たちはどうなるのでしょうか。ドイツ人の村ウルバッハでは半分の家が空になっています――避難し、空腹の兵士の部隊に殺され、あるいはコレラで死んでしまいました。・・・真に洗礼を受けたキリスト教徒が自分の隣人から繰り返し食べ物を奪っているのをみることができるとは決して信じられません。そして、まったく迷いもなく、落ち着いて無感動に彼らは満腹になるのです。「ともかく人は生きるためには食べなければならないのだ」。・・・ここウルバッハでは、人びとはすべて骸骨のようにみえます。

1921年7月4日 Lauwe 未亡人の手紙 (a-8)

「わたしたちの貧しさといったら、がまんのないものです。神様はもはやわたしたちの祈りを聞いてはくれません。神様はわたしたちみんながキリスト教徒でいるつもりであることをみてきているのに、いまはわたしたちには呪いがかけられているのです・・・。わたしたちの辛苦について書くことは許されませんし、わたしたちみんながどのように扱われているのか、語ることもできないのです。わたしたちには蒔く種子はなく、収穫物もありません。わたしたちの畑では6デシャチナから5プードの穀物を収穫しただけです。」

1921年7月6日 Umet 手紙 (a-10-11)

「四ヶ月間、家には一片のパンもなく、そして、パンに不足しているだけでなく、どのようなものであれ食べるものに事欠き、着るものも同じです。私たちは袋を解いてつくったシャツやズボンを身に着けています。・・・収穫は乏しく、不作です。庭の果物もわずかです。ただ、雑草やジャガイモはまだ手に入れることができます。ようやく雨が降り、キビやスイカが収穫できるという期待がもてるのですが、それもわずかな期待です (was ist das unter so viele)。なにしろ、ロシア全体の収穫が乏しいのです。」

1921年7月12日 Wiesenmueller 手紙 (a-10)

「すでに別の手紙で書きましたように、私たちの周辺から多くの人が死んでいっていますし、その数はどんどん増えているようにみえます。先週はほぼ毎日、四人、五人から六人と、死んでいきました。それは子供、独り者、年老いた者と、年齢はさまざまです。この原因は貧窮であると思われます。多くの方は先週はずっと食べるパンがまったくなく、その他の食糧もきわめてわずかであって、胃は完全に弱っており、何にも慣れていないこの胃に作りたてのパンや穀分から作った重い食物を食べることになるのです。胃はこれに耐えることができず、死んでいくこととなります。収穫は本当に乏しく、最近の統計によれば平均して一デシャチナ当り二・五プードです。しかしこれはライ麦(Roggen(Korn))だけの数字で、他の穀物は、種子不足でわずかしか蒔かれず、また雨不足のために、まったく発芽しませんでした。今年の夏は雨は一回降っただけで、しかもそれはすでに収穫の時期にあたっていたときで、あまりに遅かったのです。それでもこの雨があったのでいまは、少なくともジャガイモ、スイカやその他の野菜は収穫できるだろうという期待をもっていますが、しかし、非常に土地が乾いていたので一回の雨はあまりに少なすぎます。もう一回は雨が降ってくれなければなりません。ことにジャガイモは、種子も不足していたのでわずかしか植えつけられていません。・・・要するに収穫は何もないのです。今年はどうなるかと考えたときには大変心配になります。というのも助けはどこからもなく、私たちの村人は飢えで死んでいきます。何年もの貯えもはや一プードも残っていません。周辺のすべての村々や私たちのヴォルガ地域全体がそうであるように、私たちの共同体からも多くの方が南ロシア、カフカース・・・、そしてシベリアへと移住しています。すでに出発した人および出発しようとしている人の数は一〇〇家族にもなります。私たちの共

同体にまだ残っているのは三〇〇〇人以下になっているのです。」

1921年7月12日付 Balzer からの手紙 1921年8/9月発行 *Die evangelische Diaspora*,  
5/6号掲載のサラトフの牧師 Johannes Schleuning の報告

毎日、私たちの村では8—10人が埋葬されている。彼らはすべて掘った穴に入れられている。3、4ヶ月あとに誰が活着ているのか、神のみぞ知ることである。

1921年7月12日付グリムからの手紙の内容 (*Die Welt-Post*, 29.IX.1921, S.5)

グリムにおけるコレラの発生と最初のその死者の犠牲が出たことを報告。

1921年7月14日付 *Die Welt-Post* 掲載の手紙

こちらではあらゆることが秩序あるかどうかあなたたちは知りたい。毎日2、3人が餓死していくのが日程となっている。たとえば、デンホーフ村〔ゴロボフカ〕がそうである。農民からはすべてが没収されてしまった。

1921年7月15日 Franzosen 手紙 (a-11)

「ここでの貧困はすごいものです。・・・すでに昨年のクリスマスのおかげからパンがなく、わたしたちは薄いスープで生きてきましたので、みんな体がとても膨れてきています。しかし収穫の見込みはなく、ほとんどまったく何も生育しておらず(?)、播種量の半分も収穫されなんでしょう(? Die halbe Saat nicht)。どのようにして生き延びていけばよいのか分かりません。わたしたちがどうなるかですが(?), 兄弟のハインリヒはタシケントにおり、わたしはひとりまだフランツォーゼンにおります。」

1921年7月15日 Saratov 手紙(*Deutsche Post aus dem Osten*, Nr.35, 28.VII.1921)

「親愛な教父さん！ なぜ私はふたたびサラトフにいるのでしょうか。私たちヴォルガ・ドイツ人が困窮し、飢え死にを恐れているということを君はみるでしょう。日曜日に Huck では八人が敷き藁の上に横になっており、同じ数の人間が(餓死して)埋葬され、多くの家族がすでに死滅しています。Grimm では、毎日二〇人から三〇人の人間が死んでおり、四、五ヶ月のうちにこの村(人口一万二〇〇〇人)は死滅するであろうと人は予測しています。こうした状態がほとんどすべての入植地でみられるのです。生活物資とくにパンが

すでに長いあいだ欠乏し、播種用穀物はほとんどまったくないのです。全面的な不作により私たちは最後の希望も失っています。パンはどこから受け取ることができるのでしょうか。どこに行ったら飢え死にから救われるのでしょうか。多くの人びとは自分の全財産を競売に付し、カフカース (Linie) に移住したが、そのうちの何人かは、パンも衣類もなく、そして家もない赤貧になり、戻ってきており、多くはその途中で死んでいます。Huck で乞食している Grimm の村人たちは、圧倒的に子供ですが、そのなかから毎日一二人が死んでいます。だれも助けることができないのです。これ以上ぞっとするように描くことはできないといった様相なのです。山地側でも草地側でも、住民の半分もいないような村が多くあります。移住して行ったか死んでしまったかです。もう一冬をロシアで過ごさねばならないとしたら、どういうことになるのでしょうか。そのときに生き残れるのはドイツ人のうちの僅かな割合でしょう。サラトフは乞食でいっぱいです。男、女、目の窪んだ子供、彼らは飢え、ぞっと身震いするほどで、痛々しく、ほとんど例外なしにドイツ人です。私はここから救われる出口はないかどうか、モスクワへ行こうと思います〔?〕。私たちはみんなドイツへ行きたいですが、もしもそこで生きていく可能性がないのであれば、アルゼンチンのドイツ人入植地に行きたいです。正気を失った財政の混乱と誤った行政によって私たちの勤勉で精進する、よく働く小国民一以前はロシアの穀物貯蔵室を一杯にしていた一は名状しがたい不幸の底に突き落とされており、ここに留まる限り死滅からの救助は何も考えられないほどです。国境が開かれているならば私たちは早くから一切のもの携えて、全家族で出発し、馬と牛に乗って西部国境へと向かったでしょう。しかし、私たちにはなんの移動の自由もなく、ただ鳥かごのなかに座っているだけで、人は私たちを自発的にロシアから出て行かせるよりもむしろここで餓死させることになるのでしょうか。」

1921年7月17日付グリムからの手紙の内容 (*Die Welt-Post*, 29.IX.1921, S.5)

数日後に旅立とうとしていること、しかしあまりに恐ろしい食糧不足にコレラが加わり無数の犠牲者の恐れがあり、そのときまでに多くが変わり得ることを報告。・・・教会の鐘が静まることがほとんどありません。現在では毎日12回、14回、さらには17回も死者の埋葬があります。多くの友人や親類がすでに死にました。

1921年7月17日付 *Die Welt-Post* 掲載の手紙(c-2)

昨日、フック〔スプラフヌーハ〕で2人の男性が射殺された。彼らは、1000プードのジ

ジャガイモを貯蔵していた地下室に押し入った張本人であった。すでに一月から軍隊がここに駐留している。兵士たちは毎日家から家へと渡り歩き、すべてが、穀物、穀粉、石炭、ジャガイモ、筋肉、毛布、皮製品が、要するにすべてが持ち去られた。彼らが何か隠されていたものを見つければ、動産でも不動産でも押収された。多くの人びとが餓死している。すでにだいぶ前からチフスが発生し、非常に危険な状態になっている。事態とくにメッサー〔ウスチ・ソリチャ〕とグリム〔レースノイ・カラムィシュ〕で深刻である……。収穫は良いといってもよいが、すべてが持ち去られたのだ。ロシア人の村々ではアトカルスク・サークルになお穀物がある。

1921年7月18日付グリムからの手紙 (*Die Welt-Post*, 29.IX.1921, S.5)

大地は嘆き悲しんでいます。悲惨な状況は言葉では表現できません。……。飢えで人びとの身体は膨らんできており、腫瘍ができて、大抵は死んでいきます。さらにコレラで多くが死んでいます。大抵の人びとはすでに棺なしに埋葬されています。

1921年7月20日付グリムからの手紙 (*Die Welt-Post*, 29.IX.1921, S.5)

7月12日にすでに君に書いたように、コレラがグリムとその周辺の村々を襲っています。今日は14回、昨日は29回、一昨日は19回、埋葬がありました。家族全員がすでに死んでしまった家もあります。……。たった今も死者の鐘が鳴り響いています。この鐘はいまや特に心に深く響きます。おもわず「今日は私の哀れな隣人に起こっているが、明日はおそらく私とその目に会う」考えてしまうのです。ただもっとも近いほんのわずかな数の肉親に付き添われて毎日多くの棺が墓地に運ばれるのを見るのは、なんとも痛ましい光景です。板が非常に高価なので、すでに多くの者は荒削りの板で自分たちの死者のために棺をつくっています。何人かはすでに棺なしに埋葬されました。……。私は窓から外を眺め、天に虹が光り輝いているのを見ます。……

1921年8月21日の記事 Mariental 手紙 (*Deutsche Post aus dem Osten*, Nr.34, 21.VIII.1921)

「餓死が迫っており、援助が何もこななければこの冬を迎えることができないであろう。今年の収穫は非常に貧しく、一九〇六年の収穫でさえ豊作にみえてくる。夏の間中、一度も雨が降らなかった。小麦を蒔いたのもあまりに遅かった。果物の皮を一年以上も保存して

あり、それを食べている。飢え死にするより道はないのだ。ここから逃れることができるのだろうか。どうか君のできることをしてくれ！ われわれはまったく荒んだ状態になっていく。というより、われわれはすでに荒んでいる。われわれの村では毎日五一六人が死んでいるが、Alt-Boaro では二〇人も死んでいる。」

1921年8月28日の記事 手紙(*Deutsche Post aus dem Osten*, Nr.35,28.VIII.1921)

「昨年のクリスマスからは一片のパンもみていません。人びとは飢えで手足が膨らんでいきます。どうか私たちを助けてください。そうでないと私たちはみんな死んでしまいます。」

1921年8月28日の記事 (*Deutsche Post aus dem Osten*, Nr.35,28.VIII.1921)

「破滅を迫られているヴォルガ・ドイツ人——Rig. Rdsch.(Riga Rundschau ?)からの引用：前年(1919年)にもヴォルガ地域は不作で、収穫の大半が全滅したが、それにもかかわらず1920年に異常に高い量の穀物調達が入植地域に課せられた。トイツ・コミューンからはこの穀物調達量が供出することができず、この年(1921年?)の二月には監督・懲罰舞台として赤軍のトゥーラ部隊がヴォルガ入植地に派遣されてきた。この部隊は、村々を馬で巡察し、すべての穀物を即座に供出するよう要求した。その際、部隊は、まずは貯蔵されている穀物すべてをまとめることが大事だといひ、現在の総量を確認したあとに村々には必要な量が残されると言った。

死の恐怖のなかで力づくで穀物とジャガイモが取り上げられる際、「貯蔵する穀物はすべて地域の行政中心地カタリーネンシュタットの安全な倉庫に運び、住民にたいしてはすでに精製されている穀分を分配することになる」と言われた。

穀物をすべて供出せよという要求に(?)住民は非常に激昂し、各地で武装した住民の反抗がおこった。カタリーネンシュタットの近くの大きな村 Tonkoturowo では次のように事件がおこった。春蒔きを始めようとしたときにトゥーラの赤軍兵がもどってきて、共同体倉庫にある穀物の残りを持っていこうとした際に、村の住民は、最後の穀物を守るために抵抗した。女と子供は倉庫の前に立ちほだかり、男たちは干草用熊手、大鎌、農具を手にした。流血の格闘がおこり、反抗者たちは、年齢や男女の区別なく機関銃で追い散らされ、また撃たれた。その後、Tonkoturowo は、赤軍兵士から組織的なあらゆる略奪を受けた。入植者から奪った物品はカタリーネンシュタットの共産主義者のあいだで分けられた。

流血の戦いは、大きくて豊かな村であった **Marienthal** でもおこった。ここでは、赤軍兵と村民との戦いのなかで教会の塔が銃弾で破壊された。そして、そこに居合わせた目撃者が報告しているように、**Marienthal** の住民の半分はその戦いのなかで命を落とした。

二月からは入植地域の全住民にパンがなくなった。というのも徴発されカタリーネンシュタットに運ばれた貯蔵穀物の見返りの穀粉は住民に配分されないままであったのである。こうして、ヴォルガ・ドイツ人から彼らの最後のパンが、また播種用種子が奪い取られた。彼らの不幸の原因は単に不作にあるだけではなかった。・・・

一片のパンもなかったので春には羊、雌牛、雄牛といった大量の家畜の屠殺がはじまり、飼料不足で飢えた馬も屠殺されはじめた。経営の基盤が犠牲とされたのである。・・・

雪解けから七月末まで灼熱の太陽が全てを枯らし、カタリーネンシュタット周辺には七月一七日になってはじめて雨が降った。収穫は全滅し、最後の出口もなくなってしまった。パンはなくなり、家畜はいなくなった。そして、住民は、飢餓と絶望にせきたてられ、いまや代用品、雑草、蛙などを食べなければならなかった。壊血病、チフス、そして・・・コレラが発生している。祖先からの土地を信頼しつつも、いまやそれぞれの村には死の幻があらわれ、逃亡がますます広がっている。この極限の貧窮と欠乏のときに、何百年ものあいだ世代から世代へと受け継がれたドイツ人の家族意識がいかに強いかが明らかになっている。・・・同じ民族として、かれらは故郷の村へと向かっている。

春には一頭の馬と旅費を用意するのに全財産がそれと引き換えられた。**Straup** 村では、旅立つ人のうちのあるものは自分の屋敷を二万ルーブリという、つまり当時のパン二、三ポンドの値段で売り、戸棚などの家具は八ポンドのジャガイモと交換した。**Kanel** 村〔カタリホネンシュタットの近く〕では、二〇〇本ほどの果樹園を古びた車と飢えた馬一頭と交換せざるを得なかった。事情は悪化し、家、屋敷、畑しか交換の対象とされなくなった。移住していく人は自分の家は運命にまかせ、すべてを奪われて出て行く。サマーラ県では、**Krasny Jar** のように、住民が絶えてしまったようにみえるところもある。家々は釘付けにされ、見捨てられている。ヴォルガ・ドイツ人は、近隣のロシア人からは、「手ぶらで、手押し車でこの国にやってきたおまえたちは、裸になって手押し車で国から出て行くべきだ」と、憎悪をもって言われる。こうして、ヴォルガ・ドイツ人の一部は去りつつあるが、少しでも収入がある人たちは「故郷の土地と一緒に骨を埋める」と言って残った。

難民の道は、南はクバン地方へ、東はサマーラを超えてトルキスタンへと、二つの方向が考えられ、サラトフとサマーラは難民の集結点となった。敵意を向けられながら飢饉の

土地を困窮して出て行く人たちの不幸は言葉には尽くせないものであったにちがいない。しかし、サマーラに到着してもすぐにはタシケントへの道に向かうことは許されなかった。何日も彼らは泣き続け、通りを歩きながら物乞いをした。彼らを助けるものは誰もいなかった。こうして、サマーラは避難する人たちの共同の墓穴となった。後になってタシケントへ避難することに許可がだされたが、それはあまりに遅すぎた。すでに多くのものが飢えと病気で死んでいたのである。他方、クバン地方への避難も閉ざされてしまったままであった。栄養不良と飢えから精神的に無感覚になっており、同情されることもなく、避難の動きはなくなった。避難の途中の見知らぬ土地で悲惨な死を迎えるより自宅で死んだほうがましだという思いがある。最後の馬も殺され、ますます破局的になっている。

目撃者の証言によれば、ヴォルガ入植地の現状はつぎのようである。穀物は枯れ、家畜は屠殺され、住民は草を食べている。短期間に収穫された冬ライ麦はデシャチナ当り二、三フントしかなく、すぐに食い尽くされ、通常の食事はできず、無数の死者が出た。せいぜいリンゴと草をまぜてつくったものを代用食としたが、それで栄養を摂ることも長くは続かない。ここに留まる人びとの「大量死」が、年齢を問わない苦痛に満ちた餓死がはじまった。ひとはやせ衰え、いたるところで死がみられ、首都の通りでも、倒れて弱々しく死んでいく人間をみることができる。教会は見捨てられ、共同体は教会の牧師たちを扶養することができず、いまや教会では死者埋葬のみが行なわれる。

飢餓と病気に加え、政治的テロが住民を苦しめ、抑圧している。カタリーネンシュタットにはヴォルガ・コミュニンの最高行政当局およびチェーカーの支部がおかれ、当地の共産主義者――かれらは盗人であり殺害者である――が全住民を勝手気ままに扱っている。時代の苦しき、外国の援助などのことを述べようとする人は逮捕され、直ちに拘留される。……

……行政当局と共産主義者によるテロに加え、周辺のロシア人村との深い対立があった。それは、第一次大戦時の「ドイツ人狩り」以来顕著になっていたが、いまやドイツ人入植者地域への自治権付与によって深められ、拡大していた。

ヴォルガ・ドイツ人は、今日ではいかなる言葉も、いかなる約束も信じない。この国から出て行くこと、それだけが彼らの聞きたいことである。

村があいついで沈んでいる。カタリーネンシュタットの近くの入植地 Kanel は一五〇〇人の人口を数えるが、そこでは毎日一〇―五人が死んで行っている。ドイツ人の習慣でそれぞれの死者にたいしては「死者の鐘」を鳴らすが、ひっきりなしにその鐘の音が流れ、



かつて栄えた入植地からロシアの大河に鳴り響いている。

ロシアのもっとも忠実で最良の工作者である入植者たちは、彼らの祖国、そして世界が彼らのために何もなすことなしに、沈んでいく。

1921年8月28日の記事 つい最近ロシアから到着した牧師 Stenzel (オレンブルグ) の報告(*Deutsche Post aus dem Osten*, Nr.35, 28.VII.1921)

深い困窮から君に叫ぶ：・・・世界戦争はロシアにおけるドイツ人に恥辱と困窮をもたらした。・・・しかし、ドイツ人はドイツ人であることを止めなかった。ドイツ人入植地には現物の徴発、家畜・穀物の調達において最大の要求がなされ、・・・それは経済的破滅をもたらし、貧困と飢餓が生じた。ロシアにおける不作と飢餓についてはすべての新聞が報道している。・・・一九二一年の不作は一八九一年の不作、一八九二年のコレラ流行を忘れさせるほどである。・・・

際限ない小麦畑、豊富な家畜はいまはない。七年間の戦争は入植地に重くのしかかり、苦しみのなかで母国に向かって飢餓と窮乏について叫んでいる。

彼らはドイツ人として、困難な時代にドイツからの援助を期待している。

ドイツは、飢えている人、死んでいく人を助ける義務をもつのか。いうまでもなくドイツには何千倍ものさまざまな義務がある。父親がその子供たちに、母親が自分の孤児にもつとまったく同じような義務である。

しかし、この義務がどこから生まれるのか。

何千人もの豊かであったドイツ人の戦争捕虜や民間抑留者はロシアにおける追放の時期に安定と希望をもち、避難所とパンをもったが、それはまったくロシア・ドイツ人のおかげであり、農民や教育ある人びとは不幸な帝国ドイツ人を競って助けようとしたのである。・・・教会と牧師はこの助けをすることを拒否することはなかった。・・・

牧師と教師の背後にはドイツ人共同体があり、それが同胞を助けたのである。

ドイツは軍事的に砕かれ、政治的に排除され、経済的に麻痺しているが、この時においてさえ救済の義務を負うのか。・・・

ドイツではなくフランスがその政治によってドイツ民俗とロシア民族に固有の誹謗と中傷を吹き込み、西洋文化を軽蔑しているということをロシアの東方に示すべきである。・・・

ロシア民族への、そしてとくに飢えに苦しむドイツ人入植者への救援をドイツはみずからの利益のために行なわなければならない。ドイツはこの救済によって友人を得ようとし

なければならないし、自らの威信を確率しなければならない。そして、そうすることによって、ロシアとの貿易が再開されるときにドイツは測りがたい国であるロシア内のドイツ人を拠点とすることになる。

したがって、何がドイツをしてロシア・ドイツ人の救援に向かわしめるのかと言えば、それは人間的感動であり、政治的思慮であり、経済的共同利益である。

1921年8/9月発行 *Die evangelische Diaspora*、5/6号掲載のサラトフの牧師 Johannes Schleuning の報告

\* 住民の半分がドイツ人である Urbach からの手紙

ウルバッハのドイツ人地域では住民の半分は逃げていき、飢えた連中は殺され、あるいはコレラで死んでいる。

\* 他の或る手紙

2匹のネズミが6000ルーブリもする。

1921年9月4日付 フックからの手紙 (*Die Welt-Post*, 10.XI.1921, S.7)

ここでは夏に多くの村で(たとえば、モール[クルチ][人口は1912年の5710人から1926年の3667人に減少]、グリム[レースノイ・カラムィシュ][1912年の1万1788人から1926年の5300人に減少]、メッサー[ウスチ・ソリチャ][1912年の5295人から1926年の3575人に減少]で)毎日30—40人以上が死んでいった(しかも死体は路上で、また畑で見出された)。彼らはさまざまな病気・伝染病で死んだのだが、その原因はもちろん、ひどい飢えである。・・・

1921年10月12日付、ノルカから (*Die Welt-Post*, 12.I.1922, S.7 掲載)

[ノルカ[人口は1912年の1万4536人から1926年の7210人に減少]では]いまでは一日に8体から10体もの死体が埋葬されるようになっています……。子供が裸で部屋に座っている家庭が多くあります。大人たちは袋や布から彼らのために着るものを作っています。人びとのところにはさまざまな虫がおり、それを通じてチフス、搔痕などの病気が発生しています。人びとはまさに生き延びるためにロシア人のところで持っているすべてを、衣類、馬、雌牛、雄牛、機械等々を食糧と交換しています。しかし、最後には多くの者が餓死しているのです。

1921年11月25日付手紙 1922年1月3日付 *Volga Relief Society, Newsletter*

もしも援助がなければ大人の70—80パーセントは次の収穫前に死ぬであろう。

1921年12月10日付手紙 1922年2月2日付 *Ellis County News* (c—3)

昨年、政府は私たちからほとんどすべての食糧と家畜を奪っていった。今年の収穫は暮らしていくには十分ではなかった。牛肉、羊肉、あるいは豚肉、あるいは何らかのパンを手に入れることは不可能であったらというのも、すでに述べたように、政府があらゆるものを私たちから奪ったからである。

多くの人びとが飢えで死んだ。ルイスの住民の半分だけが生き残っている。いくつかの家族はみんなが死んでしまった。多くの人びとは町へと出て行ったが、それもそこで餓死するためである。ルイスの住民数は7000人であったが、そのうち生き残っているのは3000人である。一日の死者の数は10人から15人である……。革命家たちがあらゆるものを持ち去っていった。

1921年12月14日付手紙 1922年1月27日付 *Volga Relief Society, Newsletter*

グリムでは今年1000人以上が死にました。11月の人口は6200人でした。メッサーは11月の人口は3772人ですが、今年の死者は717人でした。モールは11月の人口は3800人でしたが、今年の死者は638人です。モールの墓地には埋葬されない死体が横たわっています。

1921年12月19日付手紙 1922年2月2日付 *Ellis County News* (c—3)

戦争〔内戦〕は私たちの村を大いに荒らした。軍隊はここで14日間野営し、私たちの馬5頭と約5万ルーブリを持ち去った。このことについて何か書こうとすれば死が待っていると脅された……。政府は私たちから私たちのあらゆる穀物を、ほぼ1500ブッシェルの小麦を奪った……。プファイファー〔グニリュシュカ、人口は1921年の4870人から1926年の2278人に減少〕の状況は誰もそれを語るができないほどである。

1921年12月30日付（サラトフ）ロシア人医師のアメリカ人宛の感謝の手紙 1922年発行 *Wolgadeutsche Monatshefte*、2号掲載

1922年1月5日付、バルツァーから (*Volga Relief Society, Newsletter*, 20.II.1922)

死者がすべて一つの墓に埋葬されるわけではありません。墓を十分に掘ることはできないのです。

1922年1月5日付 *Die Welt-Post* 掲載の記事

家の搜索、自分の家からの追放、略奪、そして容赦ない銃殺が日程である。

1922年2月12日付の P.Knies の手紙「Schilling」。 *Volga Relief Society, Newsletter* (日付なし、b-32)

私の村シリングでは 3000 人以上の人口があり、私はそこで 28 年間教師をしてきたが、以前には 50 人から 80 人の死亡があったが、昨年(1921 年)には約 300 人が死んだ。[1922 年] 1 月 1 日から 2 月 10 日までに 59 人の死者を数える。

1922年2月9日付 *Volga Relief Society, Newsletter*

1921 年は私たちから 800 人を奪ってしまった。400 人はまだいくらかのパンのあるさまざま地域に散っていった。1920 年にアルト・メッサーは約 5000 人の住民を数えたが、現在では 3600 人のみである……。未亡人、孤児、飢えて身体が膨れた人びとの数は日々増えている……。

1922年2月13日付の *Volga Relief Society, Newsletter* 掲載の手紙

餓死から自分の生命を救うために、人は、家具、衣類そして寝具のあるものを、ほとんど無くては済まないものを都市や村の暮らしの良いロシア人住民のところでわずかな金銭に換えたり、食糧と交換したりし始めた。

1922年2月13日付 *Volga Relief Society, Newsletter*

欠乏、貧窮は一日一日顕著に進展している。ソヴェトの援助は少なく、したがって私たちの民族は死滅するより他ない。

1922年3月3日付、サラトフから (*Die Welt-Post*, 13.IV.1922, S.2)

飢餓が非常にひどく、ここでは人肉食いの事例も多くあります。親が自分の子供を、夫が妻を殺しているのです。

1922年3月13日付、ディンケルから (*Volga Relief Society, Newsletter, 17.IV.1922*)

私たちの村[ディンケル][タルィコーヴァ、人口は1921年の3586人から1926年の1711人に減少]の人口は3000人ほどでしたが、現在では1500人だけが生き延びている。住民の半分は、村のなかでは飢えあるいは飢えの影響により、また飢えから逃れて移住する途中で、死んだのです。

1922年3月20日付、フックから (*Die Welt-Post, 25.V.1922, S.2*)

ここフック [スプラヴヌーハ] では、私が留守をしてから一月、二月に二〇〇人以上の成人が死んだが、現在では常にその倍のテンポで死んでいる。死者の大半は共同の墓に、一つの墓に二〇一二五人が、幾人かは棺なしに埋葬されている。ときにすべての死者を運び去ることができずに、積み重ねられ、それは一日に二〇体になることももある。

1922年4月10日付、パニン州飢餓援助委員会議長 **Kraemer** のヴォルガ・ドイツ人コミュニケーション執行委員会 (マルクスシュタット) 宛報告 (マルクスシュタット地区の **Unterwalden** で書かれる) (*Der Wolgadeutsche, Nr.1, 1922*)

東部の州 [パニン州] の飢餓者のために引き渡された食糧はもはやまったく十分でなくなったと報告しなければならない。・・・飢餓は日ごと激しくなっている。最後のものを食い尽くしてしまう家族の数が日ごと増加している。私が担当している州の村を巡回して、きわめて恐ろしい飢餓状態を目にした。たとえば、スザーネンタールの二人のドイツ人婦人はすでに一九二一年秋に していた馬二頭を食用としたが、そのような肉を食べてもすぐに死ななかったということがほとんど信じられない。バスカコフカ村の二家族は自宅の地下で捕らえたヒキガエルの肉で何日間も栄養を摂っていた。飢えはすべての村でピークに達している。人びとはあらゆるものをね自分たちのパンや家畜だけでなく、ありとあらゆる皮、骨、雑草、猫、犬等々食い尽くした。ソロトゥルンでは、最近の二日間のうちに一二〇人が死亡した。コミュニケーション執行委員会の委員 **J. J. Leifer** がすでに報告したように、**Unterwalden** の民兵は最近つぎのような死体食の出来事を伝えている。未亡人の **Maria Elisabeth Korn** (36歳) は、餓死した15歳の自分の娘の死体を、頭、手、足を除いてす

べて食い尽くした。コルン夫人はすぐに捕えられた。医師の前で下調べがなされ、告訴資料が裁判所に送られた。なぜ自分の娘を食べたのかという質問にたいして、彼女はつぎのように答えた。「私たちは9日間何も食べていませんでした。10日目に私の娘が死にました。私は何の栄養もとらなければ餓死せざるを得ないと思ったので、娘の死体を食べて自分の生命を救う決心をしました。娘が死んだあと、私は娘の死体から頭を切り取り、身体を切り開き、肝臓、膵臓および心臓を取り出して焼き、父に与えたあと、食べました。肉は数日間生き延びるのに足りました。捕えられなければまだ頭、手、そして足が食べられたのと思います」。私は、この事件の証拠として、娘の死体の残りを写真に撮った。

その後の巡回で私は、それぞれの村で、飢えてよろめきながら家から家へと行き、酔っ払いのように揺れ動き、地面に倒れる無数のドイツ人を見た。住民は死に絶えている。餓死の恐怖は個々の家族にだけでなく、村全体に重くのしかかっている。ただちに、そして大規模な援助がなければ、私の担当している郡は砂漠と化してしまう。家族のなかにはすでに最後の人まで死に絶えてしまった家族がある。ほとんどすべての村で共同墓地が掘られている。というのも、まったく衰弱してしまった人びとは自分の家族の死者を特別の墓に葬る力がない。飢えた家族が全員で村事務所の私のところへやってきて、悲痛な思いで、号泣しながら、またむせび泣きながら膝まづき、一片のパンを懇願した。私は、自分の目の前で飢餓に苦しむ人が崩れ落ち死んでいくのをたくさんみている。いままで述べてきたような状態なので、私は、ヴォルガ・コミュニオン執行委員会にたいして、私担当の郡の飢餓者2万1158人のためにできるだけ多くの食糧を引き渡してくれるようにと、差し迫った請願を申し出たい。農民は、これから何日間か農作業をはじめようとするが、パンがなく、かれらは、「少ない穀種を食いつくし、やつれて死んでいくのか避難するのかいずれかである」と言っているのである。穀種が食糧として使われているとすれば、収穫の見込みは何もなくなる。私は、執行委員会が、遅すぎない限りは憐れみを示し、飢餓に苦しむ人びとへの援助を急ぐことを期待する。

1922年4月3日付、アルト・メッサーの牧師から (*Volga Relief Society, Newsletter, 24.V.1922*)

私の教区では人口の半分はすでに死んでいます。・・・メッサーでは1月以来すでに380人が餓死していますが、多くの死亡はまったく報告されないままです。モールでもおなじだけの数であり、クッターでは125人ほどです。・・・村全体に死の静寂が支配し、ただ服

喪を告げる鐘の音のみがこの墓場の静寂をやぶるのです。・・・最近、ある母親が自分の子供を殺そうとしているということが私の耳に入りました。私はすぐに急いでその家に行きました。家の周りには馬、猫、豚、犬などさまざまな動物の頭が 20 ほどころがっていました。飢えに苦しむこの家族が食べ尽したものです。彼女が私に気づいたとき、家族全員が出てきました（豚小屋に似た小さな部屋に 10 人が住んでいるのです）。何という姿だったことか、記述することはできない。そこには衰弱した、ぼろを着た、汚らしい身体があったのであって、それは人間ではなかった。おもわず涙せざるを得なかった。・・・「お前の子供を殺すことだけはやめなさい」と頼むことしかできなかった。・・・私は飛ぶように家に帰り、ルター派の貯蔵物からこの家族にいくらかの穀粉、米、砂糖、茶およびアメリカ製の防腐石鹼 1 個を持っていった。

（これ以後掲載場所不明）・・・ここで生きることは不可能である！私たちはすべて死ぬより道はないのだ。

1922 年 4 月 18 日付手紙 1922 年 5 月 24 日付 *Volga Relief Society, Newsletter*

1922 年 1 月 1 日以後バルツァー〔ゴーロイ・カラムィシュ〕では 300 人以上が死亡している。復活祭の後の月曜日、10 人がその日にバツラーで埋葬された。

1922 年 *Der Wolgadeutsche, Nr.4* 掲載記事

昨年マリエンタールでポリシェヴィキによって殺された功績多い神父ゴットリーブ・ベラーツがヴォルガ・ドイツ入植 150 年を記念して著した書物がヴォルガ・ドイツ人にかんする歴史書としてはもっとも価値がある。しかし、そうした歴史書は個々の著者がそのときどきに手に入れた歴史資料に依拠している。ヴォルガ・ドイツ人の歴史にかんする包括的な、客観的な著作はまだないし、そうした著作がいつか書かれるかどうか、今日では非常に疑わしい。ヴォルガ入植地の文書室のほとんどが最近破壊されたという非常に痛ましい事実がこの疑いの小さくない根拠となっている。文書室を維持しようという試みがないことはない。大量の個人的記録、入植法、統計、地図、*Akten* 等々はあるが、それらはボロボロになって焼けてしまったり、そうでなくても運び去られている。

1922 年 5 月 13 日付 *Volga Relief Society, Newsletter*

毎日、飢餓を死因とする死亡件数が報告されている。ここデンドルフ〔ゴロボフカ〕では一

年〔1921〕に 765 人の死亡が記録されている。多くの家は、空になっている。なぜなら、その居住者がもはや飢餓に苦しみ悩まされることのない墓地に自分たちの最後の住まいを見出したからである。

1922 年 5 月中葉 Koehler (Balzer 地区) の教師 Peter Weinzettel の手紙 (*Der Wolgadeutsche*, Nr.4, 24.VI.1922)

私は、以前の 2 度の報告で、ヴォルガ地域におけるドイツ人の際限ない食糧不足について記した。わが同胞の何千人ものドイツ人が飢饉に襲われていることに言及した。一部は不十分な食糧のために、一部は悪質な食糧のために、激しい食欲で過度に食べて、結果として死をもたらすことになった。私たちがこの冬に体験した悲惨、困窮、食糧不足、不幸は言葉で表現できない。ここでは或る人がきわめて安く自分の衣服を食糧と交換し、あちらでは或る人が自分の家畜を屠殺し、餓死を免れようとしてきた。将来には絶望している。もう一人の人は自分の家や家畜小屋その他の建物をわずか数フントの食糧と交換している。餓死を免れた家族は、それぞれ 2、3 の経営を 1 つの経営にまとめ、なんとか生き延びようとしている。手工業者は、自分の製品を 100 ヴェルスタも離れたロシア人のところに持っていった。そのロシア人はまだ若干資力があり、ドイツ人の大半の財産をも生産物と引き換えに買い入れている。多くの人びとは、自分の価値ある物を食糧のために引き渡したにもかかわらず、外国からの援助が到着するまで自分の生命を引き伸ばすことができなかった。食糧不足に苦しまなかった人は一人もいなかった。上品な衣服を着ていてやせ衰えることのない人は、また体重が少しでも増えたような人は非難され、軽蔑され、嫉みを受けた。

しかし、もっとずっと不快であるのは、秋に家畜や食糧を含め自分の全財産を半値で処分して「アメリカ」の、彼らの親類や友人のところにより良い生活を求めようとした人びとである。こうした無数の残念な家族は、しかし、国境を越えては行くことはできなかった。彼らは、群れをなして集まり、さまざまな伝染病に罹り、大部分は死亡した。そのなかで生き残った人は個々に赤貧状態で自分の故郷に戻っている。ここでの困窮は彼らが道中に経験せざるを得なかったものに比べればはるかに小さいと思ったことである。

たとえば、ウルリヒの家族は、父親がすでに数年前に南アメリカに渡っているが、13 歳の少年と婿だけが戻ってきた。母親と 2 人の若い娘は途中で死んでしまった。グスタフ・ゲルクのところでは 7 人家族であったが、8 歳の女の子と嫁までが死んでしまった。この家



族はアメリカの親類・知人のところに自分たちの幸福をもとめようとしたのは今回が 2 度目であった。こうした家族はここケーラーに留まっていれば生き抜くことができたかもしれない。同様に、ペーター・アダムの家族やフィリップ・キルヒガスナーの家族もここで生活していた方が良かったであろうに、急いで逃げて極貧状態で戻ってきている。自ら進んで貧困のなかに飛び込んでいったような家族はさらにいくつも挙げることができる。

生産の豊かな国とくにアメリカやシベリアから小麦の種子が送られてきた。ペルシアからは、また収穫の良かったロシア諸県からはさまざまな食糧が到着した。春に配給量を半分減らしたアメリカの給食はいまや再び元に戻し、1.25 フントの白パンと約 1 フントの米粥を配給している。その他に、アメリカからは大量のトウモロコシがドイツ人のために到着しており、ロシア人の不満をひきおこしている。種子の供給に熱心である。耕作労働は比較的良く行われている。・・・人びとには生気が高まっているのがみられる。飢饉は大部分はおさえられている。外国の援助なしには生活していくことができない人びとの感謝を寄付者に伝えてください。1921-22 年冬の恐ろしい貧窮を私たちは乗り越えていく。しかし、貧窮はいまだ終わってはならず、すぐに終結することはないであろう。土地耕作の農器具、家畜、衣服、その他多くのものに不足している。

1922 年 5 月 18 日付 *Die Welt-Post* 掲載の手紙

[デンドルフ[ゴロボフカ、人口は一九一二年の八三三〇人から一九二六年の五〇三九人に減少]の] 私たちは [一九二一年に] 週に七〇人が、一日に三〇人まで死亡したときが何度かあった。

1922 年 5 月 25 日付 *Ellis County News* (c-3)

[ルイス[オストログフカ、人口は 1912 年の 5393 人から 1926 年の 2167 人に減少]では] 私たちはすべて飢餓を運命づけられている・・・。赤軍がやつてきて、実際あらゆるものを私たちから略奪していった。私は捕えられ、一ヶ月間極悪の犯罪者と一緒に監獄に拘留された。

1922 年 5 月発行 *Die evangelische Diaspora*, Nr.1 掲載のドイツ赤十字医師 2 人の報告および牧師の言葉

\* ヴォルガ地域で住民の飢餓と伝染病と闘っているドイツ赤十字の医師の報告。

冷たい晴れた日に、私たちは櫓で飢餓地域に入った。ヴォルガ河を越えるときにすでに痛ましい光景に出会った。小さな櫓に自分の残った財産をのせて引きずっている、際限ない人間の列である。椅子、家庭器具、小さな戸棚、それら家庭生活には不可欠にみえたものを近隣の首都サラトフの市場で売るためである。痩せて青ざめた顔をした人びと。一人の小さな娘を連れた婦人。年老いた男、彼は苦勞してヴォルガの河岸の急斜面の高台に自分の荷物を持ちあげていた。そうした人びとのあいだに、長椅子を乗せた櫓がラクダにつながれているのがみえた。他の櫓には鋤と馬鍬が積まれていた。すべては、たとえ何日間かのことであれ、飢えから逃れるために犠牲に供されるものである。というのも、市場で売ろうとされる物が多く、売ってもたいした金額にはならないからである。食糧の価格は法外に高くなっており、週ごとにさらに上昇している。400グラムの普通の黒パンはサラトフで1月に1万2000ルーブリしていたが、今日ではそれを手に入れるのに12万ルーブリが必要である。他の食料品の値段も相当なものである。都市では買おうと思えば買うことができるが、誰もそれに必要なだけの金銭を持っていないのだ。こうして人びとは、何年も働いて得た収入で買い込んできた家庭器具を捨て売りすることを強いられているようにみえる。かつての村にはわずかならずもの富があった。それが今日このような様子なのだ。以前には冬であっても良い日々があり、生き生きとした生活があったような入植地は今日では死滅したかのようである。多くの家々は見捨てられ、窓は釘つけされ、煙突と炉は冷たい。そこに住んでいた人びとは他の地方に自分の避難所を探しに出て行ったのである。しかしながら、大抵は、ここでのがれようとした死を他の場所で迎えることになったのである。他の場所で生きていく可能性を見出すことができたのは、まったくわずかな人たちだけであった。

今日ではただ稀にしか村々の通りに住民をみかけない。大半の人たちは家のなかにひきこもり、衰弱して力なく、一部は飢えから身体が膨らんでおり、多くの者が病気で、食糧不足から伝染病——とくに発疹チフス——に罹っているようである。多数の人は寝台からもはや離れられない。彼らは起き上がってドアのところまで歩いていく力さえないのだ。他の人びとは、凍害を受けたようなジャガイモ、骨、あるいは半分腐った肉片を手に入れようと、家から家へと、大変な難儀をして足を引きずりながら歩いていく。人びとが飢えをおさえるために何を食べているのか、推測することかできない。犬や猫は村々で見かけることは稀になっている。畑のヤマネズミは全部捕まえられた。多くの人びとにとっては、ヒマワリの種の外皮を砕いてつくった菓子と乾燥させたカボチャの皮が唯一の栄養源であ

る。そしてここでは、たしかに確認できる事例はドイツ人ではなく移住してきたステップの住民地域でのことにちがいないが、人食いの報告が増加している。

私たちがヴォルガ河を渡って農村のなかに入っていったときに、多くの櫛に出会った。荷を何も積まずに鉄道駅に向かうもの、あるいは鉄道駅から荷を積んでくるもの。質問してみると、穀物種子を運ぶとのことだった。政府がロシアの他の地域から集めた穀物種子が到着し、個々の村に配分されるのである。鉄道輸送における困難は遺憾ながら大きく、なかんずく機械と燃料の点で大きく、用意され積み込まれた物の一部しか予定された時に到着しないのだ。雪解けとともに道路はぬかるみ、河の流れは河岸を超えていき、橋は壊され、鉄道駅から遠く離れた土地まで運ぶことは不可能になるが、それでも穀物種子を求めてやってくるのだ。駱駝に牽かれた櫛の列が道という道をゆっくり行くのがみられる。それらは、ドイツ人地域の最後の希望、最後の期待をもつて行くのであった。しかし、話をする機会があった人びとには常に、ただ手元にあるものを播種するだけだという固い意志と、おそらくは絶望の想いが支配していたのであろう。「もしも人間が自分の手で播種しなければ、誰が大地にこれを植えつけるというのだ。」実際、多くの人は自分の手で植えつけなければならないであろう。なせならば、個々の村で役畜はおそろしく減少しているのである。・・・秋に冬穀種子が畑に運ばれたように、現在、農民は非常な努力をもって、自らの生命を救うために最後の道を行くであろう。収穫がどうなるかは誰も知らない。天候がよければよい年になろう。こうした人びとは力の限り、準備はしたのである。しかし、収穫までにはまだ何ヶ月もあり、この何ヶ月間が最悪の状態となろう。なぜなら、いまや最後の貯えが食い尽くされたからである。そして、収穫があっても、その収穫はすべての人を養うには十分でないであろう。

ヴォルガ・ドイツ人地域を、そしてこうした農民を救済するために、外国の援助が必要である。しばらく持ちこたえるかどうかの問題となっているここにおいては、個々の救済はあまり意味をもたないであろう。ヴォルガ地域の農民が救済に値するのは、飢餓と困窮にもかかわらず彼らが自分の穀物種子を当然のごとく食い尽くすとうことはせずに大地に植え付けようとしているという事実のみがそれを証明している。春蒔きのために馬を保持するという事で自ら飢えに耐え、節約した金で家畜飼料を買う人がいるということは、また、鋤と鋤をもって畑に行き、土地を耕す人がいるということは、援助するだけの価値があるということを示しており、それが間違ったことではなく、わずかな贈り物でも将来の礎になるということを保証しているのである。

\* ドイツ赤十字の代表とともに食糧、衣服および薬品をヴォルガ地方の村々で配布していたもう一人の医師の報告

18 ヴェルスタ離れているマリエンタール出身の男たちはほんとうに僅かな播種用種子を櫛に積んでいる。「あなたたちはドイツ人か」「着物はぼろぼろだ」。彼らの話すヘッセン・シュヴァーベン方言はまったく我が家にいるようであり、惹きつけられる。しかし、彼らの外見は私を突き落とす。これでもドイツ人なのか。何であれ私たち民族の同胞であるのだ。彼らにはパンと金銭がないが、彼らの外見をまともにする材料も不足しているのだ。縫い針や撚り糸を買える人は誰もいない。それらは法外に高価であり、以前にはどの家族にもあったミシンは穀物やパンと交換してしまっている。いまや私は、市場やサラトフ駅で見た沢山の大きなミシンがどこからきていたのか、分かった。サラトフ駅では、ロシアの西の地方からやってきた買い集め人によって、これらのミシンは、まったくの窮境の果てに法外な安値で、わずかな穀物とパンと引き換えに、また1個のリンゴや1個の卵と引き換えに獲得されている。買い取られたミシンは、ほぼ新品の大きいものであれば12万ルーブリで—モスクワでは3万ルーブリほどのはずある—売られた。・・・1プードの穀物は少なくとも数日間は生きながらえさせてくれる。マリエンタールはかつては1万2000人の住民をもった最大の共同体の一つであり、昨年はまだ8000人以上を数えたが、現在は4200人だけである。人びとは、飢えを逃れるために、たとえ無駄であっても、村外に移住していったり、近隣の村々へと逃げていったが、しかし、それはそこでさらに困窮を増しただけである。マリエンタールの住民の圧倒的多数は村に留まり、飢えの犠牲になったり、・・・発疹チフス—1920年以降顕著に増加している、ロシアの地の恐るべき人質——に雇ったりしている。人びとは疲れきって、ぼんやりしていて、痩せ細り、家のなかで横になっている。隣人とはすでにずっと前に最後のものを分け合っており、近隣の村々にはもはや探すものはなく、外に出れば飢えと病気で死ぬだけである。飢えは彼らの体を膨らませ、彼らは無力になり、うずくまり、みんなが一緒に身体を曲げて横たわっている。多くの人は樹皮のパンを求めて、しかし突然地地面に倒れて死んでいる。生きている人が・・・外国にいる親類に何と書いたか。「私たちはただ肉のない皮と骨だけです。」骨まで痩せ衰え、またすでに水腫症になっており、水腫によって体が膨れ、すべての人にとって死は確かなものとなっている。

この大衆の困窮、この極限の貧窮を私たちは6台の貨車の食糧だけで迎えなければならぬのか。・・・マリエンタールの共同体で物を配布しているときに、フリーデンフェルド

教区に属する二つの村エックハイムとノイ・シリングの代表がやってきて、自分たちも同じほどひどく困窮しているのに配慮がないと、厳しく不満を述べ立てた。しかし、残念ながら、私には助けることができない。というのも、共同体のための用意はあらかじめ決められていて、私はそれをすでに報告してしまっているからである。私は、在庫からこの二つの村のもっとも貧しい病人のためにと粗ら挽き小麦の一袋を二人に渡した。私には残念ながらそれ以上をすることはできなかった。私は、自分たちの共同体のために恐るべき困窮のなかで援助を要求する男たちの涙を思うと断腸の思いがする。私は、彼らの困窮を忘れないこと、彼らの助けの切願に応えたいと約束する以上のことを何もすることができない。・・・彼らはドイツにやって来ることはできない。したがって彼らにはドイツからの助けがなければならない。ドイツは助けなければならない。ドイツはその手を閉じてはいけない。その手に彼らは、死の不安のなかでドイツからの唯一の救いを見出す。他の諸民族、ロシア人、チュヴァシユ人、チェレミス人、タタール人、キルギス人などは他から支援を受けている。ドイツの義務は、自分の罪でもないのに襲いかかっている最悪の貧窮の日々にある、同じ民族の同胞を救いに來ることである。

私は、一人の村の代表を朝食に招いた。彼は冷たい夜の長い道中で体は悴んでおり、温かい大麦とコーヒーの朝食で元気を養う。食事のあと、彼はじっとして、涙をためて嘆く。

「お医者さん。これは私が食べる最初のパンです。最後に食べたパンはまったくわずかなもので、妻がクリスマスのときに私たちに焼いてくれました。」家族は何を食べて生きているのか。朝は麦粉のスープ―それは一人当たり小さじ 1 杯の麦粉でつくられる―、昼には同じような麦粉スープと一皿の塩漬けキャベツが 5 人の家族に分けられる。そして夜には再び麦粉スープ。この代表はかつては財産のある人であった。またこの日、午後 1 人の男がやってきて、一片のパンを乞う。彼は今日の朝、雪かきシャベルと交換して少しでも金を得ようと鉄道のところへやってきたのである。彼は家族ともども昨日は何も食べていなかった。この男は泣き始め、このように物乞いをするのは恥ずかしく、それでもそれを止めることはできないと言う。飢えはこれほどに苦痛を与えるのである。私は彼に出きるだけの物を与える。しかし、残念ながらそれ以上はできなかった。というのも、私たちは自分のところにあったパンはすべて配布しまっており、帰りの 3 日間はパンなしになっていたからである。

ラチョイ駅からアニソフカ駅のあいだで私は、鉄道の路盤のそばに 3 人の死体が横たわっているのを見た。そのうちの一人は婦人で、彼女のそばには小さい手押し櫓があった。

ここではどこでもちいさい物を運ぶのに使われているものである。おそらく無料の貨車から降ろされ、極度に貧しい人びとは自らのうつろな体を次の駅まで引きずっていく力をもたなかったに違いない。雪解けによってこのひどい飢饉の犠牲者を見ることになったのである。たまたま私は数キロメートルのあいだに 3 人の犠牲者を見たのであるが、こうした犠牲者はどれほど多いことであろうか。

早くに助けがなされなければならない。日々、村々では無数の人が死んでいる。マリエンタールでは毎日 7—10 人が死んでいる。ロシアの当局の代表が言ったつぎのことが真実であってはならない。「すべてを助けることはできない。われわれはただ一定数の場所しか助けることはできず、他の村々は死に絶えさせねばならない。」ヴォルガの大地は月にあるのか。不確かな鉄道事情のためにヴォルガ地方に早くに輸送することは容易ではないが、民族の同胞に援助がなされなければならない。ただちに、ただちに！ 幾千の、幾千となき人びとを死から救うために、極度の困窮に喘ぐ私たちの兄弟が、ニーベルンゲンが自分の指輪に十字を切らないように、私たちに十字を切らないように。

\* ヴォルガ地域の牧師の手紙。それは拒まれずに持ち堪え、彼の民族の将来にとって不屈の力をもって現在でも影響を与えている。

村々における状況は身の毛もよだつものである。最近再び非常に多くの人が餓死している。しかしなかならず忌々しい 3 つのもの、腸チフス、発疹チフス、回帰チフスがドイツ人同胞の無数の群れを死なしている。私は、ヴォルガ地方のドイツ人自由民の 50%がもはやいなくなっていると言っても誇張でないと信じる。援助がなければ残りの 50%も死んでいくのは確かである。もちろん、アメリカ人やイギリス人がすでに給食所を開いている。これらの人はしかし単に 14 歳までの子供たちに食べさせている。そしてこれもまだすべてではない。多くの入植地ではこの年齢の子供はすべての子供の 25%にすぎない。この数字は徐々に小さくなっていくはずである。その代わりに、年寄りや 14 歳以上の若者はハエのように死んでいく。彼らは、大抵の家畜をすでに屠殺し、食べてしまっている。多くの村では、馬の現在数を数えることは容易である。しかし、それはもはや役畜ではない。乳牛はいなくなっている。食糧はもはや何もない。すでに犬、猫、カラスが食べられている。多くの人、信じられない物——そのなかには糞尿も含まれる——で自分の胃をいっぱいにしていく。

[私たち民族の同胞のより良い未来にたいする希望はまだ消えてはいなかった。飢えの困窮のなかで彼らは自らの民族のために根本的な仕事をしようとしている。この牧師は手

紙のなかで次のように報告している]・・・5月に飢餓者の流れがますます大きくなったとき、私は説教壇から教会信徒に、これら極貧の人びとの運命を和らげることに努力する委員会をつくることを要求した。同じ夕べに20人からなる委員会がつくられた。2、3日のうちに私たちは一つの給食所をつくり、そこで1000人以上に毎日食事が与えられた。それは長くは続かなかった。そこで私たちは二つの大きな家を建て、ヴォルガ沿いに横たわっていた、埃にまみれた人びとを避難させることができた。次の仕事は、両親が農村あるいはここ都市においてコレラやさまざまなチフスで死んでしまったまがい孤児の避難所をつくることである。しかし、これは遺族ことはなかった。4ヶ月後になって私たちは或る家を獲得し、そこに130人の孤児を収容することができた。私たちはしかし、少なくとも三つのそのような家を持たなければならないであろう。20人の委員会の委員のうち13人は発疹チフスで病気になり、そのうち5人は死んだ。そのなかには孤児避難所の開設に忘れられない尽力をした教師がいる。・・・残念ながら、・・・彼は避難所の開設の日に死んだのである。・・・教師のペーター・ジンナーとエフ・コンスタンツはサラトフの第一地区の歴史の本のなかで、ドイツ語で授業を行なう完全にドイツ的なギムナジウムの創設について書いている。昨年、第一地区の教会長老はギムナジウムの5つのより低いクラスを設置することができた。この秋には第2段階のクラスを付け加え、完全なドイツ的ギムナジウムが存在するようになった。同様にコサックの都市の教会長老は今年、第一段階のドイツ人学校を神の助けにより開くことができた。そしてこの学校もコサックの都市全体で最良のものとしてすでに知られている。

1922年6月付報告 同年発行 *Wolgadeutsche Monatshefte*, Nr.2 掲載

\* 6月12日付(サラトフ)ドイツ赤十字代表者の報告

救援物資の配布、ヴォルガ・ドイツ人連合の個人物資の引渡し、ナンセンの物資の分配、4つの方向(カタリーネンシュタット地区、バルツァー地区、ゼールマン地区、ウルバッハ地区とフリーデンフェルド地区)別に配布。私の考えでは、たとえ収穫が良くて状況が一般的に改善され大量の死亡がなくなっても、収穫とともに飢えが止むとは考えられず、外国の援助なしには住民はやつてはいけない。

\* 6月15日付(サラトフ)エルンスト・ラウク博士の手紙

カタリーネンシュタットへの輸送、1日遅れた。・・・入植地の状態は一般的に最近では改善された。ただし、冬に入植地から逃げてきて、何も給付されない多数のドイツ人がおり、

彼らは入植地に戻る可能性はもっていない。・・・

\* 6月16日付（ポーランド・ロッジ）牧師オットー・エンゲルの手紙（ポーランドにおける避難民の困窮について）

ポーランドにはヴォルガ・ドイツ人の避難民が多数いる。ロヴノ、ワルシャワおよびヴィリノには多くの帰国移民が宿泊する宿泊所がある。ロッジのドイツ戦災孤児院には現在21人のヴォルガの孤児がいる。彼らは私たちの宿泊所、とりわけトゥツィンの宿泊所に宿泊されねばならない。私は今度ワルシャワに行き、そこの宿泊所を見てくる。また、この期間にヴォルニニに行き、そこで国境を越えて流れ込んでくるヴォルガ・ドイツ人を助けたい。

（こうした憐れむべき人びとは助けなければならず、しかもできるだけ早くに。ヴォルガ・ドイツ人救援連合（Der Verein der Wolga-Deutschen）はまずこの目的のために1万マルクを差し出した。しかし、この金額ではほんの瞬時の助けでしかない。それでも到着したこの救援金は運ばなければならない

\* 6月付入植地スタールからの手紙

ドイツへの君の到着、君の父親とリディアの死去について私たちは君がハインリヒ・Rに出した手紙から聞いた。こんなにも早くこのような悲しみがあるとは、君がこんなにも早く・・・父親を失うとは誰が考えたであろう。君の父親は安らかな国を望んだのであり、・・・、いまや永遠の平穏を見出したのである。・・・ここスタールでもこの恐ろしい冬のあいだに多くの人が餓死し、しばしば不気味であった。友人多くがここで死ななければならなかった。チフスで死ぬのは止んだものの、まだ流行している。1月1日から現在まで123人が死亡した。それにたいして出生者は25人である。4月に困窮はもつともひどくなり、1日に8人も死んだこともしばしばである。しかし、いまや困窮は終わっている。神は、私たちにアメリカの我が同胞による援助をもたらすことによって助けてくれた。1月にはスタールの共同体はアメリカに住むスタール出身者からさまざまな食糧——穀粉、米、脂——を300ブードを受け取った。3月には老人、病人、衰弱者のためにアメリカのルター派教会から16ブードほどを受け取った。つぎに受け取ったのは5月23日になってからで、それは再びアメリカのスタール出身者からのものであった。穀粉1697ブード、米279ブード、砂糖303ブード、脂137ブード、カカオ116ブード、ミルク2万3928缶（?Banken）。これは1人当りにすると穀粉33フント、米5.25フント、砂糖5.3フント、脂2.5フント、カカオ2.1フント、ミルク11缶（?Banken）になる。最大の家族は30ブードも受け取り、



それを馬で運ばなければならなかった。これはすでに長いこと見たことがなかった豊かさである。教会の長老がこれを配布した。毎日、人びとはそれぞれ3ブードの食糧の入った、サラトフからの荷物を持って来る。それは彼らの友人から送られてきたものであり、多くの人は一度に18ブードも受け取る。これはアメリカの友人が払い込んだことによる。こうして、人間が絶望するときには神が助けてくれる。私たちのところでは、飢えることはなくなりましたが、それでも十分には食べていない状態である……。各人はつぎの収穫が良いという期待をもって生活している。去年はあまりに少ない雨量であったが、いまは降りすぎるほどあり、それも余計なことではない。……。雑草は人が除草するよりも早くに成長する。実は喜ばしい希望がおこっている。野菜もそうである。去年には芽生えなかった種子はいまでは芽生えているように見え、カブラも播種した以上のものが生育している。……。果物は悲しむべき状態に見える。サクランボはほとんどない。多くの人はリンゴを得ているが、わずかである。多くのサクランボの樹が枯れてしまい、多くの庭は黒々としている。リンゴの樹は良いようにはみえない。それは昨年からの冷たい冬のためである。サクランボは何も実をもたらないであろう。……

\* 5月22日(旧暦)付アレキサンダードルフ(山地側)からのアレキサンダー・Kの手紙

君の2月21日付の手紙を幸運にもヴォルガ・ドイツ人救援連合を通じて受け取った。……私たちは6回手紙をかいたが、……。いまやっと返事を受け取ったのだ。君たちはロシアに戻るつもりだと書いているが、いまいるところに留まるようお願いする。君たちにはそこで食べるパンがあるが、私たちにはないからだ。私たちは、もしも金とその他必要なものを持っていれば喜んで移住するであろうが、いまいるところに留まらざるを得ない。もちろん私たちは生きている。私たちには……。食べるパンが何もない。パンを買うだけの金がない。なぜなら1ブードの穀粉が150—160万ルーブリもするからだ。恐ろしい飢饉である。幾千人もの人はすでに餓死しており、つぎの収穫までに餓死する。ここアレキサンダードルフでは、10人はつぎの収穫までパンがあるが、他の人びとはすでに1—2ヶ月間何もっていない。ここでは多くの人が死んでいる。今いるところに留まりなさい。こちらに少しの秩序がうまれたら戻ってくることを考えなさい。

私たちは古い屋敷をもっており、新しい井戸もある。実は今年は非常によく、これから害がなければやがて収穫があろう。しかし、どれだけを〔当局に〕引き渡さなければならないかは分からない。収穫の半分だと思っている。人頭税はすでに払った。1人当たり100万〔ル

ーブリ] を先週払った。ここで筆をとめることなく新しいことを書くこともできようが、それをするには許されない。

\* 6月22日付カタリーネンシュタットからの手紙

親愛なるウィルヘルムへ。君が故郷を去ってからすでに5ヶ月が過ぎ去った。ここでは多くのことが変わった。多くの人が飢えで死んだ。それでもいまは最大の困窮は鎮められている。アメリカ人が助けてくれている。1—2万プードの積み荷の産物がここに降ろされない日はない。天候も良好で、ほとんど毎日雨が降る。そして穀物は肩ほどまでに生育している。2—3週間もすれば良い穀物の収穫が期待できよう。小麦はそれほど良くはない。というのも種子がそれほど良くはなかったからだ。また春蒔きの際の土地耕作が非常に悪かった。大抵の農民は馬を持っていなかったからである。多くの人は乳牛で耕した。通りでは車を乳牛に引かせているのが見られる。当然・・・滑稽に見える。野菜や、とくにジャガイモは良好である。ただウリ畑は虫に食い尽くされている。コンスタンチンはバッタとの戦いのために大学から村々へ派遣された。彼は良い俸給を、月に6000万を得ている。彼はまた、他の支出の前払いを3億受け取っていると聞いている。乳牛と馬を手に入れるには1億5000万から2億の費用がかかる。バターは市場でフント当り70万から80万する。卵は貴重である。なぜならニワトリはすべて屠殺されてしまっており、1個7万から8万の値段である。ニワトリを買おうとすれば1羽300—500万の価格である。豚肉はもはや何も手に入らない。豚がまったくいないのである。ちいさな子豚は2千万ルーブリほどの値段である。新鮮なイチゴがあるが、1フント60万の値段である。パンは1フント当り17万の価格であり、穀物の価格はプード当り400万にまで下がったが、現在また650万になっている。布地は非常に高い。サルピンカ〔ヴォルガ下流域特産の織物〕は1アルシンが50—60万ルーブリ、更紗は80万ルーブリする。良質の衣服の値段は1億ルーブリもする。1巻きの燃り糸は35万ルーブリする。タバコを吸う人はそれをあきらめなければならない。私は毎日25本の紙タバコを必要としていたが、それは40万ルーブリする。1ドルはここでは400万ルーブリである。こちらでの状況が正確に認識できよう。

\* 6月17日付スタールからアウグスト・Spの手紙

親愛なる友よ！ 私たち家族全員がまだ元気であることを伝えよう。君たちも元気でいることを望んでいる。ここで畑の状態について書こう。穀物は私の背の高さぐらいまで生育しており、君たちも想像できようが、それでも良い状態ではない。なぜならカビ病に冒されているのがあるからである。小麦は良好で膝までの高さになっており、これから荒天

がなければ良好であり得よう。小麦は 0.75 デシャチナ分の種子を受け取り、播種した。3 プード 30 フントになる。ヒマワリの種子を取得し、20 フントを 0.75 デシャチナには種した。キビは 20 フントを 0.25 デシャチナに播種した。これだけの播種をまったく役畜を使わずに行なった。・・・保証人が保証した分だけの量を人は受け取り、役畜を持つ人はその 2 倍受け取って、2 頭の馬で他の種子とともに小麦を 4—5 デシャチナに播種することができた。馬を複数持っている人は大麦とカラス麦を取得した。大麦は役馬当り 3 プードにもならず、またカラス麦は 1 プード 22 フントである。飼料としてはまったく受け取らなかった。耕作は困難であった。飼料のない家族だけでなく、食べる物のない人間がおり、悲惨であり、言い表しがたい困窮があったるしかし、ありがたいことにわずかではあるが播種したものはいまのところ非常に良好である。天候はまったく乾燥してはおらず、大抵毎日雨が降っており、仕事の妨げになるほどである。私は義兄弟の Sch.、彼の家の人びとと一緒に仕事し、Georg F.も私たちと一緒に働く。私自身は馬をもたないが、庭の実が神の助けで成ったときには一頭買うことを考えている。私たちはしばらくは十分に食べる物を持っている。私たちはすでに 2 度、アメリカからの食糧を受け取っている。人びとはそれを喜んで食べた。穀粉、米、砂糖、カカオ、Muech、それに茶を一緒に受け取った。1 人当り 2 プードである。トウモロコシを私は家族のためにすでに約 4 プード以上受け取っている。いままで播種されていなかった土地はいまや播種され、干し草をつくることができ、遠乗りができるのだが、そのための役畜がない。私たちの村には年老いた馬、子馬、それにラクダ 376 頭おるが、望むようには働くことができにいいことが理解できよう〔?〕。馬 1 頭は「愚かなロシア人」のところで 2 億 5000 万ルーブリ、乳牛 1 頭は 1 億 6000 万ルーブリ、山羊 1 頭は 3500 万ルーブリ、羊 1 頭も同じである。支払う金はない。私たちはまた 10 ドルの ein Posilke auf dem Weg をもっている。私、私の兄弟ヨハネス、彼の夫人からの挨拶を。じきに返事をくれ。

1922 年 7 月 27 日付 *Die Welt-Post* 掲載の手紙

〔グリムでは〕昨日、15 人が餓死した。そして、毎日、食べるものが何もないので、死ななければならないのだ。他の人びとは、生きた骸骨のように路上を彷徨っている。

1922 年 7 月 29 日付 *Volga Relief Society, Newsletter*

グリム〔レースノイ・カラムィシュ〕とメッサー〔ウスチ・ソリハ〕で、そして他の多

くの村々で、大量の人が死んでいく。そこでは死体は集められ、二〇体から二五体までが共同の墓に埋葬されている。その大半は棺なしに埋葬されている。

1922年7月31日付の海底電信 1922年8月10日付 *Die Welt-Post* 掲載の記事

早く食べ物を送ってくれ。私たちを救ってくれ。ひどい飢えなのだ。馬はみんな死んだ。助けてくれ。友達すべてにこのことを知らせてくれ。

1922年10月23日付手紙(Sinner) AVRS (b-33)

あなたが彼と私の報告から読み取ることができるように、食糧不足はまだとても深刻である。私たちはあなたたちの助けがなければこの冬にも私たちの一部の同胞を餓死と凍死から救うことはできないであろう」。

1923年2月1日付 *Die Welt-Post* 掲載の手紙(b-32)

私たちのところ〔メッサー、グリム?〕では、1921年秋から1922年秋までに1600人が死んだが、ほとんどすべてが飢えからである。この数は村の全人口の3分の1であった。

1923年2月3日付の手紙 AVRS (b-34)

飢饉は今年はたしかに昨年よりはひどくはないが、それでも1923年の3-4月ころには私たち入植者の半分は再び飢えに苦しみ、飢えた人びとが死んでいる。

1923年12月1日付手紙(Klein Romanov から) AVRS (b-33)

私たちのところの飢饉は恐ろしくひどい。あらゆるものが食い尽くされた。Medde、土、あらゆる動物の死骸、犬、猫、さらには人肉。多くの人が餓死したし、身体の組織が飢えによってきわめて痛めつけられているのでさらに多くの人が死んでいる。

1923年12月5日付の手紙 (H.Hense、Stepanov から) AVRS (b-33-34)

私たちのところでは食糧不足は依然ひどく、多くの人びとのあいだで餓死の心配がいまだ広くある。多くの人には着るものもなく、履物もなく、農民のところには家畜も農具もない。

資料 2

飢饉に苦しむヴォルガ地方の親類からの手紙 (17 通) : Paul Flitzler 氏 (コロラド州在住) 所蔵の手紙 (Eike Grossmann 氏による原文ズユテーリン文字から現代ドイツ語文字への翻字)

手紙 1

Briefumschlag (封筒):

Vorderseite: Mr Carl Meisner / Greely Colo / R 2 Box 50 U.S.A. / Russisch America

Rückseite: nort-amerika russisch / Mr. Carl Meisner / russisch / Greely Colorado / R 2 Box 86 / U.S.A. / russischer Satz.

Page 1:

Seite ist am rechten Rand abgeschnitten, es fehlen ca. 3-5 Buchstaben. Bedeutung lässt sich teilweise nur schwer bzw. gar nicht erschließen!!!

Grim den 10 Januar / Im geiste kome ich zu eich mit grus u kus in / schwester lige libe, winsche ich gute gesundheit / Liebe schwester Katarina u Schwacher Fridrig (???) / von mir deiner schwester Maline (durchgestrichenes a) Mab/Mal ge. Meiß(ner) / Liebe Schwester ich meghte gerne bei dir sein u / mein herz aus schgregen, den ich wis nicht wo u / wen ich meine not glagen sol, es ist ser draur(ig) / u arm bei unz da ist nichz im leib u nichz auf de(m/n) / das sagendwo wir haten haben wir verhandelt / somer vor essagen, um das leben zu erhalten / der vorrat ist schon lank al, u schtehen auch / lakech, das wer sich den kerber nicht bedeken t(?) / libe schwester, das schiksal ist so gros, es ist / zu schreiben, es ist schwerer alz alles unklik (???) / der Welt, unser essen ist geilz vleisch, u lei(????) / in der Sub, wen ich die sub es daraus ich (???) / ???? da ich glaub mein herz Kimtraus / u mein herz ?te?t mir von ?matigkeit, / herz innich gelite schwester Katarina u auch / Karl Fridrig Elisabet, ich bite eich von / herzen seit seit doch so gut u samelt die bro(t) / broken u rifel, u schikt sie mir, ich wil / danken mein leben lan dafür, libe schwe(st)er / acht jahre bin ich verheihrat und hate noch kein(?) / Kinder u gezt in diser ganz daurigen ga(?) / bin ich schwanher schon 6 monat, da kanst

du / denken wie es mir ist, ich mechte lieber scht(er) / ben alz leben, die zeit kam imer  
neher / u ich weis nichz vor gedanken woch hin, d(?) / ist kein humger keinlumpen, u ich  
selbst hab / nichz an zu zihen

Page 2:

Libe schester Katr vileigt hast du ein (?) / getrates hemb u gar schtrinb u ein tigelge(???)  
/ auf den Rock sei sa gut u schikmir wen du / ich habe mein liztes hemb an u da sind  
scho(n) / nein u neinzig laben drauf, u der hunder(t) / veilt, da habe ich keinen zwern zu  
fliken, / unser vuswesen ist labken, wir sctehen / blos von vus bis zu Kof, libe  
schwester (wenn) / du u die elisabet wolt u kent, so schikt / bisgen liner sachen, jezt  
mache ich der b(??) / das zwei basilkan komen sind, das eine (??) / kan vaz u da andrer  
war an sader ge(??) / das hat die Emilie genomen da waren / zwei gewander zwei  
garschuh schweinen / vleish weis butter mel, u noch menges, (?) / wolte ich auch etwas  
davon da haben si(e) / gesacht vor mich war nichz dabei, (durchgestrichenes Wort) libe /  
bi??iter u schwesterm bin ich eich din / nicht meher alz die anna u mari, de(?) / veter  
jakob ist geschorben, u die Emilie is(t) / valsch gegen mich sie hat kei ne schwester / libe,  
der bruter Alliksader ist geschtorben / den 4 dezember der Paul ist schon drei g(???) / zu  
soldat u noch keine nachricht er ist wa(???) / (durchgestrichenes Wort, vielleicht: sch)  
geschorben, keine kane raten wisen / nichz von im, libe schwester u Brider schwe(???) /  
alle u schiket die brife auf meinem M(???) / sein nanen seit alle herzlich gegrist  
schwest(?) / Katarina u schwacher Fridrig Frizler u Elisa(?) / schwacher  
(durchgestrichenes E) Jakob Meiß= herzelibte Biter / Fridrich u Karl mit eiren  
familigen / grisend ver bleibe ich euhre sschwester Amali(?) / das ist der drite brif wo ist  
inschreib antwort (???) / seine

Auf der linken Seite quer geschrieben:

libe gebriter u schwestern gedenket meiner lebet wohl

手紙 2

Page 1 (封筒):

Russisch / Mr. Carl Meisner / Greeley Colorado / Route 2 Box 50 / U.S.A.

(30.11.1924)

Page 2:

Russisch / Stempel Greeley Colo Registered Dec. 20, 1924 / New York Registered  
16.12.1924

Page 3:

Left side:

geschriben im 1924 den 23 November / von mihr eurem Bruder Paul / Meißner Mein  
Anfang geschehe / im Namen gottes des Vatters / und des heilichen geistes Amen /  
gleich im anfan seid herzlich / jekriset und gekiset mit grus / und kus der libe amen  
gleich im / anfang meines Brifes wil ich / eich bekand machen das ich Eiren / an mich  
geschribnen brif vom 6 / okdober den 11 november richdich / und mit groser freide  
erhalten / und darauß ersehen das ihr (durchgestrichenes a) / noch schön gesund und  
am leben / ward welches meine greste freide / war und dete winschen wen eich / mein  
weinich schreiben (durchgestrichene Buchstaben: ad) andrefen / det so wie es mich  
velasen / hat

Right side:

(durchgestrichenes g) jertz bruder Karl und schwächerin / Amalija ihr habt geschriben  
der / bruder Friderich häte gesacht / wen ich welt da were ich schon / lengst in amiriga  
nein das ist / falsch wend ihr wist was ich / schon vihr weche (Wege) gedan habe / um  
das ich bei eich kende kome / und geht aber nicht boß ich / und mein (durchgestrichenes  
bisch) bißgen geld / ver faren und mus jedes mal / 50 werht laufen aber das ales / zale  
ich nich ich dete 500 / wehrt laufen wen ich nur / bei eich komen kende den ich / habe  
keine ruhe Dach und Nacht / aber das weil sich unsere alde / schwester so schein  
aufgefird hat / in der armut da wie ich das

Page 4:

Left side:

gehirn habe da wuste ich nicht was / ich sagen solde den weder weise / seine 2 söne  
gristijan jagob und / johanes sie sind bei mir und haben / mirß mindlich  
(durchgestrichenes s) gesacht wie es / herget zu hause so wie ir mir / geschriben habt  
so ist ales war / und ich habe ihr einen dank geschriben / wie ich das gehirn habe und sie  
/ schreibet mir nicht mir sie wird / warscheinlich beleidicht sein und / von der  
schwester Amalija / habe ich noch keine nachricht / bekommen auser die buben / haben  
gesacht sie wiren in / Kaminka der posge wer / milz und gen inen sozimlich / und weren  
schein gesund war / aleweil /

Quer in der Mitte:

und die 10 dolar habe ich bekommen

Right side:

und jezt wil ich eich bekant machen d(as) / bei uns im geschpräch war es we(??) / auf  
gedan nach ameriga da bin ich / nach Minzke gelaufen und habe (durchgestrichenes  
Wort) / nachgefragt da habe ich erfar(en) / nachsit amiriga kan man faren / wen Man  
freinde hat und si(e) / schiken eine birchschaft und schif / karden und 920 dolar da kan /  
man faren und nach sewer / amiriga darfen keine vor / aleweil und da kan ich / nicht  
faren da muste ich / wider mit betribdem herze z(u) / hause geh??en die 50 wer / und  
mus noch huldichen / wo ich bin biß es mal / auf gedan wird bei eich da / wird ihr doch  
auch weis werden

Page 5, left side:

bite ab zu geben an Bruder Friderig / und schwächern Kadarina Meißner / gleich im  
anfang seit herzlich / gekriset und im geiste gekiset / von mir eurem Bruder und  
Schwacher / Paul meißner jezt liber bruder / Fridrich du hast gefracht wie es / mit der  
Frau wer wo ich geschriben / habe und wolde sie nicht verlasen / und jezt dete ich nicht  
mir schreiben / von ihr das habe ich nich doch / schon: oft geschriben wie das wehr / ich  
habe 3 jahr bei ihr gedind / und da die armut kam und ihr / Man ist gestoben daist sie /  
und ihr bruder friderderich mit / mir gefaren und wolden mir / das geld stelen wens



mihr nich / gereicht hete biß nach amirica

Page 6, left side:

und da wolde ich sie auch nicht / velasen und da sich es so augsteld / hat da habe ich vor  
mich zu / sorchen und gan vor aleweil nicht / bei eich komen und jezt liber / bruder ich  
wil dich mal fragen / iber was du beleidicht bist / mit Mihr was habe ich den / eich gedan  
weil du mir / schon ein ganzes jar noch / nicht geschriben hast ich / denke es were doch  
nicht / schon von unß wihr haben / unß so lange noch nicht / s?gese??en und werweiß /  
könd einer den anderen wen / wir zusammen komen solden / (durchgestrichener  
Buchstabe) noch auf der weld und / sind neidich gehen einander

Page 5, right side:

Friderich Meißner / darum wolen wir uns verzeigen / und wolen leben wigebrider und /  
auch du und der bruder Karl / zanget eich Nicht und seit / brider denket das wir  
verlasen / waren von Kindheit auf wie / das ein verlorne hund und / jezt wolen wihr  
under einander / böß sein und jezt wil ich / mein schreiben schlisen und / eich nochmal  
ale grisen / mit grus und Gus der libe / von mihr paul Meißner / bite auf grele andword /  
zu rik von dir bruder / Friderich und Schwechern und eiren Kindern / P / Meißner  
/ ???men

Page 6, right side:

Jezt seit nochmal gekriset und / und gekiset von Mihr Eurem / bruder Paul Meißner  
bruder und / geschwächern und geschwistern und / schwächer samt alen eiren Kindern /  
amen und einen grus von / gristijanjjagob und johannes / Frizler und schreibt mal von /  
dem veder jagob und seiner / adres das ist meine adres / (durchgestrichenes Wort: etwas  
russisches) Russisch (insgesamt 5 Zeilen) / hofe auf grele Andwod zu rik / russisch / ade

### 手紙 3

Page 1:

Geschrieben den 16 September Neuer Stiel / Im Jahre 1924 / Geschrieben von mir eurer  
Schwester Emielie Schöffner / Gleich im Anfang meines briefes liebe Gebrüder / und

Schwecherinen will ich euch zu wissen Tun das / wir noch alle Schön Gesund sind,  
dieselbe Gesundheit / ich euch auch alle wünsche zum Grund meines herzens / Weiter  
will ich euch zu wüsen tun liebe Gebrüder / daß ich euren Geschriebenen brief vom  
Juni / richtig und mit großer freute erhalten habe, und / daraus erfahren dast, ihr mir  
ein wenig Geld / schicken wollt aber ich hab noch nichts erhalten,

Nord Amerika

Greley Colorado

R 2 Box 86 U.S.A.

Mr. Karl Meissner

Page 2:

Weiter liebe Gebrüder ich warte und (verschrieben und ohne Bedeutung?) hoffe / jeden  
Stunde um hilfe von euch den ihr wist es doch / auch daß es wieder sehr arm ist bei mir,  
und verdienst / ist auch gar nichts da, und es ??? ??? auf den Winter / hein die Mädchen  
misten Süßwerk haben und es ist / nichts da aber auch kein lebesmittel. es ist noch  
nicht /

alles; aber ich muß alle Tag hören, (verschrieben und ohne Bedeutung?) Ihr dent den /  
Goste und der Male Schiken, und daß ist mir so / gränghaft weil ihr Mann jeden Monat  
50 Rubel / ferdind bei der Miliz, und ich ahrme Witfrau nicht / weis nichts wie ich meine  
Kinder durch bringen soll / und kann

Page 3:

3 ?? / Liebe Gebrüder Friedrich und Karl / seit so gut vergest mich nicht den ihr wist / es  
ja auch daß es wieder sehr Arm steht / zum Schluß seit noch vieltausendmahl gegrüßt /  
und geküst, Nemlich Gebrüder und Schwecherinen / auch einen Abartigen Gruß und  
kuß an Schwacher / Friedrich und Schwester Katerina / Bittet sehr schnell etwas zu  
Schiken Age-Adc- / Briefschreiber war Emanuel Geide-vater Alegander / bei den wo der  
Friedrich gearbeit hat

Auch ein Gruß von mir / (ist nicht wirklich zu identifizieren, könnte lateinisch sein).

手紙 4

Page 1 (封筒)

13. russisch / Nord-Amerika / Mr. Carl Meisner / U.S.A. / Greeley Colorado / Route 2 Box  
50

Page 2, front, right side:

Kamenka den 25 Nofemper 1924 jar / gelibte Frieda, nemlich / Schwacher Friderich  
Frizler mit / vamilijen, und Schwacher Friden / rich Meiser mitt vamilijen, und /  
Schwacher Karl mit Seiner vam- / ilije, gleich im anfan mei- / nes Brifes Libe  
(durchgestrichener Buchstabe) Schwecher / und Schwecherin grisen wir / eich von  
grund unzres her- / zens von mir eirem Schwacher / Konstantin und Schwester / und  
Schwecherin Amalija Mab / wir sint noch schen gesundt / und winschen eich die selbe /  
gesuntheit von grunt unsers / herzens, weider machen / wir eich bekand das wir / von  
eich schen 3 Brife bekommen / haben, einer fon Schwacher / Friderich und 2 vom  
Schwacher / Karl, wolden aber (durchgestrichenes Wort) ????

Page 2, back, left side:

beantworten Bis wir das / gelt bekommen heten jezt nachdem / wir das gelt nemlich von /  
eich an uns geschikte 33 dolar / erhaldden haben an 20 Nofember / so beantworten wir  
ales zu- / samen, vor alem ir unsre / gelibden Bringen wir eich / unsren innichsten  
dank wir / eire woldat und Barmherzich- / kait woh ir an uns Bewai- / sen duht in  
(durchgestrichener Buchstabe) unsern grose / barmit, ja wir verschprechen / eich es nih  
in unsrem le- / ben eich zu vergesen, und / weider vracht ir uns wer ins / Konrats Haus  
wonen ducht / doch wohnt die Annah und / Marija noch darin, und dase- / lbe haben sie  
auch iren / garden zurik Bekomen wail

Page 2, back, right side:

No. 3 / sich in im jare 1921 von hunger ferkaufen musten, und / vraht ir uns wie es mit /  
der Schwester Mila iren / Kintern schdeit, was dei / alste und jingste abelangt / dennire

bedreiben ist guht / und anschdendich und / kkand inenen auch sir gefar / lich vor das  
ire Muter / solches gebasirt ist aber / was kenen Kinder machen / aber was die zweite  
doch / ter ist etwas nachlesicher / in alen schdiken, aber dee ist / ja auch noch jung und  
dum, / die Schwester Mila doch nicht ganz zu vergesen / den ich war unlengst Bai ir / so  
kont ich erfahren das

Page 2, front, left side:

No 4. / es sir Traurich mit dr schdeit / ir leensmittel waren noch / zar Kardofel welche sie  
gern / det hatt (beide t sind seltsam durchgestrichen), was anbelangt / wan der gewal  
ins dorf / viren kan ich keine glare / antwort geben nur so / u?ait wieh ich weis sol / das  
im Komenden Frijar / geschejen, den dei Regirung / arbeiten lasen um das, das / die  
Menschen gelt verdinen / kenen wail keine brude / war, aber vor jezt ist / das noch nich  
gemacht, / und was anbelangt mit / dam guten woh es noch / geben kan in Ruslant und /  
mit dem das ir denkt / wider in doch heimat zu / zuhen doch meichte ich eich

Page 3, front, left side:

No. 5 / raten noch bisjen zuwarden / den meiner meinug nach ist / es doch in amiriga  
noch / beser wieh hir in Rusland / ob das wol unsre greste / vreide wier eich zusechen, ob  
/ zuvor auch unsre greist hofnug / ist das es noch gut sol wer / den, abeer doch misen  
noch / 3 oder 5 gute jare komen den / man mus sachen was der Men / schheit im  
fergangen jar erwor / ben hatt geit in disen jar / wider ales zugrunt, worüber / wobt ir  
wissen und gegleich / bidet ir uns den geraden / nich zuferkanden, damit / sint wir mid  
eich gans / einfershdanden, nur miste / der garden neije umzumig / haben wen das  
nicht geden / wirt doch wirt er zugrunde

Page 3, front, right side:

No. 6 / grijen wir aber aus (durchgestrichenes Wort: aus) / unsre graft kenen das / nicht  
machen, und ale / die wes d??no noch Lebt / die Lebet noch und wont(?) / noch in Zarizn?  
Und wih / es ire geit kan ich eich nicht / schreiben, vom Schwacher jacob / seiner  
vamilije kan ich auch / nicht vil schreiben wail wir / nicht in grim wonen und / ire

vamilje verhetnisen / nicht genau kenen, nur seine / Muter sol noch leben und / seine  
(durchgestrichenes Wort: Muter) Brider leben / auch noch nur sint sie / gdeilt  
(durchgestrichenes Wort) ire muter ist / bain Sander und Friderich / deih andree zwei  
sint alein, / und wie es Bei (durchgestrichenes Wort oder nur verschrieben: uns) / geit,  
(durchgestrichenes Wort oder doppelt geschrieben: es) geit in disen

Page 3, back, left side:

No. 7 / winder wider Krach arm / nun aber so wie im jar / 1921 it es Baweiden nicht /  
brot haben wir doch imer / wen auch mantjes oft velt / so kan amn sich doch be- / helfen  
den wir sint die / armut schon gewont / aber durch eire hilfe / hatt doch die greiste / noth  
geschdilt den / Brant haben wir uns / angeschafft welcher selbst- / verschdentlich ser  
deijar / war in disen herbste / aber doch werden wir / nich ganz durch weichen, / es hat  
in disen herbste / so zimlich frih eingewi- / ntert, nachden forts / wider gerechnet und /  
der schnei ist wider so

Page 3, back, right side:

Zimlich all weggegangen, / und nachdem war es sir / Kalt so das man / furcht haben  
mus / das das korn not / geliten kkan haben / so wil ich mein / schreiben schlisen so / seit  
nochmal gegriset / und im geiste geki- / set von mir eirem schwa- / ger und  
Schwesterman / eirer schwecher und schw- / echerin mit eiren ?ann / lijen, ich eire  
schwester / und schwecherin amalije / lure ale d???? mit / Senzucht auf ain B????- / ter,  
unsre attwese / russisch (4 Zeilen)

#### 手紙 5

Page 1 (封筒):

Russisch / Nord Amerika / Mr Carl Meisner / Greeley Colorado / U.S.A. R. 2. 13 G 82

Page 2, left side:

Geschrieben den 24 Mai im jahr 1925 / Gott zum Gruß und den Heren / Jesu Christi  
zum Heihland / amen gleich in Anfang / unsres Briefes seit herzlich / gekrübet von uns

allen / Nehlich von mir deinen / Vetter Friedrich und wes / Kret wir sind noch gott sei /  
dank gesund was wir euch / auch wünschen Beten euren / an mich (verschrieben mit s  
dann ch darüber geschrieben) geschriebene Brief / Brief den haben wir mit / groser  
Freude erhlten / aber es war uns ser / leit das wir hören musten / das du krank bist wir /  
beten wünschen das dich

Page 3, right side:

2 Seite / Unster schreiben bei guter / gesundheit andrefen tut / Lieber Karl du schreibst  
du / wirst Krank du känst und / nichts schiken wen du nicht / kanst das ist kein mus du  
/ wirst nicht können und die / andre werden nicht wollen / aber wir sagen Dank das / du  
uns doch geschriben hast / aber lieber Schwesters ??? / es hat uns ein groses unglück /  
betrofen wir haten noch fin(?) / einziges geligen und das / ist uns die vorige woche /  
geschtolen worden wir / waren recht arm aber / jetz sind wir 3 mal / ermer

Page 3, left side:

3 Seite / Nun so wollen wir unsrer / schreiben Schliesen seit noch / mal gekrüset und in  
geiste / gekist und wir lassen auch / deine geschwister mit ihren / Familigen krüsen und  
auch / den Friedrich mit seiner / Frau und kindrer und / wünschen euch alle das / bester  
wohl ergehen / und je auch einen gruß / von der wes bete an euch zwei abartig an / deine  
Fra uund an deinr / Frau ihre muter den

Page 2, right side:

4 S / deine Frau und die wes / bete sind doch halb / geschwister und jetz / auch einen  
gruß von / mir (durchgestrichenes Wort) deiner halb / schwester Eva und meinen / Man  
Karl Erdman / wir wünschen dir die / beste gesuhndheit und das beste wohl ergen / und  
auch ein grus and / die Katarin flisabutn / und Friedrich mit iren / ganzen Familie bitte  
/ auf baldige andwort / lebet wohl

auf dem Kopf geschrieben:

Lieber Karl geb doch das Blege / den Vetter Jacob in die Hende

手紙 6

Briefumschlag (封筒):

Nord amerika / russisch / Carl Meisner R 2 / Box 50 / Greleez Colo

Page 1:

geschrieben den 4 Merz im Jahr 192(3/8) / Lieber Bruder Karl und amalie gleich im  
anfang / meines Briefes will ich euch bekandmachen das / wir noch schön gesund sind  
welche gesundheit die wir / euch von herzen winschen, und auch bekandmachen / das  
wir euren Brief bekommen haben und wir / waren ale so fro das ich euch die freude nich /  
schreiben kan. Lieber Bruder Karl ich danke / das für das gelt das ihr uns nicht verge- /  
sen habet den wir waren gerade so verdich / den wir haben gerade noch ein bieschen /  
hirsen und da kend ihr euch denken wie / es da geht bei uns lieber Bruder Karl / ihr hat  
geschrieben das ihr gelt schiken h (Verschrieben) / wohlt und auh einen herzlichen dank  
für / das gelt den wir werden es euch auch belonen / wen es hir auf der erde nicht  
belonen keinen / so wird es im himmel sein seid doch so / gud und fergist uns nicht den  
der / gott im himmel wir(d) es schon machen / Lieber Veter Karl ich will euch  
bekandmachen / wie arm das es hir in grimm geht die leude / sind ale fast ale  
geschwolen wie im / 21 Jahrgang, und dan komt vast ale monat / gelt von amiriga zum  
austeilen vier / die armen und da tun sie es den armen / gar nich geben da komt ??? nich  
an

Am oberen Ende der Seite:

auch einen gruß an den Friedrich Sch?? und seine / Frau kent ihr im sagen Lieber Veter  
Karl

Page 2:

die armen wen die armen Leuten hin komm / wo sie es austeilten und da stehen die  
leuten / in zotel und weinen sich so aus und da / sagen sie das ist vir die armen gar nicht  
/ gescchikt worden und da geben sie ale den / bauer, die die wo ales genug haben und

dann / seid doch so gut und sagt es den leuten / bei euch das wen jemand etwas schiken /  
wollen da solen sie an ihre Freunde schiken / den wen sie es so vordschiken wie es da /  
geht dann bekommen sie nichts davon sie / geben es ihre gunen den sie sagen die /lu  
(Verschrieben) leuten in amiriga die haben den somels / Schmis veter hanfridrich gewelt  
zum austeilen / und den lefles heinrich und die geben es / dan ihre freunde und ihre  
gunen und dan / sagen sie genden damit machen wie sie / wolen Lieber Veter Karl und  
wes amalia / jetzt will ich mein schreiben schlisen zum / schluß seid noch einmal  
gekrüst und geküst von / mir deiner Schwester Emilie Schäfer und auch / einen schön  
gruß von uns Kinder an euch Veter Karl und wes Amalia Berta Frieda und / Emilie  
Schäfer heisen wir so unser nader / das ist vir Karl Meißner wir hofen auf / Baldige  
andword d ade ade Lieber Bruder Karl (unleserlich, da halb abgeschnitten)

Page 3:

geschrieben den 1 Merz im Jahr 1925 / Lieber Veter Friedrich Jetzt einen schönen gruß  
und / kuß von mir deiner Schwester Emilie Schäfer, und einen / schönen gruß und kuß  
an eure Kinder von uns halbge- / schwister BertaFrieda und Emalie Schäfer / Lieber  
veter und wes Katarina jetzt will ich / euch bekandmachen das wir noch ale schön  
gesund / sind welche gesundheit die wir von herzen / winschen. Und auch  
bekandmachen das die anderen / sich schon ale abnemen lasen und gerade ihr noch  
nicht / und dan deten wir ???hen biten das auch ihr euch / abnemen lasen den wir haben  
eure Kinder noch / nicht gesehen und schreibet doch einmal wie euere / kinder heißen.  
Und wir deten auch uns abnemen / lassen den wir haben das geld nicht dazu den / bei  
uns mus man für 1 Kerdchen geben 50 Robeken, / und das ist gar nicht viel wen es man  
hat, / aber wir haben das noch nicht und wir denken / das ihr ganz bese sei weil wir  
nicht schreiben / aber ihr breicht nicht bese sein wir haben schon 2 / Briefe geschrieben  
udn haben noch keine andword / und dan ist die adres nichts ?i? und da haben / an den  
veter Karl geschrieben und von / dem g bekommen wir gleich andword / und wie wir den  
Brief bekamen waren wir / ale so fro das ich eich die vrede nicht / schreiben kan und  
dan waren wir bei



Page 4:

der ????ls wwes lawise und wolten die / adres und dan hat sie nicht geben und konden /  
wir euch nicht schreiben den wir haben / keine adres zu schreiben und so schickt uns  
eure / adres das wir schreiben kenem / Lieber veter Friedrich und wes Katarina wir /  
teten euch biten das ihr uns etwas helfen / solt aber went ihr kent und wohlt und / jetzt  
will ich bekandmachen was wir gar nicht / haben zum leben wir haben auf 4 Selen 1  
Wagen / vol Kardoffel und 5 Kroben foll K??? und bis / die weinacht wie wir in den Keler  
/ kamen waren die Kartoffel ford bis auf 3 Knolen / und auch das Kraut bis auf 5 Malzu  
kahan / und dan kent ihr eich denken wie es da geht / Lieber Feter Friedrich und wes  
Katarin Jetzt will / ich mein schreiben schlisen zum schluß seid / nochmal gegrüst und  
geküst von mir deiner / Schwester Emile Schäfer und auch Kruß / und Kuß an eure  
Kinder von uns Kinder / Berta, Frieda und Emilie Schafer vergest / nicht die adres zu  
schiken, wir hofen / auf baldige andword bit?alz genau / Bruder Friedrich und heft uns  
etwas / den wir haben wweiter keins als / euch und gott im h himmel / wir denken  
immer an euch T Tag / und Nacht, (Name auf Russisch?)

手紙 7

Page 1:

geschrieben den 26 oktober im jar 1924 von / mir Euhren Freund und Brunder Paul  
Meißner an / eich gebrider und geschwistern und geschwächer und / geschwächern samt  
eiren Kinder gleich im anfank / meines briefes seit alle herzlich gekriset von / mihr mit  
grus und Kus der libe jezt liber / bruder wil ich dihr bekand Machen das ich / deinen an  
mich geschribnen brif richtich und mit / groser freude erhalde habe vom 12 sebdember  
/ und daraus ersegen habe das ihr noch am / leben und gesund ward welches meine  
greste / freide war und dehde/duhde wischen wen eich mein weinich / schreiben  
andrefen duht so wie es mich verlasen / hat und jezt liber Bruder Karl du hast /  
geschriben du häst mihr einen brif geschickt / und häst vil von zu hause geschriben /  
aber den brif habe ich noch nicht bekommen

Page 2:

aber lieber bruder das weis ich ales das habe / ich mindlich gehird den dem Feder Weise  
sein / gristijan jagob und der johanes die sind bei / mich gekommen den 10 okdober und sie  
/ haben mihr ales gesacht wie sich unsere / geschwistern rundreiben abardich die  
Emilihe / das sie sich in ihren alden dachen (Sachen?) anfiren hat / lasen da kanst du  
dihr denken wie mihr / es war wie ich das gehört habe das war / mir so als häte mihr  
einer durs herz / geschtochen das ich vor schmerzen weinen / must weil wir denken sie  
teten ver / hungern und die alde kuh kann nicht / vor sich aufkomen und hat sich an /  
firen lasen noch von so einer roznas / und so ein Kringele/Ringele das man es nicht /  
glauben wil du wist in schwilich kenem  
(auf dem Kopf stehend:) schreibt mir mal ob ir das bodred bekomen / habt von mihr

Page 3:

????? der hat / seine frau und ist 26 jar ald und sie / ist so dum und hat sich abgeben mit  
im / aber ich hab ihr nein grus geschriben und / habe ihr geschriben das sie meine  
schwester / nicht mihr ist und die amalija ist im / ??? mit irem man und get ir so /  
zimlich gut Kinder hat sie keine ir sind / schon 3 gestorben und liber bruder das / geld  
die 10 dolar von dir die habe ich bekomen / am 22 Okdober und bedanke mich dafir / den  
sie waren mihr nedich gewesen und du / bruder karl hast gefracht ob der bruder /  
friderich noch nicht geschriben hat und er / were beß gewesen weil du das geschriben /  
hast ich habe schon lange keine nachricht bekomen / von im schon von janujar monat an  
habe / ich den lezten brif bekame fon im er ist war / scheinlich

Page 4: (Seite ist nur halb kopiert, Sinn lässt sich nicht entschlüsseln, rechter Teil fehlt)  
auch beß mit mir und du liber bru(??) / ich bide eich aber mich braucht ir e(???) /  
schdreiden und beß zu werden ich hra(???) / das der bruder fridrich seinen Kinder (???) /  
brot aus den ????? sol und so / mir schiken ich gestehe eich die warhe(it) / ferlange das  
geld von eich weil / gern bei eich wir und vor mein verd(inst) / kann ich nicht zu eich  
komen da denge / wan ihr kend da kend ir (Schreibfehler, ausgelöscht) helfen / das ist so  
man weis nicht wid seit (???) / Mahen auf gedan das man haren d(???) / das ich nicht  
wider sigen bleib den / mein geld kann ich nicht varen und / ihr Aber nicht kend das

lezte b(???) / ferlange ich nicht von eich (???) / bruder Karl das sache dem bru(der) /  
Fridrich aber oder der kann auch de(???)

Page 5:

selber lesen und zanket / nicht mit einander es ist / fleicht gottes wile das / ich noch zu  
euch komen / kan dagebe ich euch / ales wider zurik amen / zanget nicht bruder / zanget  
nicht und schr? / mihr und / fergest nicht an mich / zu schreiben ale den / ich bekomme  
keinen brief / von keinem alswan dir / lieber Bruder Karl / und danken dir davir / von  
grund meines / herzen weil ich doch / noch einen bruder habe /

Page 6:

und jezt will ich mein schreiben / schlisen und euch noch mal grüsen / mid grus und Kus  
der liebe / ale freiden und ?st?den / aberdich Karl und deine / frau amalija und die /  
schwester katarina und / Fridric Frizler mit / iren Kindern und Elisa- / bet mit irem  
jagob / sie solen mir doch auch / mal schreiben amen / ade hofe auf bal- / dige andword  
zurik / amen oder auf das / frohe widersehen

手紙 8

Page 1:

Libe Schwägern und iehrd Schwagern / von mihr Katarina Meisnern jezt wil / ich eich  
bekand machen das Mein liber / Man baul gestorben ist den 14 Juli / den Abend um  
Sieben uhr libe Schwägern / und Schwagern ich kan eich mein Schm- / ärz nich  
schreiben ich weis nicht wo / ich mich hin wenden Sol Mit Meinen / Kindern ich denke  
der libe gott der / wo alles in seiner hand hat der wirt / Miehr auch einen weg zeigen  
sein Kran- / heit wahr schwär er kont drei dage nicht / Sbregen das wahr miehr so  
schwär / weil er miehr kein rath geben kont / er wahr erst in balzer (地名?) die haben im  
versprogen / sie wolten in heilen udn wolten in auf ein Mohnd auf den Kohrort (Kurort?)  
schiken / er hat Lungen Fäler und wahr auch

Page 2:

so recht krank er hat Kabdihus Krankheit / er sagt libe frau ich bin sterbens krank / ich hat noch nichts auf der welt gutes / gutes erst sind Meine Eltern so frieh / gestorben Mist ich immer under di frem· / te wihr hatten zwei Kinder wie waren / auch so lank krank und gestorben / das lezte ist in vergann Sommer gestorben / das wahr Mihr so Schwä da Mus ich imer / sagen was gott dut das ist rechd gedan / der wiert Mihr ein weg zeigen da / wil ich mich an eich wenden alle der / baul sagt doch immer Meine gebrider / und geschwistern und Schwagern die / lassen mich nicht verhungern und die / hofen hab auch ich iehr dät Mich nicht / vergessen die 2 Kindern sind doch noch / so klein das ich (a; Schreibfehler?) nicht arbeiten kan / der baul kond den Sommer nichts / Schafen er hat immer die hofnung

Page 3:

bis in die Ende da kan ich vileigt / schaffen aber es gankt nicht es hat / keine Einheite da kan ich auch nichts / bekommen die lezten daler haben / wiehr erhalten da wahr der baul / noch bei verstant nohrt (Dialektal für nacher oder später?) kan Man nichts / Mit ihm anfangen da wahr er so fr?? / es wahr auch alles al wieh es kroten / da hat er so verlangen nach rosine / Sub da hab ich im ein kilo genomen / und habs im gekot er kont aber nichrts / davon essen 2 kilo weis mel und 1 kilo / zucker und 2 but 10 bunt Schroht Kornschroth / das wahr alles fiehr die finf daler / er ist gleig gestorben da Must ich kleig 12 bunt verkaufen das ich in bekleiten / kont under die ert ich hab in bekraben / lassen alzt ein Mänsch udn hab auch / den dräger brei und hafr gemacht da / werden die Mänschen in kästen auf den

Page 4:

Fridhof gefaren ich hab im auch leigtveth / gehalten lassen vom Lidwig Schmahl / sein dächt wahr ich hab dich zu und zu / gelibt darum hab ich dich zu Mihr / gezogen aus lauter libe das liehd was / gott das ist wohlgedan libe Schwägern / und gebrider und geschwistern das wahr / meine greste freite das ich in grihtlig / bekraben kont da werden so vile bekraben / kein klank kein gesang er wahr / alt 32 Jahr 11 Mont er war noch / rehd Schwarzund hat noch keine / ?aufe ha?en er wahr doch noch zu / jung er wär

doch noch gern bei uns / gebliben bis die kinder gros wären / das ist mein groser die  
Scheidung dut / doch zu wäh zu in der Schwären zeit / woh uns der libe gott nei versag  
hat / wiehr dänken es ist ein gericht das komm / vom libe gott das wirt noch vile  
Menschen / kosten das brot lernen wihr nicht Mier

Page 5:

ich wil eich auch Schreiben was ich noch / wiehr mich hab 1 Kuh und ein Sägen / und 3  
hiner ich hab aber kein ausweg / zu futer ich weis nicht ob ich es behalten / kan wen ich  
es verschafen Mus da stet / Mihr nichts vor augen wieh das ver / hungern die leit woh  
eine Kuh haten / die leben nocch und sind nicht geschroben / das ist doch auch schwag  
das glat Man / nicht geklaubt das Mänschen leben keinen / ?ie Mähl dieh Menschen  
sind nuhr noch / dieh gestalt iehr liben ich hätte eine / bite an eich Seht doch Mehl nach  
Mein / bruter und Vater iehr hat doch Mahl / geschriben in den ersten jahn iehr wart  
( bei im gewesen und er wär von im / weider mein mein bruder der veder Schreibt / sig  
Mardin Schmit mein bruter alg- / sander Ruhl von Kraht wen iehr / in aus gemacht habt  
da kan er Miehr / Schreiben siner Schwester Kadarina Ruhl

Page 6:

Vileigt kend (zwei durchgestrichene Wörter vielleicht: iehr er) sie miehr etwas / hilfe  
leisten das ich doch mein Vieh nicht / verschafen brauch das ich leben kan und / nicht  
hunger sderben brauch der hunger ist / doch zu schwär ich Mach mig ?roh ???eh / ich wil  
hi??enten da seh ich nichts / als dausent noth ein jeder hat sein / kreiz in hänten und  
sein leschiden dränen- / brath es dut gahr weh unt kranket / Sehr ach wen ich nurh im  
himmel / währ ich und Meine 2 kinder Sint noch / gesund und dät Mich Freiehn wen  
mein / Schreiben eich al bei Schener gesundheit / andrefen dat Seid härzlig gekrist und /  
im geist gekist al so wiehr ier seit / auch ein Kus von eire Schwster Emilie / sieh hat  
auch vom gamar geschafft bis / sie vom felt heim faren bei der hiz ist / es schwehr one  
Essen zu sein adjelebt / wohl auf Schnele andwort zu / rik

Page 7 (封筒):

Russisch / Nord America / Carl Meisner / Greely Colorada / U.S.A. R. 2 Box 113 /  
U.S.S.R / Russisch / Russisch

手紙 9

Page 1:

geschrieben d 13 November 1932 / von uns Euren Freinden Bruder / und Schwächern  
und unseren Kindern / Paul u Kadarina und unseren 2 Kindern / Frida u Fridrich  
Meißner jezt einen / herzlichen grus von uns an euch ale / so wied ihr im amiriga seid  
jezt / libe Freinde wolen wir euch bekand / machen das unser jüngster son am / 31  
ogtober beerdicht ist worden der / war 11 monat aldt seine Krangheit / (war) der Blaue  
husten jezt sint wir noch / zum 4 unser 2 kinder sint ein Magtgen / und ein jung die  
Frida ist 7 jahr / alt der Fridrich 9 jar das ist unser / familige und vor diese zeit sind /  
wir auch Gott sei Dank so zimlich / gesund ich war hart krank gewesen / so das ich  
es ??? hat gäben aber / es get wider so zimlich hard darf / ich noch nicht arbeiten und  
auch wen / ich mich verstillen dun da duht mich / so wen auf der brust und mus / so  
husten der dokter hat mir an / befolen buter u Eiher und ram

Page 2:

und Milg und weismel iberhaupt / leichte Kost zu esen aber das was vor / jezt bei uns  
nicht meglich ist wir / haben unser Kühen das aber was / es gibt das borgen wir  
gleivel/gleiwel / war auch zu meiner gesundheit aber / ????? das kan ich nicht machen /  
den es ist nicht mir so wie es war / wir wiren vor wen wir brot esen / kenten aber kott sei  
dang und / auch eich libe Briter und Schweger / und ale so wist ir sei fir die 10 / Dolar  
die wo ir mir geschickt habt / die sind vir uns so wichtich das ich / eich nicht dangen  
kann genuch davir so / sted es bei mir ?????? / und will ich eich bekannt magen das / wir  
es richtich und mit groser freite / erhalten haben und wie und was gestern / den 12  
November kam ich von saratof / und hab es geholt ich hatte das ??? / ge von Moshau  
geschickt grot da habe / ich es wider zu rigeschickt und hab es / ??? ??? laufen nach  
saratof in den

Page 3:

???? das ist eine La??? da kan / man Brodugte bekommen wir die dolar / da wird ales hin geschickt von draus / da hat es 5 Wochen gedauer bis ich / es wider bekommen hab von mosgau jetzt / habe ich es geholt in saratof an mel da / habe ich 5 ??? weismel und 10 fundt / sandzuger vir die 10 Dolar das mel ist / 3 rubell 52 Kobeke das but (=Butter?) der zuger / ist 45 Kobeke das fund aus der ??? / die wo von amiriga Dolar geschickt grin / aber wen man es so kaufen will bei / uns ist das mel 150 rubel das but und der / zucker 10 rubel das fund da kent ir / eich denken wie man leichte Kost esen / kan wen man grank ist und jezt libe / brider ir habt geschriben ir hate der / schwester Mila auch 10 Dolar geschickt / den brif hat sie schon lange aber das / geld da bekand sie nichz noch / kein ??? und garnichtz vileicht / licht es auf ein blaz fest oder was / mel das so lange dauger unser arbeit ist / kolektiv da bekom ich 2 fund brott

Page 4:

und ein fund mel den dach das ist / unser esen und das was wir verdinen / und 8 rubel geld habe ich schon bekom / da arbeite ich schon fom 26 Juli an da / ist das ales was ich bekommen habe fir / (Schreibfehler) meine arbeit da kend ir eich denken / wie das lebe get im garten haben wir / 6 satt kardofel geernd im ????? / riben und ??? das wir / gekocht bei uns von der schwester / Male habe ich 70 fund ??irse geschickt / griht das ist unser esen von brot / baken wissen wir schon von 10 mon- / at nichz der Male get es so gut / sie sachte ??? uns auch so arm / gent da hete ich sie auch nicht wegese(???) / im 21 jar da haben wir immer geschri- / ben aber jezt dengt man so wenich / daran da haben uns recht hat ge- / weind Mit einander wie ich es ihr / verzeld habe das ich ein brif bekom / habe von eich und 10 Dolar und was / ir geschriben habt das schon so lange kein / brif von uns von daheim da hat sie / das gesacht da haben wir uns sat / geweind iber unser alem (hier endet der Brief, das Ende fehlt)

手紙 10

Page 1, Right side:

geschriben im jar 1933 / 28 November von mir Katar- / ina Meißner an eich libe /

Schweger Fridrig und Kal / und schwegerinnen Katarina / und amalia gleich im anvan /  
meines brifes will ich eich / bekand machen das ich noch / geßund bin disebe gesun- /  
heid winsche ich eich auch / wie mir liber schwager / kal deinen brif du geschriben / du  
dedest uns zen 10 daler / schiken mir und der schwegern / emilie der brif war an / mich  
geschriben und geadre- / sird an die emilie das basd / mir nicht wend ir an /  
michschreibed so adresird / in auch an mich den die / emilie kam nur bei mich / und ich  
habe den brif / gelesen und da hade sie / auch wider mid genomen / das habe ich schon  
wider / fergeßen vom wiweldem / er geschriben war mein

Page 2, Right side:

Gedechtnis ist so schwach / iber des das mein man / gestorben ist wen ich / mich nei lase  
da meine / ich ganicht das es nur / sein kende das der paul / tot sein kende die Frida / ist  
auch krank hat Froht / und hize sticht auv dem / bukel und auf der brust / da habe ich  
engste sie / habe auch feler auf der / brust den ich habe drei / burse gehabt hatten alle /  
drei lungensindung gehabt / da sind zwei gestorben und / ein ist geheild der Fridrig / ist  
jetz gesud aber die / Frida ist schwach und ich / hede doch gerne wen sie / am leben  
bleiben deten / weil sie irem papa / so enlich sehen und er / hate sie ser gelibet da / sagte  
er oft wen ich nur / so lange lebe bis sie gros sind und hade /

Page 1, Left side:

immer so gesorgt fir sie / da sagte ich zu der Fride / mein medchen du dedest / wol gerne  
sderben da / sagte sie was soll / ich den machen wen / ich sterben mus da / kome ich bei  
mein papa / da ist mir so schwer den / meine kinder sind doch mein / kraft das ist eim  
schwerer / winder du schwager karl / du hast doch geschribed du / hedest uns den 10 juli  
5 / daler geschikt die haben / wir erhalden und hast / gleich wider 5 daler ab / gesended  
habe ich noch nicht / bekommen und hedest 10 / daler ab geschik der emilie / 5 daler und  
mir 5 daler / das haben wir auch noch / nicht bekommen das kan / ich nicht verschten das  
wir / nitz bekommen dun beider / emilie ged es dochnoch / die hade edwas mel bekommen

Page 2, Left side:



wo sie gearbeided hade ich / konde nicht arbeiden den / meine kinder sind noch / so klein  
kann sie nicht / alein laßen da mus vrü / und schpet arbeiden die / emilie ist bei irem  
dochter / man da ged es beser der / arbeided in der sa?wad da / ist die berda daheim /  
aber ich bin jetz alerwegen / alein mein paul weld / jetz ist der winder da und / wise ich  
nur ein schtik / holz verschneiden wil da mus / ich eins haben wen ich / daran denge wie  
der / paul alles magen konde / kond sein im holz oder / im blech oder im eise / nichtz war  
im ferborgen / was seine augen gesen / haben das haben seine henden / gemacht das ist  
aber meine / einzicher kraft gott will s / machen (durchgestrichene Zeichen unleserlich) /  
das die Sachen gehen wie es

Page 3, Left side:

Heilsam ist das lid 505 es / war grade auv den sondag / abend da habe ich mit fil drenen  
geschriben. / liber schwager karl jez / will ich dier mein bruder / ferdeischen mein vader  
/ had heinrich geheißten / meine muder Maria elißabed / dan mein bruder  
(durchgestrichenes Wort) / wo in ameriga had alleg- / ßander dan amalia / dan heinrich  
dan dawid / dan Maria dan ana dan / lidia dan (Strich davor könnte 2 oder 1 sein)  
kadrina das bin ich dan Emilie dan / julie das ist die jingst / die hade er noch nicht gesen  
diese zwei jingste / geschwißter sind gestorben / weil wir in Minzge / waren da bin ich  
die jingste / da kann Mein alde bruder / sein he(r)tz brechen und kan / mir auch etwas  
schiken / wen es nur 5 daler / sind wend ir in auf

Page 4, Left side:

Gevunden habt da sagte / im ales den meine kinder / freiensich auf die weinacht / wen  
wir geschkt grechten / fon unseren federn da / kende und die Mama / auch brenik baken  
dun / wir haben doch gar nidz / fon mel das ist doch so / draurich wen man kra(n)ke /  
kinder hade da sachte die / Frida mama wen konm / nur unser basike wo unser / feder  
karl uns abgeschikt / hade und die schwegern / karina hade der emilie / auch geschriben  
(durchgestrichenes Wort) / hede 10 daler abgeschikt / wend ir das abgeschikt / hat so  
seid so gud und / sed fon draus nach wie / das ist das wir nitz bekommen / das es nicht  
ferloren ist / (drei zeilen unlesbar) / gude Nacht ir meine liben es ist zeid zum

schlafen ???

Page 3, Right side:

Meiem bruder Seine frau / ist von ald norge sie / schreibt sich albrech und / meinem  
veder seine frau / ist von kamischink heist / odilie und er hiest mardin / und schreibt  
sich schmid / und sind in bordland / organ sie waren auch / beinader der schwager /  
Konztandin ab had auch geschriben / die schwagern amalie / ist doch auch geschtorben /  
da fidet er sich so verlaßen / und had geschriben an / mein schwager abrand / der had  
meine schwester / Maria der goste hat geschriben / er hede schon drei brife / geschriben  
an mich und

Page 4, Right side:

Und ich habe sie nich bekommen / da hade er an mein schwa- / ger geschriben ob ich noch  
leben / ded aber nicht er had geschri- / ben da die amalie geschtorben / ist und ist in der  
fremde / und ist kein vreind um in / er wonde unich Kamischinke / es ist im so schwer er  
meg- / te liber (durchgestrichenes Wort) nicht auf der / weld sein liber schwager / Karl  
und schwegern amalie / das ist ein schmertz der ist icht zu heilen der goste und / die  
amalie haden sich beschro- / gen wie sie noch am leben / war wie der paul tot war / sie  
wolden einz von meinen / (durchgestrichenes Wort) Kindern holen beisich / das ist  
schwer wen man / so ferlaßen (durchgestrichenes Wort) ist

Page 5:

Liber schwager Kalr noch / eine bide an dich wen du / wilsd und kand den paul /  
vergresern laßen draus und / kand mir ein bild schiken / jezt winsche ich eich eine /  
frelige weinacht ir kend / eich doch noch vreien aber / ich nicht wen noch ein abn- / emer  
komt da laß ich mich / abnemen mid den Kindern und / schike eich bilder einen grus /  
von der Emilie sie ist auch / noch gesund seid nicht beleidicht / weil ich so vil geschriben  
/ habe und so schwach ich hab / schon lange nicht geschriben / ich mus wider schreiben  
lern- / nen lebt wol bis auv das frohe wider sen

Page 6, right side:

1: ich winsche / mich ??rt bei / eig mit meinen Kinder

2: das ist das was (zwei durchgestrichene Worte) / die Frida in der Schule / llerd jetzt wen sie gesund / ist mist sie doch wider in die / schule und had schwach mundiring

Quer:

Es ist winder und ist mid ales schwach mid

Auf dem Kopf:

Fuder wie (unlesbar) mid brand

Page 6, left side (封筒):

Russisch / Nord-America / Mr Carl Meisner / Greeley Colorado / R. 2 Box 150 / U.S.S.R /

Russisch / Russisch

手紙 1 1

Page 1:

geschrieben den 20 März im Jahrgang 1925 / liebe schwester Katarina und Schwager Friedrich / jetzt will ich euch bekandmachen das wir / noch schön gesund sind welche gesundheit / die wir euch winschen / liebe schwester seid doch so gut und schreibt doch auch einmal / wie es euch geht und steht liebe schwester / sei doch so gut und schikt uns eure adres / das wir an euch schreiben kennen den wen / wir an euch schreiben wilen so müssen wir / in den Feter Karl seinen Brief legen / jetzt will ich euch bekandmachen das es / bei uns so arm ist wie im 21 Jahrgang / die leute ligen ale ??? / lieber Veter Friedrich und wes Katarina / und sind geschwolen for hunger / lieber feter Friedrich und wes Katarina / jetzt will ich euch bekandmachen das es / bei uns ales getollen geworden ist / und da keint ihr denken wie es bei / uns geht und steht wen man

Quer geschrieben:

das ist für den Friedrich schwager

Page 2

nichts hat lieber schwager / Friedrich und schwester Katarina wir / bitten euch das ihr  
uns etwas helfen / könnt aber wenn ihr könnt und wollt / liebe schwester katarina und  
schwager / Friedrich sei nur so gut und schickt uns / etwas denn der Friling kommt wieder /  
herbei und das muss gestellt werden / und ist nichts da denn ihr wisst wenn / man nicht  
(unlesbar) da kann man nichts / ernden zum Schluß seid noch ein / mal gekrüst und  
geküst von uns / alle von mir deiner schwester Emilie Khäfer / und von mir Bertra  
Schöfer wir hoffen / auf baldige Antwort liebe schwester / ich ??? mich und stehe auf ??? /  
denke immer an euch alle ich habe / von der heute Nacht getra(m)t du warst / dagewesen  
und da habe ich dich / (QUER) das habe ich geträumt / fest grid und hab mich recht aus  
geweint

Quer linke Seite:

Das ist für Friedrich Fritzer

手紙 1 2

Page 1:

geschrieben den 20 März im Jahrgang 1925 / Lieber Bruder Karl jetzt muss ich dir meine  
Freude / schreiben wie froh das ich bin. Lieber Bruder Karl / Meißner jetzt eine schöne  
gruß und Kus von / mir deiner schwester Emilie Meißner. Lieber Bruder Karl gleich im  
anfang will ich dir bekandmachen / das ich den Brief bekommen habe denn ich habe auch /  
schon wieder zurückgeschrieben an euch alle ein Bledchen / für die was Katarina und  
schwager Friedrich und / Bruder Friedrich und am Bruder Karl für jedes / ein Bledich.  
Ligt in den Brief wo wir am 9 März / geschrieben haben. Lieber Bruder Karl gleich im  
anfang / will ich euch die bekandmachen das wir heute das / gelt geholen haben wo ihr  
für uns geschickt habt. / und Lieber Bruder Kalr ich bedanke mich so sehr / dafür das du  
dein herz nicht zugeschlossen hast für / mir denn ich habe dir es auch schon geschrieben  
weger / was das ich (durchgestrichenes Wort) schon gesagt habe Lieber Bruder / Kalr  
ich war so froh wieder geschrieben hast das du / uns gelt schicken wirst denn ich habe gar  
nichts zu / essen. Lieber Bruder Karl wenn du uns (durchgestrichenes Wort) nicht / kein  
gelt geschickt hest so were ich mit meinen / 3 Kinder ferhungert denn es hat gerade bei

mir gestanden / wie man get und steht. Lieber Bruder Karl wend ihr / uns wieder etwas zu hilfe kommen welt dan dut / es durch die täusch bank schiken den da ist es / gleich ausgehandelt wie unser gelt, (Rest durchgestrichen) / (komplette Zeile durchgestrichen) / (Anfang durchgestrichen) den hir bei uns mus / man erst fordund mus es aushandeln und da / bekommt man gar nicht so fill dafür Lieber Bruder / Karl Meißner und schwegerin Amalie Meißner / jetzt einen herzlichen Dank das ihr beide eure herzen / nicht for uns zugeschlossen habt den bei uns ist

Page 2:

es sehr arm und elendig beiuns ist es wider so / wie im 21 Jahrgang das die läuten in den Beter / liegen und sind geschwolen for hunger und so / war es bei mir geleifelt so went ihr das / nicht geschkt het. Lieber bruder Karl jetzt will / ich dir bekindmachen wie deuer das es bei uns / ist das weißmel ist 4 Rubel und das Kornmel ist 3 Rubel under hirsen ist 2 Rubel 60 zuh und die / Kornschrad ist 2 Rubel 50 zuh das öll ist 17 Koblekum / das sind die essmiterjalen so ist der breis bei / uns die Kartoffel sind 75 Kobeken. Lieber Bruder / jetzt will ich euch auch etwas fon der schwester / amalie schreiben sie ist noch schön gesund es get ihr / so (durchgestrichenes Wort vielleicht: zu) gut mit ihren MMann den sie haben keine / Kinder under bekommt 40 Rubel den Monat wo er / ist. Sie hat sich einen (durchgestrichenes Wort) Kugekauft (Kuh gekauft) / und sie war in einem jahr ein malhofen gewes(Ende fehlt) / bei uns und sie wolt von uns schreiben / am euch den wir haben immer keine andword / bekommen udn da wolt sie von uns schreiben. Lieber / Bruder (durchgestrichenes Wort) seidnoch einmal gekrüst und geküst / von mir deiner schwester Emilie Schäfer und auch / von uns Kinder einen schönen gruß und Kuß / von uns Kinder das ist für euch lieber feter / Karl diesen Brief hat geschrieben eurer schwester / Emilie ihrer Tochter Berta Schäfer wir hofen auf baldige / andword.

手紙 1 3

Page 1:

geschrieben den 14 Noveber Im Jahr 1931, / dieser brif ist von mir deiner Schwester /

und Schegerin Emilie Meißner und / jetzt lieber gebrüder und geschister und / schweger  
Seit alle herzlich gegrißt und / geküßt mich namens euch, gleich / im anfang meines  
Briefes will ich euch / benachrichtigen das wir noch alle / schein gesund sind dieselbe  
gesundheit die wir euch wünschen, und auch / benachrichtigen das wir euhren / brief  
erhalten haben und das war / so eine große Freude das ich wider / von euch gehert  
haben das ihr noch alle / beileben seid das hat mich so erfreut / das ich mich recht  
ausgeweint hab, / und ihr hab geschrieben ihr (durchgestrichenes Wort) det / mir 10  
Daller schicken (durchgestrichenes Wort vielleicht: bo) aber ich / hab sie noch nicht  
bekommen ihr hat / geschrieben ich soll gleich schreiben ob wir / (g)es Glück haben wir  
haben es noch nicht

Page 2:

Aber wenn wir es Glück haben da schreibe / benachrichtigen wir es gleich zu euch und ich dank / euch  
vielmals dafür das ihr noch was / vor mich hat, Ihr hat geschrieben wir / (durchgestrichenes  
Wort vielleicht: sogl) sollen schreiben von allen v(r)eintem / und von dem Schotewitzm  
das Schotte / Fridche ist nicht mehr in Grin der ist / am der GFGas mit seiner ganze /  
Familie, liebe schwister du hast / geschrieben ihr hat hoffen das ihr miah fein / kommt aber er  
wird nicht mehr / können wir werden uns nicht mehr / zu suchen von Schutters ist weiter /  
keins mehr da alles wie (unter „wie“ durchgestrichenes Wort) was / ?ma mit ihr 3 lieben  
und die / hulen auch schon geheilt und haben / auch Kind zum schluß seid alle / herzlich  
geküßt und geküßt ganz / grund uns herzlich amen grüßt / mir alle auch alle die noch d?nr /  
Fragt, auch ein gruß vom ??? Paul / an euch alle, veter und ?????/ (Rest des Briefes  
fehlt)

手紙 14

Page 1:

geschrieben den 17 September im Jahr 193(3/9) / von mir deiner Schwester Emilie und  
Kinder / an dich Bruder Karl und Schwester Amalie / Jetzt lieber Bruder will ich  
wieder / an dich schreiben das wir noch alle / schön gesund sind dieselbe gesundheit / die  
ich auch auch wünsche. und weiter / will ich dir benachrichtigen das ich / deinen

Briferhalten habe und habe daraus / erfahren das ihr noch schön gesund seid / aber  
bei uns im grim ist eine grose / Traurichkeit unserfreinde sind balt / ale aus gestorben da  
(durchgestrichenes Wort) bin ich noch / ganz allein. Jetzt will ich euch bekant / machen  
dass ich von der amalie iren / Marina einen Telegram grit habe / das sie den 6  
September gestorben ist / die schester amalie und det den 8 / september ??? bekraben  
werden da sollde / ich zu ihr komen aber ich habe kein gelt

Page 2:

das ich hin varen konnte und da habe / ich mich zu hause recht ausgeweint wie / ich  
noch alleine bin der Baul ist ge / storben und ich war auch schon balt verhungert / aber  
jetzt get wieder ein bischen da / hat man ge?wes und Riben zu essen / ich war schon so  
weit ??? mich aus / den Kalgif heim varen miste und / da habe ich gelegen 14 Tage und  
war / sehr schwach und Jetzt ist es beser da / velt nicht alls esen und da ist nichts / wan  
den Kolkktiv griche ich 200 Kram / schot das ist ales was ich grichen liber / Bruder went  
ihr so gut weredt und / dut mir nur 10 Taler im Jahr schiken / ta brichte ich mich nicht  
in den kolekif gesvelen / da du ich mir kartofel steken und da ken / ich leben  
(durchgestrichenes Wort) zum schlus seit ale gegrist / von uns und gekist und seit so gut  
und / schreibt gleich zurik an mich amen

手紙 15

Page 1:

geschriben im Jar 1933 den 13 / februar von uns euren freinden und / bruder paul  
meißner an euch / libe britder fridrich und Karl / Meißner gleich im anfang seit herzlich /  
gekriset mit grus und kus der libe mit schwächern und kindern und / ale so wie ir seit in  
amiriga auch / an die geschwächer und geschwistern / mit ihren Kindern sagt wolen wir  
/ eich bekant machen das wir euren / an uns geschribnen brif (vom 9 dezember) richtig  
und / mit groser freide erhalten haben (am 7 januar) und / daraus erfahren das ih(r)  
noch schön / gesundt und am leben wart wel- / ges (welches) uns die gröste freite war /  
den das ist das beste auf der welt / jezt libe briter wil ich euch / schreiben wie das ist  
weil es / so lange gedauerd hat das ich / euch keine nachricht geschikt habe

Page 2:

ich habe auf ein andern brif gewartet / weil der bruder Karl geschriben hat / ihr wold  
mir wider bischen helfen / und wolt auch ein brif schiken / da habe ich gewartet aber es  
ist / jezt schon ein monadt und ich habe / noch kein brif da wil ich euch / wider schreiben  
den es ist mir / libe brüder eine schande immer / an eich zu schreiben und ir werdet /  
auch sachen der hat auch kein scham / wir misen den grat ??? das ist / auch so wen ir  
mir nicht helfft / dan sind wir verloren und wen / es nur noch 10 dolar sind den / ich kann  
es euch nicht schreiben / wie draurich es steht bei uns / und wen ich es auch schreiben  
du / und kend da dut ir es doch nicht / glauben den das ist gleivelt / unmeglig das man es  
glauben / kann aber es ist so ?ir

手紙 1 6

Page 1, right side:

geschriben im jar 1933 10 / Sebtämr jest einen / herzlichen grus und kus von / mir  
Kahtharina Meißner an / eich libe Schwäger und Schwägerinen / nemlich Fridrich und  
Ka(r)l / Meißner jest will ich eich beka(n)d / machen das die amalia auch / gestorben ist  
eir schwester / sie hat sich meinem / man nach gemacht sie ruen / in der küln erde wen  
ich / mit meinen Kinder aug dort / wer wie wol die wo ruhen / aber die wo zurik bleiben /  
fier die ist es schwär ich / habe mir schon oft den tot / auch gewünschen aber er / komt  
nicht wie draurich ist / es wen man kein man mer / hat da ist man ferlaßen von / beide  
seiden ich war auch / kra(n)k gewesen da war es so / draurig da hat man kein / kraft jest  
wil ich eich beka(n)d / machen das ich die zweide 5

Page 2, right side:

daler noch nicht bekommen / habe und der posthalder hat / gesacht ich sol nig schreiben  
/ ir sold nicht mer so schiken widi erste 5 daler geschikt / hate die amalia war nog / mein  
dorst aber jest ist ales / vord die amalie ist nicht so / die amalia war vil leidseliger / wen  
sie kam da wuste sie / nicht was sie tun solde / irem bruder paul sie konde / ire libe nicht  
aus tun schreibe / mal wie ir die lezte 5 daler / geschikt hate obt ir wider / das geld im



brifsak hate / geschikt hate oder so wie die / zen daler mit / babire libe Schwäger fergest  
/ mich nicht den meine ki(n)der / si(n)d noch so klein da wo / sich der Paul siech imer / so  
gedangen hat gemac(h)t / wie er sich fest hat gelet / da hate er ser geweintt / iber seine  
ki(n)der er sagte / ist das ist wider erste mal

(Quer rechts) in langer zeid das ich schreibe

(Quer links) seid nicht beleidicht weil es so schwach geschriben

Page 1, left side:

liebe vrau ich wolde gerne / Sterben wen nur / meine Kinder auch mit / mir gehen deten  
da sachte / er ich hate noch nichts gutes / auv der welt wie ich / klein war da muste ich  
immer / under den leiden sein und / jest das ich für mich austede / komen da mus ich  
immer kra(n)k / sein und mus der weld zum / st?od romlaufen das ist mir / zu schwer  
das er mir nicht sagen könnte so megstu / es auch nog kein wort er / hate inseinem ??ob  
geglacht / da war er immer ire gewesen / 13 tagen lange wen ich mich / um schauue und  
sei seim / kleidung und sein hufelge / scher wo er gearbeitet hate / da mein ich ganigt  
das / es nur sein kede mein einsicher / trost ist das wir alle noch / sterben mißen und er  
hate / alles iber standen greiz leiden

Page 2, left side:

angst und pein jest liebe / Schwager will ich eig schreiben wie / alt das meine Ki(n)der  
sind / die Frida ist 8 jare alt und / der Fridrig 4 jare alt und da waren wir auv den  
fridhov / gangen ich und die Frida da / haben wir uns recht sat 7 geweint und wie wir  
nach / hause sind gekom da sachte / die Frida Fridrig ich war bei / unserm papa da  
sachte er / ich ge auch hin er ist wol / aus dem grab haus ich will / beiin wir weinen alle  
abe(n)d / uns sat und den morchend / wesche ich mich mit / trenen fest lib Schweger will  
/ ich eig schreiben was ich geär / nt hab von äfel aus dem / garden 10 säckerl Kardovel  
habe / ich noch nicht aus da wird / so vil gestolen durch die gros / armut mir sind  
mei(n)e hüner geholt kardofel ernd / ich auch ??r und auch riben / aber kein mel habe  
ich nicht

Page 3:

das ist doch so draurich / eiren brif vom 9 juli den / habe ich bekommen die Emilie / sachte  
iber die leite der / bruder ist tot die bekom / niht mer da sachte ich der schwager

Page 4:

Ka(r)l hate immer getan was er / ka(n)de und da ???? ich er dete / mich doch nicht  
vergesen jest wil / ich mein schreiben schlisen und / eich noch mal grisen lebt wol b /  
hofe auv baldige andword zuschreiben

手紙 1 7

Page 1, Left side:

schreibt nur / glei zurig und / laset auch nich / Trauf ankomen / den ihr habt meiner zeit  
wie ich

Page 1, right side:

N 1 / geschriben den 26 Mäi im Jahr 1934 / geschriben von mir deiner schwester /  
Emilie mit Kinder. gleich im anfang / meines Brifes will ich dir bekandmachen / das ich  
deinen brif Erhalten und haben / auch das gelt grit das war 1 Taler / wich ich im  
aufgemacht habe und / da war ich so vroh um den Taler / den es war gerade auf der  
Spitze / mit uns. lieber Bruter du hast / geschriben ich sollte mich mal abnemen / lasen  
vor das gelt (ich) hate es auch / gerne getan aber das get mit den / besten wilen nicht.  
Ich habe den Taler / im d??? Targsin aus gehandelt vor 10 / kilo weismel und 6 Ru?fekt??  
/ lieber Bruter ich Tange dir vilmal / davor das du in meinern grusten not / komen bist.  
Jetzt weiter will ich euch

Page 2, left side:

N 2 / bekandmachen das wir von dem / andren gelt noch nichts haben bis jetzt / jetzt  
weiter will ich dir vil glig / winsen zu eire junge Tohter ich / Tete gerne leich auch  
Kindbet halten / jetzt will ich euch mal schreiben / was ich harleiten tu auch in dem /  
kolektiv am Talag schafen da / gehe ich morgens m 8 Uhr / auf die Arbeit bis Abens 8

Uhr. / und grihen wir Brot und / 9 hundert kram Mehl den Tag / da misen wir zu 2 ???? /  
ganzen Tag da kend ihr euch / Tenken wie s??? das man den / ganzen Tag ist nun wil ich  
/ mein schreiben schlisen zum schlus / dder libe seit ale herzlich gekrist / griß mir auch  
meine andere geschwister

Page 2, right side:

N 3 / und schwage mit kinder die / Katarina und Fridrich und Elisabet / mit ihrin mann  
und Kinder / ich tete gerne vil schreiben / aber ich habe keine zeit dazu / Jetzt will ich  
euch bekandmachen / das es bei uns noch gar / nicht gerechenet hat das ist / ales zu  
Tragen die vrucht ist / schwach. geschriben von mir / euhe schwester ihr Tochter / Berta  
an euch liebe Verter / und wese und habgeschwister / auch ein gruß von mir an euch ale  
ich bin gan beleidich / ich lase euch im jetem Brif / grisen und ihr mich noch nicht /  
einmal auch noch gar nicht / wen man schrechen will.